

史跡鳥取城跡附太閤ヶ平 発掘調査報告書Ⅲ

— 第34次発掘調査 —

2016

鳥取市教育委員会

史跡鳥取城跡附太閤ヶ平 発掘調査報告書Ⅲ

— 第34次発掘調査 —

序

鳥取市の中心市街地にそびえる久松山に所在する鳥取城跡は、鳥取藩 32 万石の政庁として栄えた面影を今に伝える貴重な史跡であり、先人たちの努力により、今日までその様相が伝えられてきました。

文化財は、地域の財産として後世に伝えるため保護・保存に努め積極的な活動を図って行かなければなりません。鳥取市では、現在『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存整備基本計画』を策定し、関係各機関・専門家の指導を得て長期的な保存修理事業に取り組んでいます。今回の報告は、その一環である大手登城路復元整備計画に基づき、国庫補助金及び県補助金を受けて、平成 26 年度に実施した史跡鳥取城跡第 34 次発掘調査の記録です。

なお、この報告書は不十分なところも多くありますが、私たちの郷土の理解に役立てていただくと共に、今後の調査研究の一助となれば幸いです。

平成 28 年 3 月

鳥取市教育委員会
教育長 木下 法 広

例　言

1. 本書は、鳥取市東町2丁目・円護寺・栗谷町・百谷・小西谷に所在する国指定史跡鳥取城跡附太閤ヶ平において実施した、国庫補助事業「史跡鳥取城跡附太閤ヶ平復元保存修理事業」に伴う発掘調査報告書である。
2. 本書は、平成26年度に実施した史跡鳥取城跡保存修理事業に伴う発掘調査報告書である。
3. 本書で報告する発掘調査は、鳥取城跡復元整備計画に伴い、鳥取市教育委員会文化財課が実施した。
4. 遺構写真および遺物写真是調査担当者が撮影した。
5. 検出遺構の三次元測量・図化・オルソ図作成については、株式会社四航コンサルタントに委託した。
6. 本書の執筆は鳥取市教育委員会文化財課が行った。
7. 本書で使用した標高は東京湾平均海面高を基とし、方位は日本測地系座標V系の座標北を用いた。
8. 出土遺物ならびに図面類は鳥取市教育委員会文化財課で保管している。
9. 本報告書において使用する25000分の1地形図は、鳥取市発行の「鳥取市管内図」を使用し、調査区周辺の地形図については鳥取市発行の都市計画図、史跡指定地範囲については鳥取市教育委員会作成の地形図を使用した。
10. 発掘調査および出土品整理の整理に際しては、下記の機関ならびに個人から指導・ご教示をいただいた。記して深甚の謝意を表する。

文化庁記念物課、鳥取県教育委員会、鳥取県立博物館、鳥取市歴史博物館、鳥取市埋蔵文化財センター、北垣聰一郎、田中哲雄、斎和善、浅川滋男、中橋文夫、谷本進、大鶴陽一、中森祥、鳥取県立鳥取西高等学校、(公)鳥取市公園・スポーツ施設協会(順不同、敬称略)

目　次

第Ⅰ章　調査の経緯と目的

1　調査に至る経緯	1
2　調査体制	2
3　指定の詳細	3
4　保存整備計画の概要	4
(1)事業の目的	4
(2)事業の方針	4
5　大手登城路復元整備計画の概要	4
(1)経緯	4
(2)大手登城路の現状	4
(3)復元整備の目的	5
(4)復元整備の基本方針	6

第Ⅱ章 立地と環境

1 位置と地形	7
2 歴史	7
(1)中世鳥取城	7
(2)初期近世鳥取城	9
(3)前期近世鳥取城	9
(4)中期近世鳥取城	10
(5)後期近世鳥取城	10
(6)近代鳥取城	11
3 構成	11
(1)山上ノ丸	11
(2)山下ノ丸	11
(3)山腹の遺構群	12
4 既往の発掘調査	12
5 調査区周辺の変遷	17

第Ⅲ章 調査の結果

III-1 調査の概略	19
1 調査の目的	19
2 調査区の設定	20
3 名称および出土遺物について	25
III-2 第1調査区	25
1 調査経過と基本層序	25
2 調査成果	27
(1)幕末期路盤面	27
(2)瓦廐窓穴	29
(3)地中梁状遺構	30
(4)石段	31
(5)ピット状遺構	31
(6)第1トレーナー(Tr-1)	33
(7)第2トレーナー(溝1)	49
(8)掘り下げ中出土遺物	49
III-3 第2調査区	53
1 調査経過と基本層序	53
2 調査成果	54
(1)幕末期路盤面	54
(2)中ノ御門表門	64
(3)中ノ御門櫓門	66
(4)樹形石垣奥壁前瓦廐窓層	70
(5)溝1(大溝)	70
(6)溝2(登城路境界溝)	73
(7)溝3(櫓門背面溝)	77

(8)溝4(門内溝)	77
(9)溝5	77
⑩樹	79
⑪溝6	87
⑫橋門前石列(溝)	88
⑬御番人小屋	88
⑭雁木	96
⑮焼土層	96
⑯掘り下げ中	96
⑰近代溝	99
⑱近代木樋	107
III - 4 石垣	113

第IV章 調査の結果

1 中ノ御門概略	135
2 復元検討資料	135
3 捨宝珠橋	136
(1)概要	136
(2)橋の変遷	141
(3)造構による下部構造の検討	143
(4)絵図・古写真による上部構造の検討	145
(5)橋の規格	145
(6)部材寸法の検討	145
4 中ノ御門表門	149
(1)概要	149
(2)表門跡柱痕跡遺構	149
(3)柱の配置・柱寸法の検討	151
(4)古写真・絵図による形式の検討	152
(5)屋根形式の検討－枝割・軒出の検討	156
5 中ノ御門渡槽の復元検討	156
(1)中ノ御門渡槽門跡の発掘調査	156
(2)橋門礎石	156
(3)柱軸線・寸法の検討	159
(4)古写真・絵図による形式の検討	161
(5)古写真・絵図による石垣等の検討	163
6 第1調査区第1トレンチについて	164

第Ⅰ章 調査の経緯と目的

1 調査に至る経緯

「鳥取城跡附太閤ヶ平」は昭和32(1957)年に国史跡として指定を受けたが、城跡景観を構成する石垣は昭和18(1943)年に発生した鳥取大地震(震度6、死者1210名)で崩落・崩壊が相次ぎ、戦後復興や昭和27(1952)年に市街地の多くを失った鳥取大火災の影響もあり、荒廃した状況であった。そのため、指定から2年後の昭和34(1959)年から石垣の保存修理事業が開始され、城の象徴であった三階櫓が建っていた二ノ丸石垣が修理された。昭和40年代に入ると城跡公園として、山上・山下の補修や看板設置などの環境整備が行われ、昭和47(1972)年には久松山整備審議会が設置され、堀の浚渫や石垣の修理が進んだ。昭和59(1984)年になると『保存管理計画』が策定され、城跡としてだけではなく、山林や自然を含めた山全体でのありかたを検討することとなる。

昭和34年以来修理の進む石垣であったが、公園整備の側面が強く昭和55・56年の二ノ丸跡調査以外、発掘調査が実施されることなく、古くからある二ノ丸三階櫓復元の要望に対し検出遺構からの具体的な検討をすることは出来なかった。また、昭和60(1985)年のわかとり国体開催に前後し再び高まった三階櫓復元の機運であったが、実現には至らなかった。

平成に入ると、天球丸などでの大規模な石垣修理に合わせて発掘調査事例も増え、城の実態が徐々にではあるが明らかとなりはじめ、平成17年度には具体的な復元事業として形を成すことになった。市民と専門家からなる検討委員会での検討と、パブリックコメントの実施により『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存整備基本計画』が策定され、その骨子が整い、翌平成18年度には『史跡鳥取城跡保存整備実施計画』が策定され、鳥取城跡の保存整備と調査研究が長期計画として決定された。計画では、現在不明瞭になっている近世城郭部分の全体プランの顕在化を大きなテーマとしており、可能な範囲での建造物復元等も含め、江戸時代末期の姿を顕在化するための整備を段階的に進めることとしている。

整備対象の第一段階として位置づけられたのが城のメインルートにあたる「大手登城路」である。この範囲については、遺構の保存状態が比較的良好と考えられ、顕在化による効果も高いため建造物を含む復元整備を視野に入れた整備計画としている。大手登城路は、鳥取県立鳥取西高等学校の主導線となっているが、建築後50年を経過した校舎は耐震化工事が計画されており、この際に史跡整備に必要な範囲を学校の使用範囲から除外し、大手登城路の整備を高等学校の改築と一緒にに行うこととしている。

なお、鳥取城跡内には、他にも、鳥取県立博物館が所在するほか、明治40年建築の仁風閣が現存しているが、現在の計画では、これらの併存を当面許容しつつ、史跡の価値を向上するための整備を実施することとしている。

2 調査体制

発掘調査および報告書作成時の体制等は以下のとおりである。

調査区の所在地は鳥取県鳥取市東町2丁目地内である。

【発掘調査】

平成26年度

期間 平成26年7月22日～平成27年3月27日

面積 1,860m²(第1調査区:760m²、第2調査区:1,100m²)

事務局 鳥取市教育委員会

教育長 木下 法広

文化財課

課長 林 佳史(～6月)

課長 森下 俊介(7月～)

参事兼保存整備係長 中道 秀俊

課長補佐兼鳥取城整備推進係長兼文化財専門員 佐々木 孝文

鳥取城整備推進係

主任 中島 泉

主事兼文化財専門員 細田 隆博

保存整備係

主任 幹 中野 弘昭(～6月)

主任兼文化財専門員 加川 崇

主任兼文化財専門員 坂田 邦彦(調査担当)

主事 石谷 純子

主事 山本 裕子

【報告書作成】

平成27年度

事務局 鳥取市教育委員会

教育長 木下 法広

文化財課

課長 森下 俊介

参事兼保存整備係長 中道 秀俊

課長補佐兼鳥取城整備推進係長兼文化財専門員 佐々木 孝文

鳥取城整備推進係

主任 中島 泉

主任兼文化財専門員 細田 隆博

保存整備係

主任 幹 加川 崇

主任兼文化財専門員 坂田 邦彦(報告担当)

主事 石谷 純子

3 指定の詳細

指定名称 国指定史跡 烏取城跡附太閤ヶ平（とっとりじょうあとつけたりたいこうがなる）

地番 烏取市東町2丁目、円護寺、栗谷、百谷、小西谷

指定面積 968.324m²

・昭和32年12月18日 東町地内を中心とした668.663m²が国指定史跡

久松山の南面(市街地側)と太閤ヶ平の2ヶ所を指定

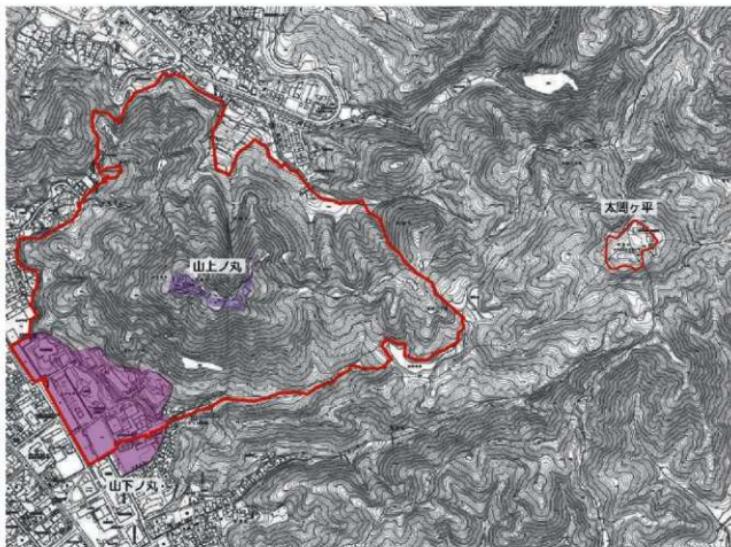
・昭和62年8月10日 圓護寺側299.611m²が追加指定

久松山北面(圓護寺側)を追加し、山全体が指定地となる

指定理由

・織豊時代から近世徳川時代に移行する転換期の歴史に深い関係を持つ史跡であること。

・城跡の構成が、山城的形式を残す山上ノ丸と中腹の砦群等の古い城跡遺構に対し、近世的城郭形式を残す山下ノ丸を中心とする新しい城跡遺構が新旧重層して併存すること等が学術的に評価されること。



第1図 烏取城跡附太閤ヶ平史跡指定範囲(1:15000)

4 保存整備計画の概要

(1)事業の目的

鳥取城跡は、戦国時代の山城を起源とし、鳥取藩32万石という国内有数の大藩の居城として江戸時代を通じて存続した点から、我が国における城郭の発達史を概観できる史跡である。鳥取市は、昭和32年の国史跡指定以後、鳥取城跡の保存管理に努めてきたが、近年の都市環境等の変化により、鳥取城跡が果たしてきた役割が見失われがちとなっている現状がある。そのため、今後より一層、国指定史跡としての鳥取城跡の本質的価値を広く国民に発信し、更に魅力あるものとして、後世に引き継ぐことを目的に、平成17年度に『史跡鳥取城跡保存整備基本計画』を策定した。

(2)事業の方針

鳥取城跡の本質的価値は、①所在地としての久松山の自然環境、②太閤ヶ平を含む中世城郭群、③藩主の居城としての近世城郭という異質な要素が重層的に存在しているところにある。これらの要素がもつ特質を調和させ、その価値を一層引き出し、適切に保存・管理を行い、整備・活用を図るため、下記の項目に分けて事業の方針とする。

表1 方針の概要

区分	方針
久松山 自然環境	自然植生を調査し、城郭史跡として遺跡の保存を優先することを前提に、身近な都市緑地である久松山の自然環境を適正に維持管理し、良好な緑地保全を図る。
中世城郭	史跡内の遺構分布調査を実施し、調査研究をもとにその価値を明瞭化する保存整備方針を個別にまとめる。
近世城郭	現在の城跡景観を決定づけている近世鳥取城については、その特性と歴史的重要性を可視的に理解できるように、繩張りをはじめ全体構造を明瞭化するための整備を行う。江戸時代を通じて藩主の居城として改変を繰り返したことから整備年代は幕末に設定する。建造物は、遺構・絵図文献及び写真等の検討により、復元検討を満たすもののうち、整備効果の高いものから段階的に行う。 ①城の骨格を明瞭化するため、大手登城路の復元的整備を段階的に行う。 ②象徴的存在であった二ノ丸の三階櫓・菱櫓・走櫓等については、調査研究を継続し、復元を検討する。
既存施設	仁風閣(国重要文化財)は、その価値を損なう移築は困難であるため、城跡と併存させる。 その他の施設(県立鳥取西高等学校・県立博物館)は、当面史跡整備と整合性を図りつつ併存させるが、将来的に移転を含めて「あり方」を検討する。

5 大手登城路復元整備計画の概要

(1)経緯

平成17年度、鳥取市は『史跡鳥取城跡保存整備基本計画』を策定し、長期的整備の構想を明確にした。平成18年度には、「基本計画」の構成に基づき、その第1段階と位置付けた大手登城路復元整備の実現にむけて、具体的な内容と方針を定め、「史跡鳥取城跡保存整備実施計画」を策定した。

(2)大手登城路の現状

大手登城路は、内堀の中央に架かる擬宝珠橋を渡り、城の中核へ至るルートで、近世鳥取城の正面にあたるシンボルゾーンであった。しかし、現在は、かつての擬宝珠橋は歴史性を無視したコンクリート橋に変わり、桁形石垣の一部が撤去され、県立高校の通用道となっている。このため、史跡内における裏道的な作業用通路と誤解する市民も多く、史跡としての本質的価値を著しく損なっている。

(3)復元整備の目的

大手登城跡復元整備は、城の正面観を回復し、近世鳥取城の骨格を顕在化するものである。その中で特に建造物の復元は、鳥取城跡の理解を深め、その価値と魅力を大きく向上させるだけではなく、市民の歴史や景観に対する意識を呼び覚ますことが可能となる。また、この整備は、当面共存する県立高校が与える城郭景観への負荷を軽減できる。さらに県立高校の生徒に、単に城跡に所在する学校施設で学ぶ

表2 保存修理事業経緯

1957	昭和32	国史跡に指定される。
1959	昭和34	二ノ丸三階櫓周辺石垣修理(崩落部分の復元・解体修理 ※昭和40年まで)
1967	昭和42	西坂下御門周辺石垣修理(崩落部分の復元)
1968	昭和43	三ノ丸大手登城跡脇石垣修理(崩落部分の復元)
1970	昭和45	坂口御門石垣修理(崩落部分の復元・解体修理 ※昭和46年まで)
1972	昭和47	内堀石垣修理(崩落部分の復元)
1973	昭和48	内堀石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)
1974	昭和49	内堀石垣修理(解体修理・近代石積補修)
1976	昭和51	内堀石垣修理(天端石補足)、西坂下御門上石垣修理(崩落部分の復元)
1978	昭和53	大渡櫓石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)
1979	昭和54	表御門石垣修理(解体修理)、走櫓石垣修理(崩落部分の復元・解体修理 ※昭和57年まで)
1983	昭和58	菱櫓石垣修理(解体修理 ※昭和62年まで)
1984	昭和59	『保存管理計画』策定
1988	昭和63	二ノ丸三階櫓下段(解体修理 ※平成3年まで)
1989	平成1	天球丸石垣修理Ⅰ期(解体修理 ※平成8年まで)
1990	平成2	走櫓下階段脇(崩落部分の復元、解体修理)
1997	平成9	扇廊跡石垣(解体修理)
1998	平成10	太鼓御門北石垣(崩落部分の復元・解体修理)
2000	平成12	楯蔵石垣(崩落部分の復元・解体修理)
2004	平成16	天球丸石垣修理Ⅱ期(解体修理 ※平成23年まで)
2005	平成17	『保存整備基本計画』策定
2006	平成18	『保存整備実施計画』策定 翌年から『鳥取城調査研究年報』刊行
2009	平成21	天球丸遺構復元
2010	平成22	天球丸巻石垣復元(崩落部分の復元、※平成23年まで)
2012	平成24	天球丸巻石垣前広場整備、楯蔵下段石垣(間詰石補修)
2013	平成25	天球丸腰石垣修理(解体修理)
2014	平成26	天球丸腰石垣修理(解体修理)
2015	平成27	天球丸腰石垣修理(解体修理)

という意識ではなく、より価値が明確になった史跡鳥取城跡内で学ぶという意識を定着させ、生徒の文化財愛護の意識高揚も図ることができる。

(4)復元整備の基本方針

大手登城路復元整備における基本方針は、「保存管理計画」(昭和59年度策定)、「保存整備基本計画」(平成17年度策定)等と整合を図るものとする。

建造物の復元にあたっては、遺構の保護を大前提とする。また、十分な調査研究を行い、近世鳥取城の正面觀を回復する史実性の高い整備を行うものとする。復元の時代設定は、江戸時代を通じて藩主の居城として増改築を繰り返した鳥取城の特性から幕末(城としての最終段階)とする。



第2図 復元整備イメージと現況写真

第Ⅱ章 立地と環境

1 位置と地形

鳥取県東部に位置する鳥取市は、平成16年に実施された8町村との合併により、面積765.31km²、人口19.1万人を有する県庁所在地である。市の中心城である鳥取平野は、中国山地に水源を持つ千代川及びその支流によって形成された沖積平野であり、鳥取城は、扇状に広がった鳥取市街地背後、平野の東北端にそびえる久松山(標高263m)に占地する。久松山は中世末の花崗岩からなる孤立峰で、山頂は鮮新世火山岩類の玄武岩が覆う。この鳥取平野は因幡国に所在し、山陰諸国を貫く東西交通と、山陽地方とを結ぶ南北交通との結節点にあたる要衝の地であった。鳥取城はまさにその平野を掌握する場に立地し、久松山上からは、鳥取平野の大部分を見渡すことができ、千代川の河口や西の伯耆、東の但馬へ続く海岸線なども望むことができる。鳥取城を扇の要として鳥取市街地が広がるのも、その起源が鳥取城下町であることを如実に示している。

久松山は南西面とその背面が急峻な地形である。一方、北西は標高100m付近で尾根伝いに丸山方面の山塊と繋がり、他方、東側に横たわる山塊とは標高150m付近で尾根伝いに繋がっている。久松山麓の西面はかつて日本海へと注ぐ袋川の旧河川が蛇行して、低湿地を形成していたと言われ、鳥取の城下町は懸構の開削などで低湿地帯を克服しながら形成された。また、古代の中心地であった国府周辺へと続く古道が山麓を通っていたと考えられ、久松山麓は古くから河川交通と陸上交通の要衝であったと言われている。

2 歴史

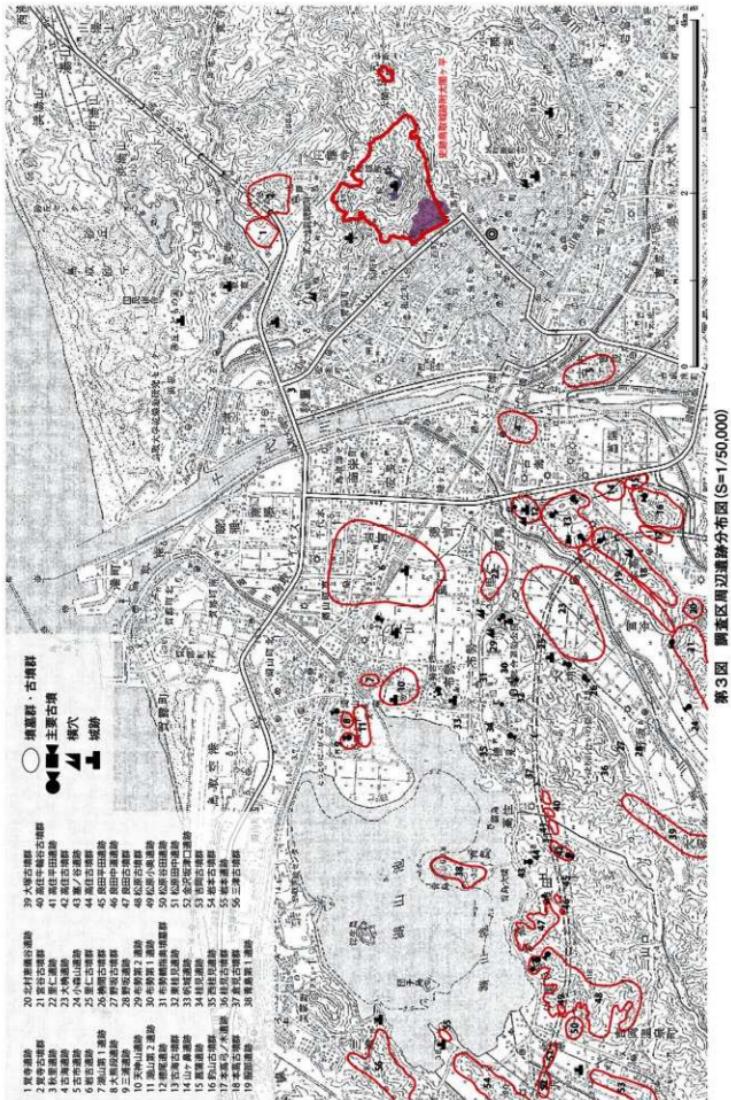
鳥取城は大きく分け中世鳥取城(土の城)と近世鳥取城(石の城)との2種類の城郭で構成される。中世鳥取城は、中世山城を由来とする、久松山頂にあった砦的な城であり、天正8・9(1580・81)年の羽柴秀吉による鳥取侵攻までの城を指す。近世鳥取城とは、鳥取侵攻の後、久松山の麓野に築かれた石垣を持つ城のことと言い、江戸時代を通じて使用された近世城郭である。近世鳥取城はさらに、江戸時代の初頭、5・6万石規模の城郭であった初期近世鳥取城、因幡・伯耆2ヶ国支配体制となり32万石の政府として整備された前期近世鳥取城、享保5(1720)年の石黒大火による焼失から復興し、拡大してゆく中期近世鳥取城、幕末の動乱期に最終的な整備が進む後期近世鳥取城に区分して整理できる。

(1) 中世鳥取城

鳥取城の起源は天文年間(16世紀中頃)に遡る。鳥取城の所在する因幡は、西の伯耆、東の但馬と共に南北朝以来、代々山名一族が守護職を継承してきた。しかし、天文12(1543)年頃までは伯耆が出雲尼子氏の傘下となり、尼子氏を背景に自国支配の強化を狙う因幡守護山名久通もまたその支配下となつた。これに対し、但馬山名守護山名祐豊は惣領家として先祖伝來の領国支配の回復などを目指し、山名久通と因幡の支配権を巡り銳く対立。この過程で但馬山名氏の戦略的拠点として鳥取城は誕生したと考えられている。

まもなく因幡山名氏は滅亡し、以後因幡国内は、かつて因幡山名氏の本拠であった湖山池湖畔の布施天神山城を中心には、但馬山名氏による支配が進められる。一方、鳥取城は天神山城の出城としての役割を負つた。ところが、これを守る武田高信が永禄6(1563)年に主家山名氏に対して反旗を翻す。これに対し、因幡守護山名豊國は諸勢力の協力を得て武田高信を鳥取城から退け、天正元(1573)年、守護所であつた天神山城から因幡の本拠を鳥取城に遷す。

同じ頃、鳥取城は中国地方を勢力圏とする毛利氏の傘下となる。一方、天下統一を目指す織田信長は



朝敵を因幡に接する但馬や播磨に広げつつあった。両国からの交通の結節点であり、毛利方の最前線となつた鳥取城。ここに織田・毛利軍の攻防戦が開始される。

天正8(1580)年、信長に命を受けた羽柴秀吉が因幡に侵攻する。秀吉の巧みな戦略の前に山名豊国は降伏を余儀なくされたが、秀吉が姫路に帰陣すると俄かに情勢が転化する。毛利勢が因幡まで勢力を盛り返すと、豊国の決定を不服とする重臣たちは山名豊国を追放し、代って迎えた毛利方の吉川経家と共に、再び秀吉に徹底抗戦し因幡国内を奪還する道を選ぶ。なお、豊国はその後、豊臣秀吉、徳川家康、秀忠のお伽衆として活躍した人物である。

天正9(1581)年、再び因幡に入った秀吉は、周辺の山々に大陣城群を巡らせ、鳥取城を厳重に包囲した。いわゆる兵糧攻めである。城兵はおよそ4ヶ月の間、飢餓状態で奮戦したが経家の自決をもって降伏した。この時に構築された秀吉側の陣城群は鳥取城を取り囲む山並みに今でも残る。特に本陣山(標高252m)には秀吉が在陣した太閤ヶ平を中心に「秀吉の長城」とも言うべき長大な防衛ラインがほぼ完成し、織田政権の軍事力の威力をさまざまと伝えている。

(2)初期近世鳥取城

天正9(1581)年頃から元和3年(1617)頃にあたり、5・6万石規模の時代である。山上ノ丸にはその頃の石垣遺構が残っている。一方、山下ノ丸の様子は、当該期の絵図でも知ることができる。内堀はこの時の経路をその後も踏襲したことが想定される。また後の中ノ御門以上に石垣化された南ノ御門が大きく描かれ、中ノ御門が大手門として整備される以前は南ノ御門が大手門であった可能性を示す。それに呼応するように城も後の三ノ丸背後の天球丸周辺に偏った構造である。これらの場所では城内最古の石垣や、それを土台にした石垣の扯張痕跡が多数見つかり、絵図の内容は発掘調査などとも符号する。

織田方に屈した鳥取城には新たに秀吉の有力家臣である宮部継潤が城代として入る。天正17(1589)年に至り豊臣秀吉から正式に知行を宛がわれ、継潤は因幡国7郡の内、4郡の5万石(但馬の一部を含む)を領し、名実ともに鳥取城主となった。宮部氏は息子・長熙の時に関ヶ原の合戦で西軍に属し改易となつたため、その業績は不明な部分が多いが、宮部継潤父子は因幡における織田政権の最重要拠点として、鳥取城を大改築したと思われる。それまでの鳥取城は自然地形を利用し、未だ石垣を用いない土造りの中世城郭であった。一方、宮部氏は新しいも新たに石垣などを構築し、織田系城郭としての石造りの鳥取城を築いたと考えられる。

慶長5(1600)年の関ヶ原合戦で徳川政権は樹立されたが、大坂城には豊臣家が健在で豊臣恩顧の大名に対する支配強化のため、徳川家康は厚遇する

池田家を西国境に配置したとも言われる。この時、姫路城に池田輝政、岡山城に忠維(輝政の次男)が入り、鳥取城には長吉(輝政の弟)が因幡7郡の内4郡6万石の知行を得て入城した。ここに西国境の瀬戸内から日本海を縦断する徳川政権の拠点城郭網が構築され、鳥取城はその一翼を担つた。なお、江戸時代の地図を根拠に、これまで鳥取城の現存遺構のはほとんどは池田長吉が構築したと信じられてきた。しかし、根拠となる『因幡民談記』(17世紀後半成立)には、局所的な普請の様子が詳述してあるが、現存遺構のはほとんどを池田長吉が構築したという記載はみられない。

(3)前期近世鳥取城

池田光政が32万石を領して鳥取城主となつた元



第4図 因州鳥取之城之図(部分)
岡山大学付属図書館所蔵

和3(1617)年の2年後から始まった城の改修から、城内をほぼ焼き尽くした享保5(1720)年の享保大火以前に該当する。5・6万石規模であった鳥取城が32万石規模の城として再整備され、天球丸や二ノ丸、三ノ丸など現在残る城跡の主要部分が整備された。これらの整備のほか、光政は内堀を城下側へ拡幅したことなどが記録として残る。二ノ丸には、藩主御殿をはじめ城の中枢施設が建てられ、それに至る大手登城路も整備された。また、元禄5(1692)年の落雷による天守焼失後、二ノ丸の三階櫓が名実ともに城の象徴とされた。



第5図 因幡国鳥取絵図(部分)
岡山大学附属図書館所蔵

存する遺構の大部分は、この時に構築された蓋然性が極めて高い。また、光政は城下町も拡張し、武家地には上水道を完備した。その町割や延長1.6kmの懸構、上水道の水源地はいずれも現存し、鳥取の中心市街地には光政の土木遺産が色濃く残っている。

寛永9(1632)年、岡山城主池田忠雄の死去に伴い、幼少の光伸が家督を継ぐと幕府は従兄弟の光政との国替を命じた。以後、鳥取城は光伸を藩祖とする鳥取池田家32万石12代の居城となり、国内有数の大藩の政庁として改修や拡張が繰り返された。特に幕末には、二ノ丸や三ノ丸の拡張などの大規模な増改築が行われ、現存する遺構の姿が整えられた。

(4)中期近世鳥取城

享保大火から弘化3(1846)年頃に該当する。

享保元(1716)年3代藩主池田吉泰は現三ノ丸である中ノ丸を2年かけて拡張・大改修し二ノ丸から居所を移し本丸とした。現在の三ノ丸の形態はこの頃形成されたものであるが、享保5(1720)年、城下より出火した火事の延焼で、鳥取城も数棟の建物を残し、城下共々久松山上までをほぼ全焼することとなる。近世最大の火事であるこの石黒大火により二ノ丸、三ノ丸、天球丸の主要施設も焼失したが、同時に再建作業が開始され、同年には正門である中ノ御門表門、翌年には大手登城路や三ノ丸を中心に復興が進み、藩主御殿が建てられた三ノ丸が名実ともに城の中枢を担った。一方、二ノ丸には、御殿は再建されず、被災15年にして、ようやく三階櫓や走櫓が再建された。以後、城内については小規模な修理や改築を続けた。

(5)後期近世鳥取城

弘化3(1846)年から幕末までの時期に該当する。

弘化3年、焼失したままの二ノ丸に藩主御殿のほか、菱櫓、表御門が再建され、城の中枢機能が一時に三ノ丸から二ノ丸に移った。また翌年には二ノ丸の拡張を願い出て2年後に完成、安政5(1858)年には三ノ丸南側に枡蔵が建てられ、最後の大改修は万延2(1861)年完成の三ノ丸整備があり、石垣を増築し、登城路を変更して三ノ丸の敷地面積を広げている。また、文久の改革による参勤交代緩和によっ

て、江戸から国元に帰る人々のために三ノ丸が拡張された他、国元に戻った11代藩主夫人のために扇御殿、宝隆院庭園(現存)が築かれた。さらに慶応3(1867)年には西坂下御門(現・復元門)が創建された。ここに城の最終形態となり、幕末を迎える。

(6)近代鳥取城

明治維新後の鳥取城は、陸軍省の所管となり明治12(1879)年には二ノ丸三階櫓の解体をもって全建物は撤去された。昭和18(1943)年の鳥取大震災により城内の至る所で石垣崩壊という甚大な被害を受ける。その後、昭和32(1957)年には、織豊時代から近世徳川時代に移行する転換期の歴史に深い関係をもつ史跡であること、城跡の構成が前記の歴史的推移と対応し山城の型式を残す山上ノ丸と中腹の砦跡等の古い城跡遺構に対し、近世の城郭形式を残す山下ノ丸を中心とする新しい城跡遺構が新旧重層して併存することが学術的に高く評価され、鳥取城は太閤ヶ平と共に国の史跡指定を受ける。昭和34年からは、山下ノ丸を中心に鳥取大地震で崩壊した石垣の復元事業が開始され現在も実施中である。

3 構成

鳥取城跡は、歴史的経緯から、室町時代に築かれた中世城郭と安土桃山時代から江戸時代にわたって築かれた近世城郭からなる。中世城郭としての遺構は、その後に開発を免れた山の各尾根に切岸で防御した削平地として残る。また、周辺の山々には、羽柴秀吉が兵糧攻めに際して築いた陣城群が残り、その中心となった本陣、つまり、鳥取城跡本丸から東に1.5kmの位置に残る秀吉本陣が置かれた「太閤ヶ平」は、鳥取城とともに飛び地的に国史跡に指定されている。鳥取城跡の国指定史跡名称が『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平』とされた所以である。近世城郭としての遺構は、現在の城跡景観を決定づけるものである。大きく分けて中世に原形が築かれた「山上ノ丸」と、山麓の「山下ノ丸」から構成されている。「山上ノ丸」は本丸・二ノ丸・三ノ丸で構成され、かつては本丸に天守が建てられていた。「山下ノ丸」は天球丸、二ノ丸、三ノ丸等と、その他諸郭から構成され、堀によって城下と区分されている。

(1)山上ノ丸

本丸を最高地として、二ノ丸、三ノ丸が階段状に配され、それを巡る帯曲輪から構成される。本丸、二ノ丸の全域、及び帯曲輪のうち城下側の部分(出丸)が終石垣化されている。本丸の北西角には天守台がある。宮部期の三層の天守を池田長吉が二層に改築したと考えられ、その改修痕跡と思われる石垣の縦ぎ目が天守台の南西角に見られる。その後天守は元禄5(1692)年落雷により焼失し、以後再建されることとは無かった。鳥取城内において最古の石垣が本丸南面を構成するなど、山上ノ丸一帯は、宮部時代に大部分が構築され池田長吉以降において局所的な改修が行われたと思われる。三ノ丸から東坂へ続く尾根筋には登り石垣状の遺構も見られ、倭城との関連性が指摘されている。

(2)山下ノ丸

山下ノ丸は主に高石垣で構成される天球丸、二ノ丸と最大面積を有する三ノ丸などからなる。山下ノ丸は幅約30mの水堀が南西側を巡り、三つの門で外部と繋がっていた。天球丸の南東端と二ノ丸の北西端は巨大な堅堀で防御される。幕末の増改築を除くと、「因州鳥取之城之図」、「因幡国鳥取絵図」(いずれも岡山大学附属図書館蔵)などから、天球丸、二ノ丸は池田光政期を中心に構築されたと考えられる。天球丸は池田光政の伯母天球院の居所があった場所で、平成4(1992)年から続く石垣の保存修理事業で織豊期と思われる石垣が出土し、平成13(2001)年の橋蔵跡発掘調査では闇ヶ原合戦時と想定できる焼土面が出土しており、天球丸周辺が織豊期の中心域であった可能性が高まっている。二ノ丸は池田光政期以降、江戸時代中期まで藩政の中心となった場所である。二ノ丸は、中腹の太鼓ヶ平から三ノ丸入口の太鼓御門に至る尾根を削平して構築したようで、二ノ丸背後には石垣石を切り出した痕跡が残る。昭和55(1980)年の石垣解体に伴って現状の高石垣の下層から、池田光政期以前の曲輪を構成した石垣が出土

している。三ノ丸は江戸中期以降、藩政の中心になった場所である。幕末にも大規模な拡張がなされ、城内最大の面積を有する曲輪として整備された。現在その全てが県立高校の敷地となっている。その他、お堀端沿いの丸ノ内には、馬場や米蔵が存在した。一段高い所には、明治40(1907)年、皇太子(後の大正天皇)の行啓宿舎として旧鳥取池田家が建てた仁風閣(国指定重要文化財)があり、その北西には県立博物館が立地する。いずれもかつての城内に存在し、山下ノ丸は北西—南東方向に約550m、北東—南西方向に約350mの規模を誇っていた。

(3)山腹の遺構群

久松山本体では、山頂から派生する主要な尾根部分と山上ノ丸直下の削平地群とに区分できる。主要な尾根に派生する曲輪群は、鳥取城創建期から秀吉の鳥取城攻めまでの中世段階の遺構と考えられる。太鼓ヶ平から山下ノ丸へ派生する尾根は、江戸時代前期の大規模な曲輪造成によって削平されたと考えられ、西坂が旧態を良く残している。松ノ丸では石垣が見られることから織豊期になっても一部利用されたようである。山上ノ丸直下にみられる削平地群は、尾根の主要曲輪群とは独立した一群である。部分的に矢穴による半裁途中の転石が遺存しており、石取場と考えられる。

参考文献

- 1989 鳥取県立博物館『久松山鳥取城—その歴史と遺構—』
- 1997 鳥取市教育委員会『史跡鳥取城跡削平開闢ヶ平天守丸保存整備事業報告書』
- 2001 鳥取市歴史博物館『大名池田家のひろがり—信長・秀吉そして徳川の時代へ—』
- 2007 大阪城天守閣『秀吉お駕籠一天下をとりまく達人たち—』
- 2007 鳥取県『鳥取県史ブックレット1 織田 vs 毛利—鳥取をめぐる攻防—』
- 2008 細田隆博「鳥取城」『決定版鳥取・岩美・八頭ふるさと大百科』

4 既往の発掘調査

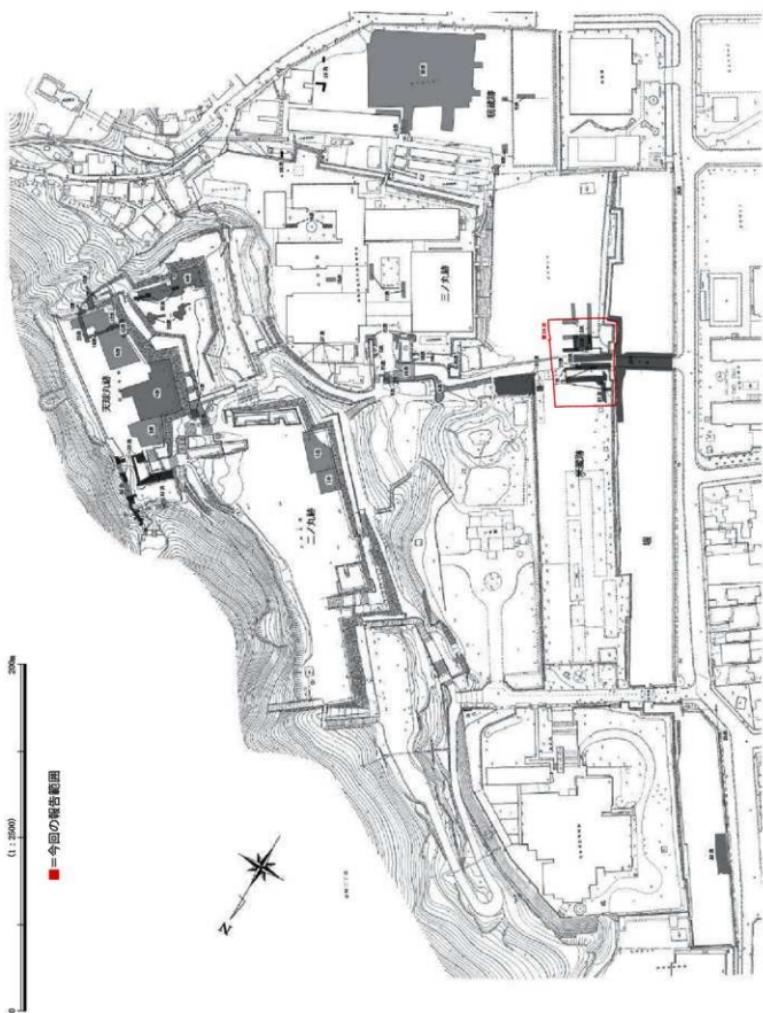
これまで鳥取城跡で実施された発掘調査は、昭和55年に始まり、平成27年現在39次を数える。調査位置や期間は第6図の通りである。

昭和18年の鳥取大地震による各所で崩壊した石垣は、昭和32年の国史跡の指定後、昭和34年二ノ丸三階櫓周辺石垣修理に始まり、現在まで続く。災害からの復興に始まり、昭和40年代に入ると、山上・山下の公園の一部としての整備が進められたが、発掘調査は未だ実施されなかった。最初の発掘調査は昭和55年二ノ丸走櫓石垣修理に伴い、その上部に位置する二ノ丸御殿部分で実施され、絵図面通りの配置で建物礎石が検出された。その後しばらく調査は実施されず、本格的に開始されるのは平成に入ってのことであった。平成2年には天球丸石垣の大規模修理に伴う調査が行われ、続いて櫓蔵や太鼓御門周辺でも実施された。

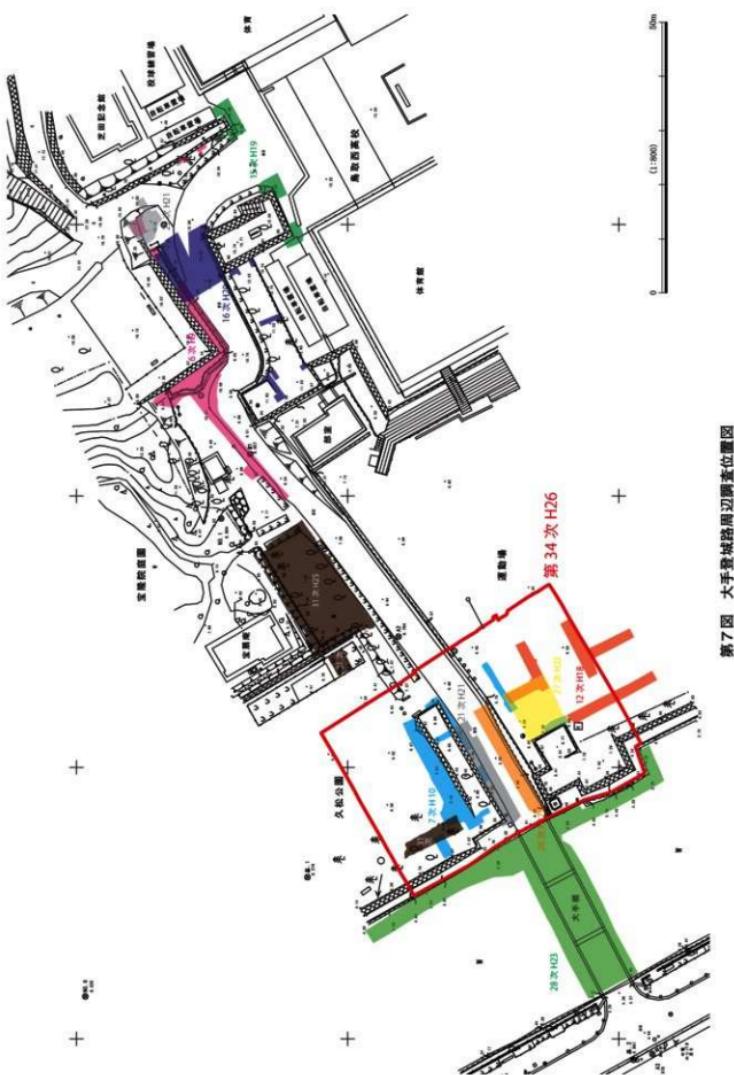
いずれも石垣修理工事に伴う調査であったが、2000年代に入り本格化した三ノ丸に位置する鳥取県立鳥取西高等学校の改築問題や鳥取城保存整備基本計画の策定に係り、学校周辺での調査例が増加した。さらに近年、鳥取城復元整備計画が本格化し、大手登城路沿いでの調査が中心となり、平成26年度からは全面調査へと移行した。復元整備計画に伴う大手登城路での調査位置については第7図の通りである。

表3 関連年表

西暦 元号	出来事
16世紀中頃	この頃、久松山に因幡山名氏または但馬山名氏のいずれかによって砦が築かれる。
1562 水禄5	武田高信が久松山を拠点として、因幡守護の山名氏に反逆する。
1573 天正1	武田高信を退けた因幡守護山名豊国が、布施天神山城から鳥取城に守護所を移転する。
1580 天正8	羽柴秀吉の第1回鳥取城侵攻。山名豊国、降伏するが、毛利方が鳥取城を再奪還する。
1581 天正9	羽柴秀吉の第2回鳥取城侵攻。兵糧攻めの末、吉川経家の切腹で毛利方降伏する。 新たに入城した宮部繼潤が鳥取城を近世城郭に改修する。
1600 康永5	池田長吉が城主となる。
1617 元和3	池田光政が城主となり、鳥取城が鳥取藩32万石の居城となる。
1619 元和5	この頃、城と城下町の大改修が行われ、現存する城跡の景観が整う。
1632 寛永9	池田光仲が城主となる(鳥取池田家の成立)。やがて鳥取城下に水道施設が整備される。
1692 元禄5	天守が落雷により焼失し、以後再建されず。
1718 享保3	三ノ丸の拡張が行われ、藩主(城主)の居所が二ノ丸から三ノ丸へ移る。
1720 享保5	城下の大火(享保大火)により鳥取城も延焼する。
1721 享保6	大手登城路、三ノ丸を中心には再建が開始され、2年後に完成する。
1728 享保13	石黒大火で被災した二ノ丸・三階櫓石垣の修理が完了する。
1735 享保20	二ノ丸の三階櫓、走櫓は再建されるが、御殿は再建されず。
1807 文化4	この頃、天球丸の巻石垣が築かれる。
1825 文政8	幕府より屋根瓦に葵の紋を用いることを許される。
1846 弘化3	二ノ丸の御殿、菱櫓、表御門など再建され、一時に藩主の居所が三ノ丸から二ノ丸へ移る。
1849 嘉永2	二ノ丸が西方に拡張される。
1858 安政5	三ノ丸の南側に芻藏が建てられ、城域が拡張する。
1861 文久1	三ノ丸が拡張される。
1863 文久3	扇御殿、宝隆院庭園(現存)が造営される。
1867 延応3	西坂下御門(現・復元門)が創建される。
1871 明治4	廢藩置県後、兵部省の管轄となり、政府の機能が城外に移転する。
1873 明治6	廢城令で軍事上の必要性が認められた鳥取城は、存城となり、陸軍省の所管となる。
1875 明治8	陸軍省によって不要な71棟の建物が解体撤去される。
1877 明治10	姫路歩兵隊の分遣隊派遣が決定し、三ノ丸御殿等を転用した兵舎が整備される。
1879 明治12	西南戦争終結後、治安安定により分遣隊の撤退が決定。それまでの城内に残された大型建造物(二ノ丸三階櫓等)が解体撤去される。
1889 明治22	陸軍によって中学校用地として三ノ丸が鳥取県へ無償貸与され、尋常中学校が建つ。
1890 明治23	陸軍から旧藩主鳥取池田家へ城跡の払い下げがなされる。
1907 明治40	扇御殿跡に仁風閣が建つ。
1912 明治45	二ノ丸、天球丸で山陰鉄道開通式協賛会が開かれる。
1923 大正12	久松公園開設。翌年、城代屋敷跡に鳥取公設運動場が開設される。
1936 昭和11	久松山全山が市民に開放される。また、鳥取城復興期成会が結成される。
1943 昭和18	鳥取大震災で被災する。翌年、旧藩主池田家から城跡が鳥取市に寄贈される。
1957 昭和32	国史跡に指定される。



第6図 既往の発掘調査区位置図



第7図 大手炭礦周辺調査位置図

表4 発掘調査一覧

次数	調査場所	調査期間	面積 〔m ² 〕	調査草図	回数
1	二ノ丸走柵路	1980(昭和55) 11 / 14 ~ 12 / 24	250	二ノ丸走査石垣修復工事に伴う調査	①
2	二ノ丸走柵路	1981(昭和56) 5 / 26 ~ 7 / 27	130	二ノ丸走査石垣修復工事に伴う調査	①
3	天球丸跡	1990(平成2) 5 / 1 ~ 7 / 31	320	石垣の保存修理に伴う調査	②
4	天球丸跡	1991(平成3) 8 / 1 ~ 12 / 20	530	石垣の保存修理に伴う調査	②
5	天球丸跡	1995(平成7) 10 / 1 ~ 12 / 12	164	天球丸の復元整備に伴う調査	③
6	太鼓御門跡	1997(平成9) 8 / 1 ~ 1998/2/28	170	復元修理に伴う調査	④
7	中ノ御門跡	1998(平成10) 10 / 20 ~ 1999/2/28	135	復元修理に伴う調査	⑤
8	植蔵跡	2000(平成12) 10 / 2 ~ 2001/3/23	340	石垣の保存修理に伴う調査	⑥
9	移築跡周辺試掘	2003(平成15) 7 / 22 ~ 9 / 30	80	鳥取西高校整備移転計画に伴う調査	⑦
10	天球丸跡	2005(平成17) 6 / 1 ~ 12 / 27	73.6	天球丸石垣の保存修理に伴う調査	未
11	三ノ丸跡試掘	2005(平成17) 8 / 22 ~ 10 / 26	40	鳥取西高校整備計画に伴う調査	⑧
12	中ノ御門周辺試掘	2006(平成18) 10 / 30 ~ 2007/1/29	100.6	鳥取西高校改築に伴う調査	⑨
13	天球丸跡	2006(平成18) 10 / 30 ~ 11 / 2	15	天球丸石垣の保存修理に伴う調査	未
14	天球丸跡試掘	2007(平成19) 6 / 28 ~ 7 / 31	9.1	天球丸石垣の保存修理に伴う調査	未
15	太鼓御門周辺試掘	2007(平成19) 7 / 21 ~ 11 / 7	53.4	鳥取西高校改築に伴う調査	⑩
16	三ノ丸跡試掘	2008(平成20) 5 / 7 ~ 5 / 27	21.4	鳥取西高校改築に伴う調査	⑪
17	天球丸跡	2008(平成20) 7 / 16 ~ 8 / 8	10.1	天球丸整備に伴う調査	未
18	太鼓御門跡	2008(平成20) 7 / 20 ~ 11 / 21	110.0	大手登城跡復元整備計画に伴う調査	⑫
19	植蔵跡	2008(平成20) 10 / 31 ~ 12 / 2	22.9	植蔵跡周辺整備に伴う調査	未
20	移築跡	2009(平成21) 4 / 1 ~ 2010/3/12	2771.7	鳥取西高校改築に伴う調査	⑬
21	中ノ御門跡	2009(平成21) 7 / 1 ~ 8 / 31	60.3	大手登城跡復元整備計画に伴う調査	⑭
22	太鼓御門周辺	2009(平成21) 9 / 8 ~ 10 / 1	35.0	大手登城跡復元整備計画に伴う調査	⑮
23	天球丸跡	2009(平成21) 12 / 2 ~ 12 / 10	35.0	天球丸整備に伴う調査	未
24	雁塀跡試掘	2009(平成22) 1 / 25 ~ 1 / 29	10.5	バス待合室設置に伴う調査	⑯
25	植蔵跡周辺	2009(平成22) 2 / 22 ~ 3 / 26	69.2	植蔵跡周辺整備に伴う調査	未
26	中ノ御門跡	2009(平成22) 7 / 1 ~ 8 / 31	59.5	大手登城跡復元整備計画に伴う調査	⑰
27	中ノ御門跡	2009(平成22) 11 / 1 ~ 2011/2/25	76.7	大手登城跡復元整備計画に伴う調査	⑱
28	御宝珠塚跡	2009(平成23) 10 / 5 ~ 2012/3/30	480	大手登城跡復元整備計画に伴う調査	⑲
29	天球丸跡・八幡宮跡	2012(平成24) 6 / 3 ~ 9 / 27	200	天球丸整備に伴う調査	未
30	①②中ノ御門周辺 ②登城跡・太鼓周辺	2012(平成24) 6 / 28 ~ 10 / 1	425	大手登城跡復元整備計画に伴う調査	⑳
31	登城跡周辺	2013(平成25) 7 / 23 ~ 11 / 2	306	大手登城跡復元整備計画に伴う調査	未
32	天球丸跡	2013(平成25) 8 / 9 ~ 2014/1/31	96	天球丸石垣修理に伴う調査	未
33	内堀石垣	2013(平成25) 2 / 4 ~ 3 / 28	72	内堀石垣損傷部分確認調査	未
34	中ノ御門跡	2014(平成26) 7 / 22 ~ 2015/3/27	1860	大手登城跡復元整備計画に伴う調査	本報告
35	移築曲輪試掘	2014(平成26) 4 / 8 ~ 4 / 21	15.3	鳥取西高校改築に伴う調査	未
36	移築曲輪試掘	2014(平成26) 7 / 29	4.2	鳥取西高校改築に伴う調査	未
37	三ノ丸跡試掘	2014(平成26) 10 / 7 ~ 10 / 16	12	鳥取西高校改築に伴う調査	未
38	雁塀試掘	2015(平成27) 1 / 6 ~ 1 / 7	8.3	雁塀整備に伴う調査	未

報告書一覧

- ① 1981鳥取市教育委員会「第1号発掘調査報告書 -鳥取市二ノ丸走柵路-」
 ② (1982)鳥取市教育委員会「史跡鳥取城跡周囲太鼓平保存修理概要報告書」(に記録)
 ③ 1992鳥取市教育委員会「史跡鳥取城跡周囲太鼓平 天球丸発掘調査概要報告書」(③に記録)
 ④ 1997鳥取市教育委員会「史跡鳥取城跡周囲太鼓平 天球丸保存整備事業報告書」
 ⑤ 1998鳥取市教育委員会「史跡鳥取城跡周囲太鼓平 天球丸発掘調査報告書」
 ⑥ 1999鳥取市教育委員会「史跡鳥取城跡周囲太鼓平 天球丸発掘調査報告書」
 ⑦ 2001鳥取市教育委員会「史跡鳥取城跡周囲太鼓平 天球丸発掘調査報告書」
 ⑧ 2004鳥取市教育委員会「鳥取城開闢遺跡」(平成15年(2003)年度、鳥取市内進跡発掘調査概要報告書)
 ⑨ 2006鳥取市教育委員会「鳥取城(三ノ丸跡)」(平成17年(2005)年度、鳥取市内進跡発掘調査概要報告書)
 ⑩ 2008鳥取市教育委員会「鳥取城跡」(平成19年(2007)年度、鳥取市内進跡発掘調査概要報告書)
 ⑪ 2009鳥取市教育委員会「鳥取城跡」(平成20年(2008)年度、鳥取市内進跡発掘調査概要報告書)
 ⑫ 2009鳥取市教育委員会「史跡鳥取城跡太鼓門跡発掘調査報告書」
 ⑬ 2011財团法人鳥取市文化財財団「鳥取城跡朽壁調査」(第23次調査)
 ⑭ 2013鳥取市教育委員会「鳥取城跡太閤門跡発掘調査報告書」(第21・26・27・28次発掘調査-)
 ⑮ 2014鳥取市教育委員会「鳥取城跡太閤門 平仮名調査報告書II」(第22・30次発掘調査-)

5 調査区周辺の変遷

17世紀初め、初期の鳥取城を描いた、第4図の『因州鳥取之城之図』で描かれた鳥取城は現在とは大きく形を違える。概略を描いているため、詳細な部分の表現は検討をするが、中ノ御門周辺をみると櫓形部分こそ描かれているが石垣の表記はないことが分かる。絵図右方の南ノ御門は石垣造りの外枠形が描かれている点と比べても違いがある。続く第5図になると、中ノ御門は整った形で描かるようになり、以後の絵図でも同様である。門以外の調査区付近は特に描かれていないため、この段階では詳細は不明である。

建物等の詳細が描かれた古い絵図としては第8図慶安3(1650)年以前制作の『鳥取城下之図』が挙げられる。城内外の屋敷地が記載されたこの絵図では、堀内には家臣らの屋敷が多數描かれており、御本丸となっている現二ノ丸部分以外は隙間なく配置されていることがわかる。第1調査区の位置は“御馬屋”となってしまっており、縮尺に偏りがあるため単純比較は出来ないもののかなりの大型の施設である。

17世紀後半での記録としては第9図、天和3(1683)年制作の『鳥取城御破損修復願絵図』がある。これは3年前に作られた『鳥取城修復願絵図』をベースとしたものであるが、依然堀内に屋敷地(黄色部分)がみられるものの、第1調査区部分は空間となり、並行する堀沿いの建物列も配置が変わり、北西側の北ノ御門との間には石垣と土塙で囲まれた空間が出現する。後に米蔵となるこの独立空間であるが、米蔵としての使用開始期は不明であることから、その前段となる施設の可能性も残る。

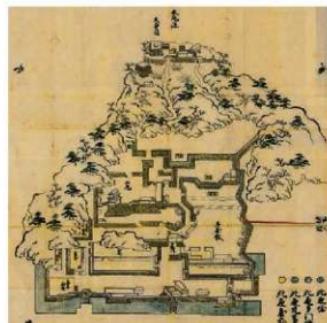
18世紀に入ると様子が変わり、享保5(1720)年の石黒大火にて城内をほぼ焼失した後、北西端部の現県立博物館付近に「家来屋敷」とされる部分(幕末期まで存続)および周辺の長屋等を残し、個人名が記載されるような有力な家来衆の屋敷は復興過程で堀外へ転出したようである(第10図『鳥取城修復願絵図』宝曆12(1762)年制作)。大火後の絵図では後の米蔵と同形態の建物が描かれることから、蔵としての機能を始めたものと考えられる。また大火を挟み、中ノ御門にも変化がみられ、それまで石垣間を渡り堀側まで延びていた櫓門の幅が狭くなり、小型化した櫓は石垣間に収まる形態となる。



第8図 鳥取城下之図(部分)



第9図 鳥取城御破損修復願絵図



第10図 鳥取城修復願絵図



第11図 御城内ニ着到之図(部分)

なる。以降、城郭としての建物新築はなく、所管は藩主から兵部省へと移管され、城郭機能は失われる。全国的な城解体にあわせ、一度は存城となるも解体・払い下げとなり、明治8(1875)年には中ノ御門を含む71棟、明治12(1879)年までに残りの大型建物も陸軍により処分された。この後、明治22(1889)年には現在の鳥取西高等学校の前身となる尋常中学校が移転開学するが、この頃には樹形石垣奥壁部分が解体され、橋から一直線の進入路およびグラウンドが整備されたとみられる。再び旧藩主池田家へ買い戻された城跡は、大正期に入ると池田家出資の下で山下ノ丸一体の公園整備が実施され、大正12(1923)年折下吉延の設計により久松山遊園地として公開、以後第1調査区側は公園、第2調査区側は学校グラウンドとして使用されることとなる。公園部分に続き、昭和4(1929)年には久松山の全山開放がなされ、昭和19(1944)年には前年に発生した鳥取大震災の復興記念事業として、久松山が池田家より鳥取市へ寄贈される。

写真1 地震により崩壊した樹形石垣
(昭和20年代後半～30年代前半)

写真2 久松公園(昭和35年)

樹形石垣は改修を受けつつも、両調査区共に絵図上ではほぼ同じ形態のまま幕末期を迎える。また、第1調査区付近の使用例として確認できるものに第11図の『御城内ニ着到之図』が挙げられる。嘉永元(1848)年に制作されたこの絵図は参勤交代での帰城時の儀式での配置が描かれており、米蔵前から下乗石周辺へ一堂に会した際、調査区中央付近は藩主が位置する御着座と呼ばれる重要な場所であったことが分かる。

近代に入ると、周辺状況は一変する。明治元(1868)年に擬宝珠橋の架け替えが行われ、最後の太鼓橋と

第1調査区側の園地には、動物舎が置かれ永らく動物公園として市民に親しまれており、一部民地も存在したため住宅や商店などもみられた。昭和30年代になると木造橋は老朽化のため通行禁止となり、昭和38(1963)年には高校の新築と併せ現コンクリート橋へと架け替る。また、この工事と並行して実施されたのが樹形石垣の修理である。明治期に解体された樹形石垣奥壁のうち新造されていた端部が鳥取大震災により崩壊したもので、再度積み直しが行われ現在の形となった。昭和40年代に入ると堀の浚渫や堀沿いの石垣修理が実施され、昭和50年代に入ると公園内の民家や動物舎の移転が完了し、現在の公園へと整備された。公園と学校グラウンドそれぞれの整備が行われる中で、大量の真砂土(グラウンド土)が搬入されていることが特徴であり、結果的に幕末期面より第1調査区は60cm、第2調査区は1m以上も嵩上げされることとなる。

第Ⅲ章 調査の結果

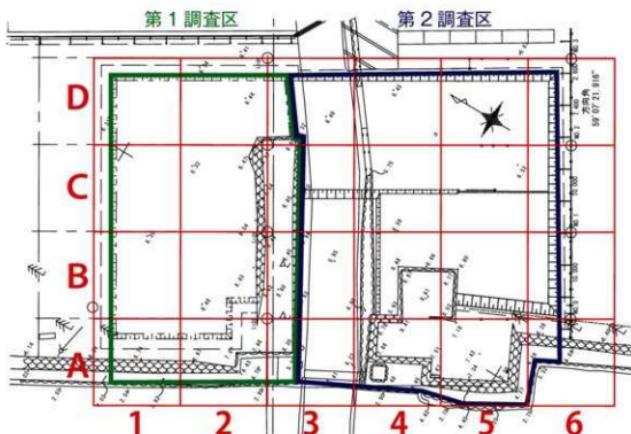
III - 1 調査の概略

1 調査の目的

鳥取市は、昭和32年の指定以来、国史跡である鳥取城跡附太閤ヶ平の保存と活用に取り組んできており、市民と専門家からなる検討委員会の検討と、パブリックコメントの実施を経て平成17年度に『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存整備基本計画』、平成18年度に『史跡鳥取城跡保存整備実施計画』を策定し、鳥取城跡の保存整備と調査研究を長期計画に基づいて推進している。

鳥取城の内堀から本丸部分へ至る大手登城路には、大きく分け大手橋にある擬宝珠橋、大手門である中ノ御門、本丸入口部分に位置する太鼓御門などの代表的な施設が存在しており、大手登城路復元整備計画では、これらの復元を目指している。復元整備計画では、現在不明瞭になっている近世城郭部分の全体プランの顕在化を大きなテーマとしており、可能な範囲での建造物復元等も含め、江戸時代末期の姿を顕在化するための整備を段階的に進めることとしている。

整備対象の第一段階として位置づけられたのが城のメインルートにあたる「大手登城路」である。この範囲については、遺構の保存状態が比較的良好と考えられ、顕在化による効果も高いため建造物を含む復元整備を視野に入れた整備計画としている。



第12図 調査区の設定

2 調査区の設定

大手登城路復元整備計画では、擬宝珠橋・中ノ御門・太鼓御門という3つの施設の復元を基本とし、登城路や周辺施設の一部を旧状に復することを目的としている。しかし、復元をめざす部分の総面積は広大であり、現状そのすべてを同時に調査対象とすることは、学校運営上からも不可能であるため、鳥取城保存整備検討委員会での検討の結果、まずは建物等の構造物が存在していた範囲の調査を先行し、登城路部分については、後に一括して行うこととした。平成21年度の第21次調査と平成22年の第26次調査では中ノ御門表門、同年の第27次調査では中ノ御門櫓門、平成23年の第28次調査では擬宝珠橋の調査を実施し、調査成果を平成24年度に『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平发掘調査報告書』として刊行し、部分的にはあるが中ノ御門周辺の状況が明らかとなった。

このような状況の下で実施された第34次発掘調査は、大手登城路周辺における初めての大規模調査である。それまでの発掘調査は、部分的トレーニング調査が大半であったが、平成27年度には借地となっていた鳥取県立鳥取西高等学校用地の一部(グラウンドの一部)が鳥取市に返還されたことにより全面調査が実施可能となったためである。先述の通り範囲内には過去に調査を実施した部分も含むが、今回改めてその全体を題にして再検討を行った。

調査期間は平成26年7月22日から平成27年3月27日であり、第1と第2との2つの調査区に分割して



鳥取城修復願絵図(文化4年(1807)12月)
鳥取県立博物館蔵(部分)

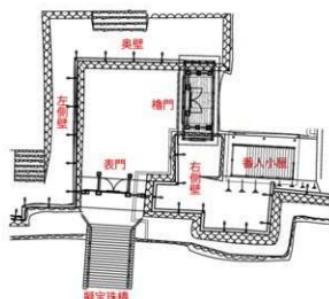
実施、合計の調査面積は1,860m²である。調査開始時の7月段階は高校グラウンドの利用や耐震改修工事との関係から、予定範囲を分けたものあり、久松公園側を第1調査区として先行着手し、10月頃より大手橋を封鎖し、アスファルト道路およびグラウンド部分を第2調査区として調査を実施した。既往の調査により、大方の遺構面高は把握できていたため、調査に際しては遺構面より20～30cm上までを重機を用いて除去し、それ以下については人力にて掘り下げを行った。完掘後は三次元計測およびオルソ図の作成を行った。第1調査区の北西辺(公園との境)、第2調査区の南東辺(グラウンドとの境)はいずれも整備範囲の境界である。

以上の通り、2つの調査区は調査期間が異なることや、地点の性格も異なることから、第1調査区を【III-2】、第2調査区を【III-3】章としてそれぞれ報告することとし、章内では遺構や出土点毎に遺物の実測図を掲載した。また、石垣部分については、【III-4】章に一括して掲載した。

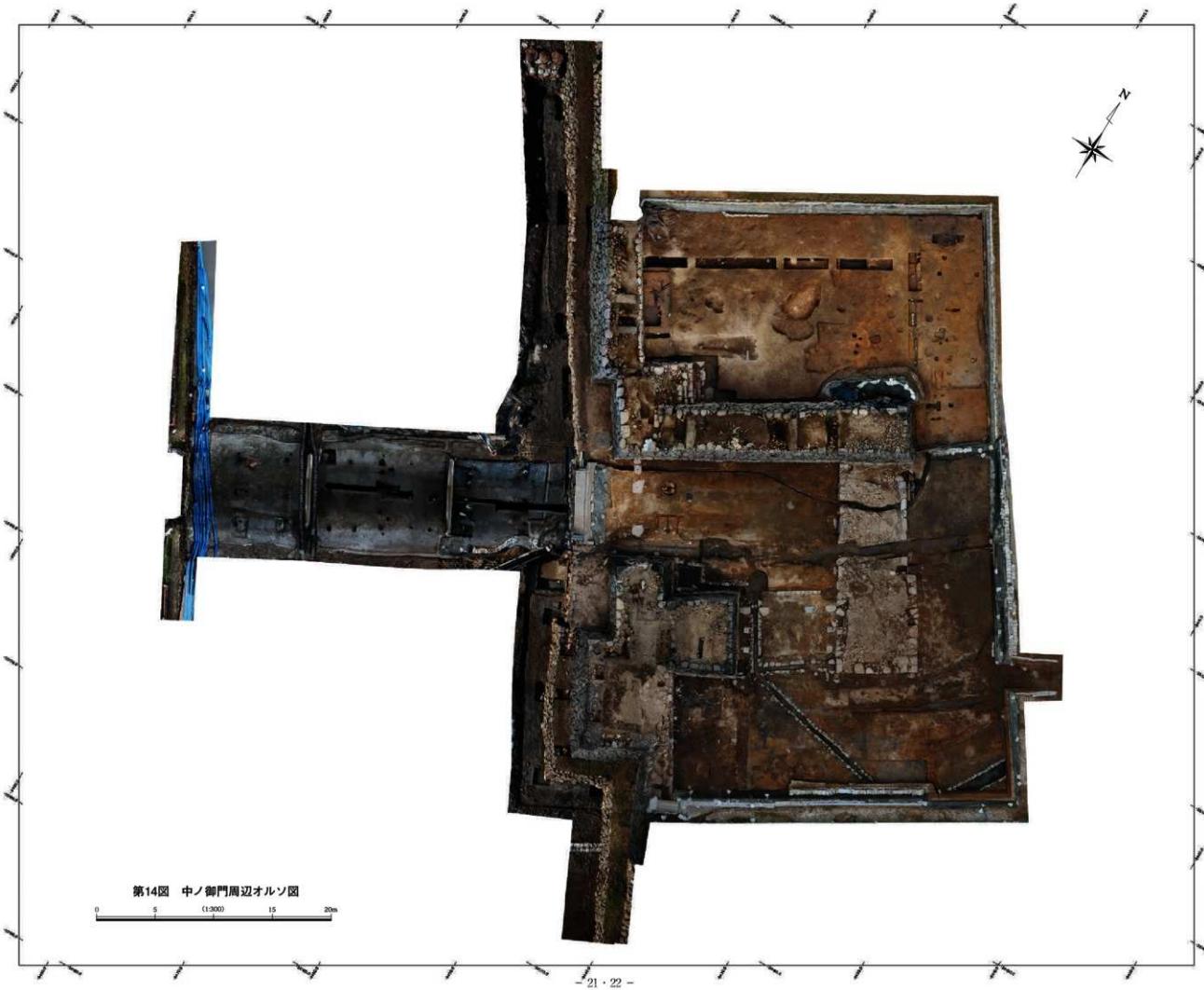
調査においては、第12図のとおり堀を背にした形で1辺10mのグリッドを組み城内方向へA～D、堀沿い方向へ1～6のグリッド番号を付けた。

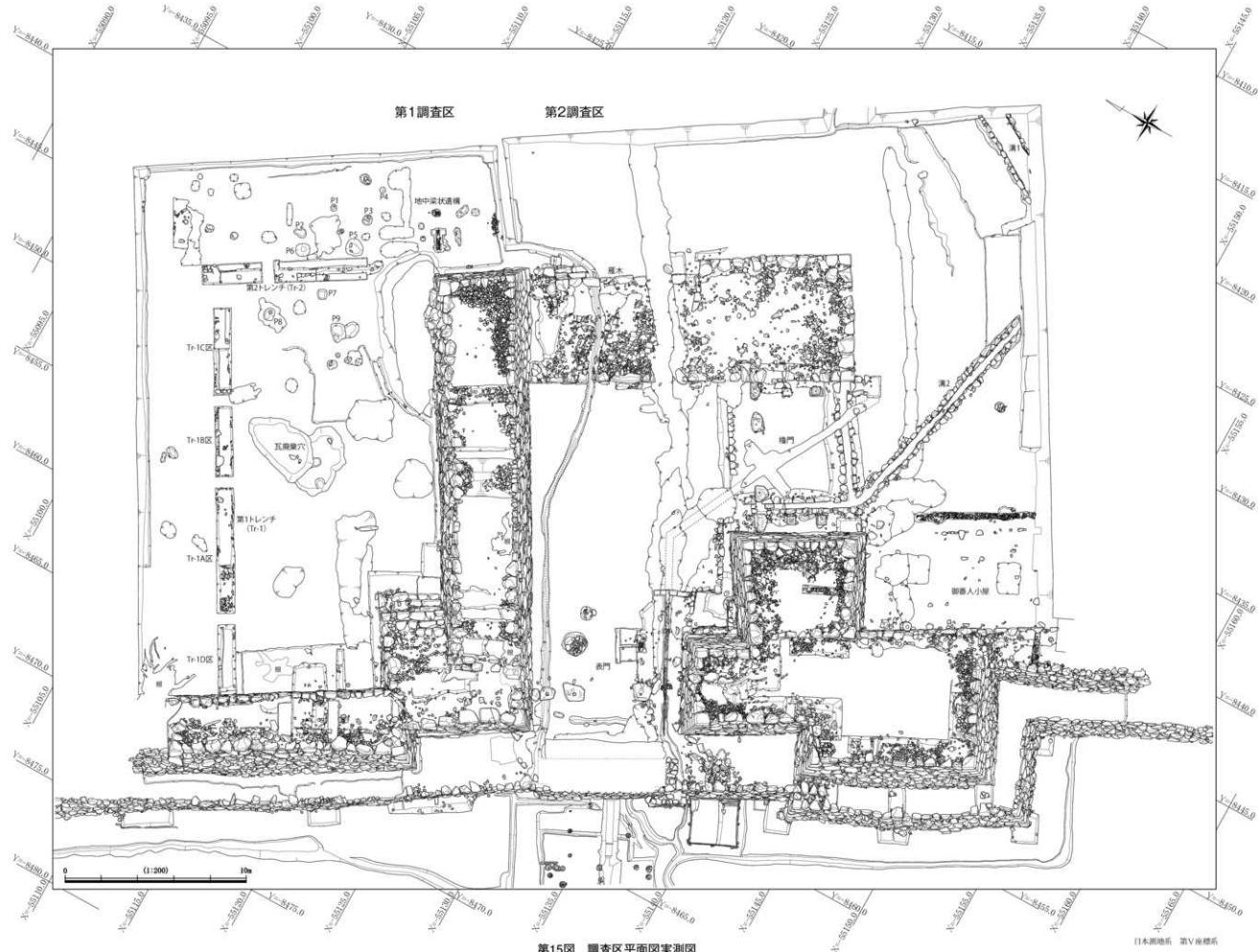
期間 平成26年7月22日～平成27年3月27日

面積 1,860m²(第1区: 760m², 第2区: 1,100m²)



第13図 中ノ御門周辺名称





第15図 調査区平面図実測図

3 名称および出土遺物について

第13図のとおり、近世当時、擬宝珠橋を渡ると正面には城の正門にある中ノ御門表門があり、これを抜け樹形石垣内へと歩を進めると緩やかに上昇する傾斜路が続く。これを進み正面の樹形石垣奥壁前で右折すると、眼前に迫るのが中ノ御門の内門となる櫓門である。石垣間に立つこの2階建ての門を抜けることでようやく城内へと入ることとなり、さらに登城路を進むと、主要な門である太鼓御門に至り、これらを通った先、現在の鳥取西高等学校のある場所が本丸となる三ノ丸へと到達する。

鳥取城の正門にある中ノ御門とはこの両門の総称であるが、文献上にもそれぞれの門自体に正確な呼称がなく便宜上、正面の門を“表門”、内門を“櫓門”と呼称することから、調査・報告に際してもこの名称を使用することとする。

調査で出土した遺物の多くは瓦であり、次いで陶器類などが挙げられる。出土遺物の大半を占める瓦・陶磁器類であるが、いずれも細かく割れた碎片ばかりであり、接合が可能なものは少なく、接合できたものを含めても残存率は全体の2分の1以下と非常に小さい。今回報告する遺物は、その中でも図化し得た遺物であり、土器類については径を復元できるものを、瓦については瓦当面を有するものおよび全形がわかるものである。出土量全体と比較すると僅かである。なお、掲載遺物の計測方向については凡例の通りである。

III-2 第1調査区

1 調査経過と基本層序

第1調査区は、樹形石垣の外側、大手橋を渡り鳥取西高校へと至る道路の左方久松公園内に位置し、A面石垣より北東～南西方向に約30m、D面石垣より南東～北西に約17mで設定した調査区で、石垣上面部分を含んだ調査面積は760m²である。第7図の通り、第7次調査で樹形石垣裾部、第30次調査で石垣上面、第31次調査で石垣沿いの一部の調査を実施している。古絵図の検討により、幕末期においては石垣を除いた平地部分に建物等の施設は存在しておらず、北西方向に位置する米蔵区画までの間は広い空間であったと考えられる。調査に際しては範囲をバリケードで囲い、重機を用いて表土部分の除去を行った。

基本的な層序は大きく3層、近現代の層2つと近世層から成っており、後者についてはさらに複数の層が含まれる。詳細については下記の通りである。真砂土で整地された現地表面である公園面の標高は6.35m前後であり、堀に向かい僅かに傾斜する。硬く転圧されたこの整地層は、長期間に亘り敷き重ねられたものであり、その厚さは30～40cm程になり、バックホーにてこの黄褐色土を剥ぎ取った。整地層は主に昭和50年代以降の遠地整備で敷かれたもので、撒入土であるため遺物は含まない。

整地層下の標高6.0m付近より下には暗褐色土層が広がっており、これより下層については人力での掘削作業とした。20cm程度の厚みを持つこの層にはガラス片やコンクリート片など近代以降の様々なゴミを多く含んでいることから、近代初め頃から動物園のあった昭和40年代頃までの公園面と考えられる。

暗褐色土層を除去した標高5.8～5.9m付近には幕末期の最終路盤面と見られる黄橙褐色系の砂礫層が広がる。上面には破砕された瓦片が多数散乱しており、近代初頭(明治8～12年)頃に行われた城解体時の様子を現しているようである。トレチチ調査によりこの層下には近世整地層が幾層も重なっていることが確認されている。



第16図 幕末期路盤面上出土遺物実測図①

2 調査成果

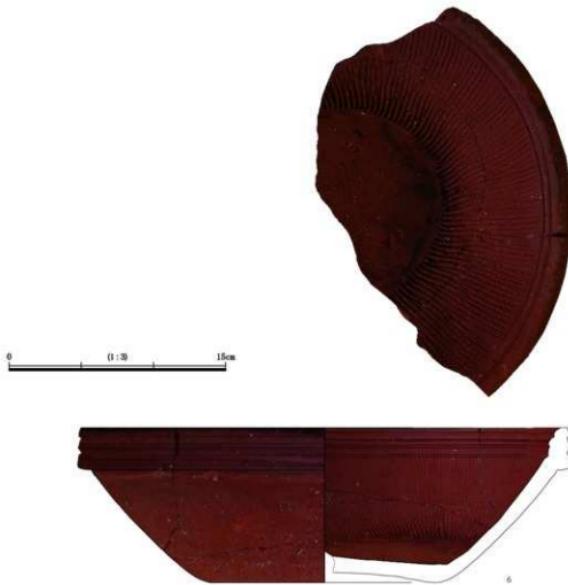
検出遺構と遺物

(1) 幕末期路盤面

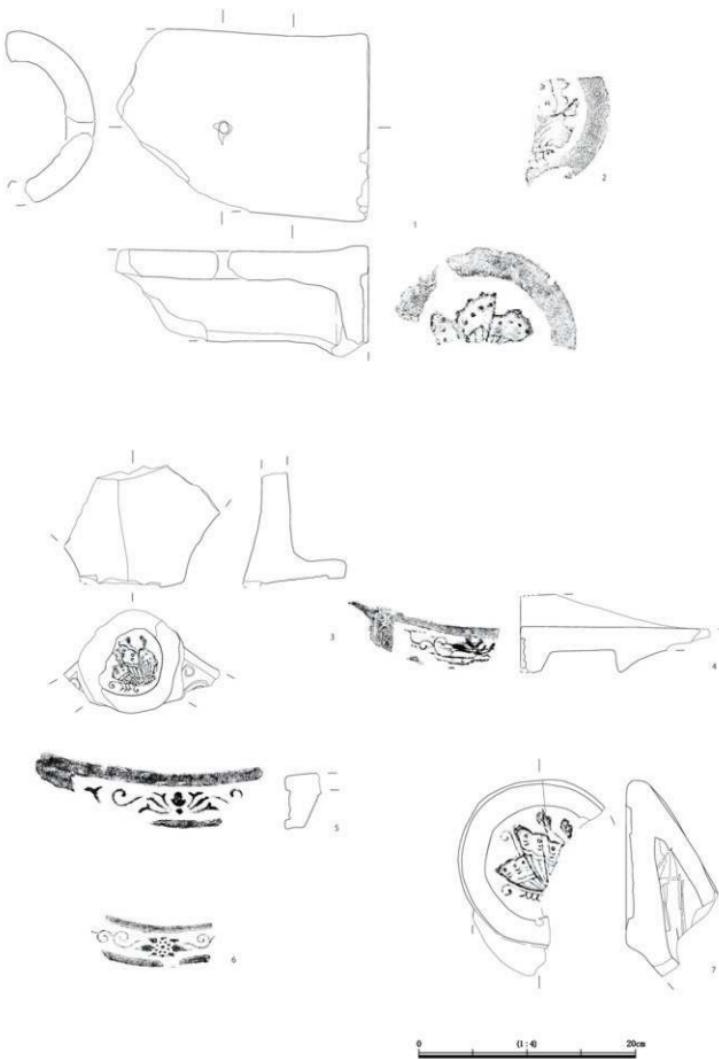
① 遺構

標高5.9m前後まで掘り下げる、現代のグラウンド整地土のような黄橙褐色系の砂礫層が広がる。硬く縮まったこの層は、上層までと比べ明らかに土質が異なり均整的な印象を受ける。どの調査地点においても同様の状況がみられ、隣接地で実施した第31次調査でもほぼ同じ標高で確認できている。当層の表面には破碎された瓦が散在しており、地点によっては集積されたように固まっている。また第19図の瓦廐窓穴のようにこの面を大きく掘りこみ夥しい量の瓦片を投棄していることからも、当面を境に瓦廐窓行為があったことが伺え、それは明治8~12年(中ノ御門周辺は8年頃)にかけて実施された鳥取城解体に伴う可能性が高い。これらのことから当層は幕末期路盤面として捉えた。表面は近代以降の擾乱や改変により、多少の凹凸を持ちながら広がり、上面の標高は堀側で5.8m程に対し、山側は5.9mと僅かに上昇する。

調査区の中央付近から北東方向(山側)へかけては大小さまざまな大きさのピット状掘り込みがみられるが、大半は擾乱であり、近世遺物を含むものについては遺構として取り扱ったが、混入である可能性は高い。他に遺構としたものは、瓦廐窓穴と地中梁があり、これらについては別項で扱う。また、トレ



第17図 幕末期路盤面上出土遺物実測図②



第18図 幕末期路盤面上出土遺物実測図③

ンチ内下層でも検出しておこれらについては、トレーナーの項でまとめて扱う。

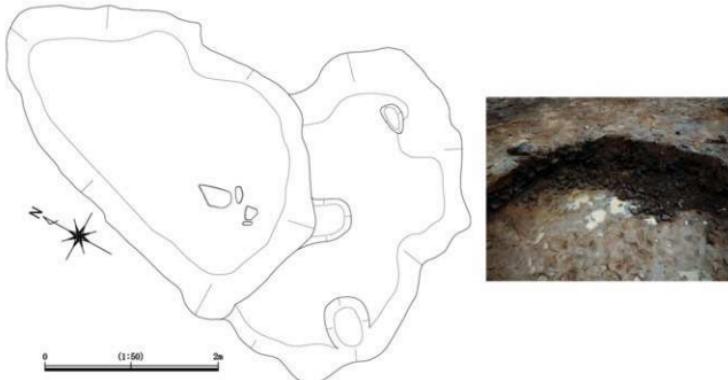
(2)出土遺物【第16～18図】

幕末期路盤面直上には瓦の細片が多く散乱しており、部分的に集中する地点が確認できる。瓦に混じり陶器片も多くみられるが、いずれも細片であり実測へ至ったのは第16～18図のみである。陶器類は在地系が多く、瓦とあわせ近世後期産が中心である。1・2・5・6は在地系である。1は碗で器面には窪みがみられる。3・4は越前系の鉢であり、外面下部へかけて鉄泥が塗られる。3は突起状の脚が付き、4は捏ね鉢とみられ、高さ15cm程度である。瓦1は蝶文B種の軒丸瓦で、基部を半分適度残す。古手の瓦のため器壁は厚い。3は初出土の廻隔瓦である。中心の蝶文は通常より小さく、形態的にはE類に似るが細部が異なり、両側の軒部の文様は端部のみであるが、もしもm類に似る。7はE類の鳥食瓦である。

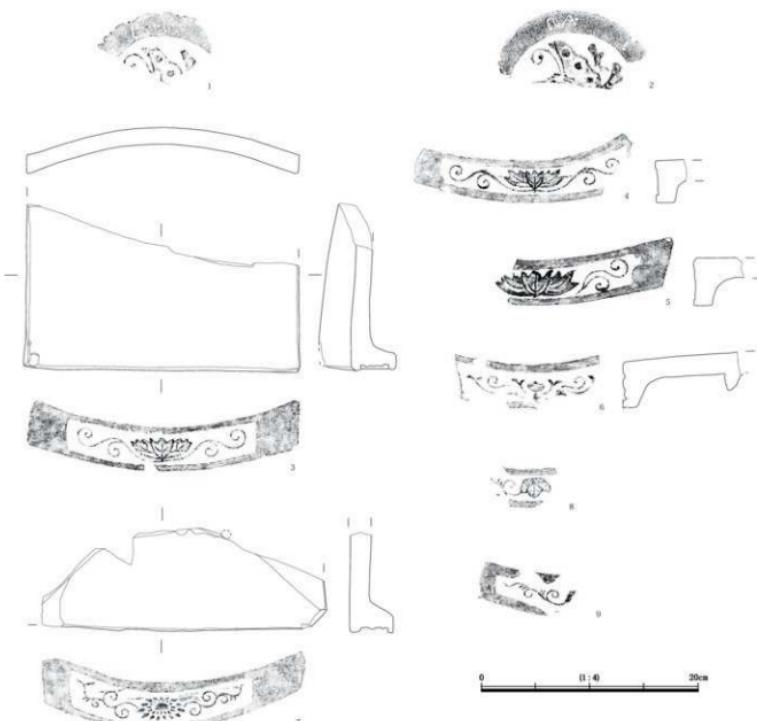
(2)瓦廻隔穴【第19・20図】

調査区の中央付近に位置する横円形状の平面形を呈する土壙状の遺構で、平面規模は5.7×4.0m、深さは40cmを測る。標高5.9m前後の幕末路盤面に掘り込まれており、東西方向に掘られた後に南北方向へ掘り足す2段階の掘り方で造られているが時期差ではなく、ほぼ同時に掘られたと考えられる。壇内は多量の破碎瓦で埋め立てられており、廻隔のための土壙であることが伺える。幕末期路盤面より掘り込み、これだけ多量の瓦を廻隔した理由としては明治8～12年に実施された城解体が挙げられ、時期としては中ノ御門を含む多くの建物が解体された明治8年頃が想定される。瓦除去後壇内底部より上面標高5.54m、平面規模40×23cmの表面が平滑な石を検出した。一見すると礎石とも考えられ、壇とは関係がなく幕末以前の遺構の可能性が高い。隣接する第1トレーナーC区では、ほぼ同様標高で大型の礎石が2石確認されていることから、これらとの関連も想定される。

出土遺物は瓦のみであり陶器等は見られず、瓦の大半も10cm以下の小片であり、出土量に対し実測に至るものは非常に少なく、第20図のとおりである。1・2は軒丸瓦I 1類である。縁部にはそれぞれ「文子」「文巳」と刻印されており、文化または文政年間子・巳の年に制作されたと考えられる。3～5は城内で最も多く出土する上向き三葉文で、葉脈の形により3・4はl類、5はm類である。棟瓦での出土が多いが3は軒平瓦であり、幅は25.5cmを測る。4は左軒棟瓦である。7はo類の隔瓦で、正面右側へ



第19図 瓦廻隔穴平面実測図および検出状況



第20図 瓦窯窓穴出土遺物実測図

向かい窄まりをみせる。8・9は新出の五葉文である。桐文の花部分を取り除いた桐葉文状の形でありe類などにも似ているが、色調や形態より近世後期の所産であろう。唐草の形態はo·t類と非常に近いが、端部を僅かに違えている。

(3)地中梁状遺構【第21図】

調査区の東側、第2調査区に近いD面石垣角部前に位置する地中梁である。標高5.85m前後の幕末期路盤面より幅55cm、長さは現状で230cm、深さ60cmの布堀り内に設置された梁である。柱と石垣との間には鉄管が埋設されており、その掘り方により柱の真横まで搅乱され、梁は端部が切断されているが、これが当時のものか本来はさらに伸びていたものかは分らない。構造は、20cm四方の梁の両端付近に柱を建てたものであり、検出時は布堀りの認識はなく、明瞭な掘り方を持つ柱部分を柱穴として確認していた。柱間の距離は芯々で180cmである。柱穴は布堀り後に掘られたとみられ、東側の柱は23cm四方の柱の周囲には15cm程の石が数石、間詰めとして充填されている。西側の柱は20cm四方で東側と比べ僅かながら小さいが、掘り方の状況は東側と同様であったとみられる事から、両側とも柱部分のみが更新さ

れている可能性が高い。用途としては、石垣の延長上にあり、その構造から門等の施設が想定されるが明確ではない。また、中央付近より北側へ20cm程離れた位置には15cm四方の柱が位置する。掘り方はみられないことから、上方より打ち込まれたものであるが、地中梁と関連するものかは不明である。

出土遺物は掘り方内や柱穴内からは近世の陶磁器片が數点あるが、小片であるため図化へは至らなかった。現時点で当遺構の明確な時期を決定することは出土遺物からは困難であるが、近代物は入らないことから近世遺構である可能性があり、時期としては幕末期面からの掘り方がみられることから、近世末期が想定される。藩士大坪市郎が天保15(1844)年に制作したとされ、建物等の詳細な寸法が描かれた106図の「鳥府久松山御城積間圖」には当地付近に北側へ続く「青木屋覆六間入見通シ」との表記がみられることから、それらとの関連も考えられる。

(4)石段【第88図】

A面とD面石垣との間、石垣上に上がるための階段であり、平面規模は5.0×3.5m、6段残存する階段部分の底面からの高差は1.5m、B(側)面側の天端で2.0mである。6段は3段ずつ、時期差とみられる積み方の違いがみて取れる。

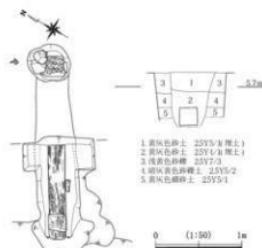
階段前の標高4.9m付近に整地面がみられ、そこから20cm程天端を出すように1段目が設置されている。1段目は4石が残存しており、途中1ないしは2石が抜けている部分に2段目の1石が落ち込んでいる。天端の高さは向かって左側が4.96mであり、右側の側石が5.27mとD面側へと傾斜する。2段目は本来4石構成とみられるが、先述通り、1石が全面へ倒れこみ、側石は残存していない。残存2石のうち左側は幅110cmもの長方形の石材が使用されている。3段目については、左側の1石のみの残存である。2段目と同様、幅120cmの長方形石材を用いており、最高点の標高は5.7m付近である。下部3段については、D面側へ向い大きく傾斜し、踏面が25cmと狭く、断面急勾配である。

4段目からは様相が変わる。6石で構成された4段目は標高5.9mの水平な天端面を持ち、踏面も50cmと幅広である。5段目も同様で、側面の1石を欠くものの、標高6.15m前後の水平天端面を持ち、踏面も45cmと広い。6段目は左側3石のみの残存であるが、標高6.4m前後の水平天端と50cmの踏面を有しており、状況は4・5段目と同様である。また、現状で7段目以上の階段は残存しないものの、石垣天端へ登るためには高さが足りないことや、裏栗石のような拳大の石材が散乱していることから、もう1~2段程度の段が存在していた可能性は否定できない。

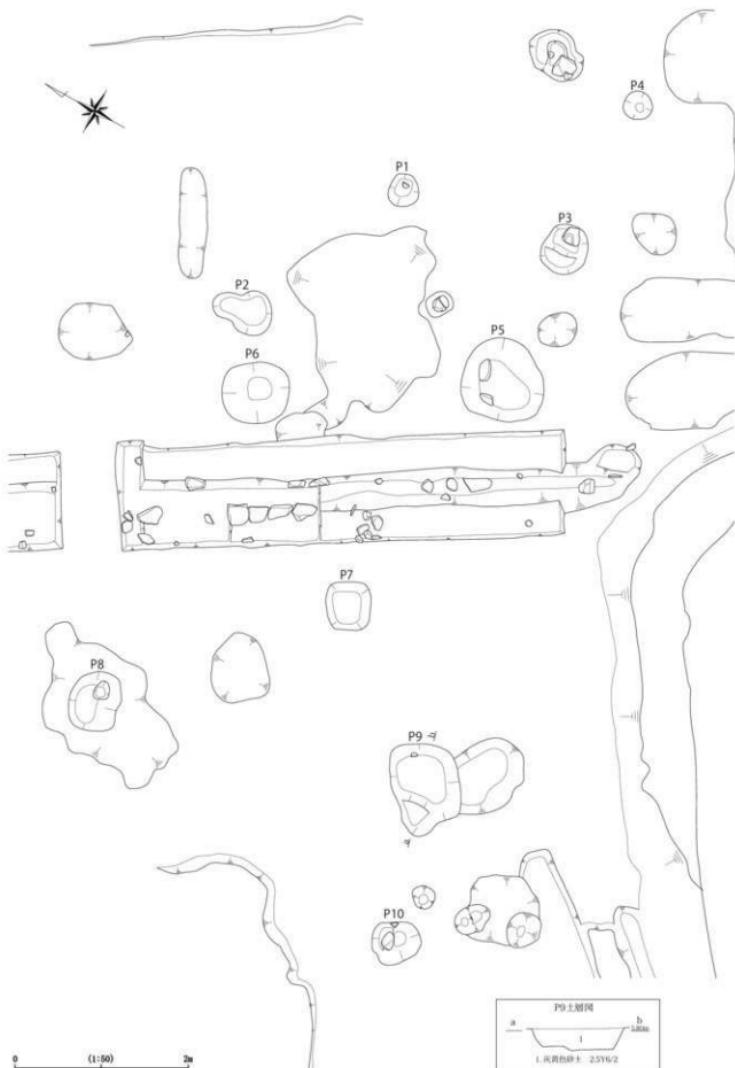
幅狭の下段と幅広な上段、この違いはD面の石垣内にもみられ、標高7.0m前後を境に上半部を積み足している。下段については、標高4.9m付近が路盤面であった頃、すなわち近世前期頃には構築されており、上段は後に付け足されたと考えられる。周囲の幕末期路盤面の標高は5.8~5.9mであり、最終段階においては地表より10~20cm程、頭を出す状況であった。また、4段目右端の側壁となる石材は不安定な大型側壁上に乗っており、直下の3段目が存在しないことから、下部がある程度埋められた後に設置されたとみられる。第1トレチの調査結果でも確認できたが、第1調査区では近世初頭から幕末までに合計100cmの嵩上げが行われていることから、当階段もその過程中で、下段が用途を失い、石が抜かれ埋め立てられた後のある時期に上段が構築されたと推定される。

(5)ピット状遺構【第22・23図】

幕末期路盤面上には、多数のピット状の窪みが存在する。幕末期の当該地付近には建物等はみられず、平面形状も不定形なものが多いことから、柱穴や土壙の類ではなく大半は擾乱とみられる。しかしな



第21図 地中梁状遺構実測図



第22図 ピット状遺構実測図

がら近世以前の遺物のみを包含する穴も10基ほどみられ、それらをピット状遺構(第22図 P 1~10)として扱い、遺物が出土したP 9のみを個別に掲載した。

P 9【第22・23図】

調査区中央からやや東に位置する107×78cm、深さ25cmの平面不定形状を呈す。南辺を搅乱により失うが内部は2段堀りの浅形である。出土遺物は1点のみで在地系陶器皿である。

(6)第1トレンチ(Tr-1)【第24・25図】

幕末期地盤面の確定と、基盤層のあり方や遺構面の形成状況を確認するために設定したトレンチで、幅1.0m、総延長21.3mのトレンチである。4つの区画からなっており、調査順に石垣側よりD→A→B→Cの番号を設定した。D区および、平成27年度の追加調査したC区については地山層まで確認したが、A・B区については、石材を用いた遺構を確認したため、それぞれ検出面にて掘削を止めた。一連の調査区であるため、土層番号は通しで記録した。なお、土層図については追加調査部分についても先行して記載しているが、詳細については来年度以降に報告する予定である。D・A・B区の土層堆積状況は連続する部分が多くみられ、10cm以上の厚い層が多いが、C区については若干異なり厚みのない薄い層が目立つ。

出土遺物は大規模な焼土層である33層を境とした上下層の3層に大別した。第26~28図には陶器などの土器類を、第29~32図に瓦、第33図にその他の遺物を掲載しているが、ここでは層単位毎にまとめて報告することとする。

(焼土層上層)

①幕末期路盤面

幕末期路盤面はA面石垣側のD区で5.8m、山側のC区で5.9mと緩やかな勾配を持つ。黄褐色系の砂礫で構成されたこの路盤面は主として1・30・52層で構成され、10~20cm程度の厚みを持つ。D区からA区へかけて続く1層を覆う形で30層がB・C区へかけて広範間にみられ、さらにB・C区では52層が覆い、C区では81・85層などもみられる。山側へ向い横層へ被せるように順次土を敷いており、薄い層を重ねる登城路部分とは異なり比較的大きな単位での整地であったことがわかる。また、層内には瓦片や土器片も含む。

出土遺物【第26~29・33図】

陶器は第26図1~6は30層、7は31層、8・9は52層出土である。時期は2の近世前期のものから4の幕末期まで様々であるが、図化に至らなかった細片をみるとその中心は19世紀台である。1は在地系の押鉢で口径30.8cm。2は肥前系の平鉢片で縁掻軸が掛かる。3の広東碗、5は端反碗である。4は在地系の碗で見込みに崩れた「寿」字を描く。6は貝型の手塙皿で内面に水草を描き、底面は三足を付ける。8は肥前系の平鉢、9は在地系の落とし蓋。

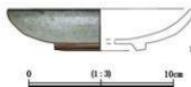
瓦は第29図、1~5は30層、6は1層、7は63出土である。1はD類の軒丸瓦、2はk類軒平瓦、3は古相のc類の下向き三葉文であるがこれまで確認されているものより葉が尖り、葉脈も明確に表現されている。4はm類の左軒棟瓦。5は雁振瓦、出土品の多くは棟部に文字の刻印がみられるが、こちらについては、本体の中央付近に「○内にナ」字状が押される。6はC類の軒丸瓦。

第33図4の煙管首は碗形の火皿~頭部のみの残存である。

(焼土層)

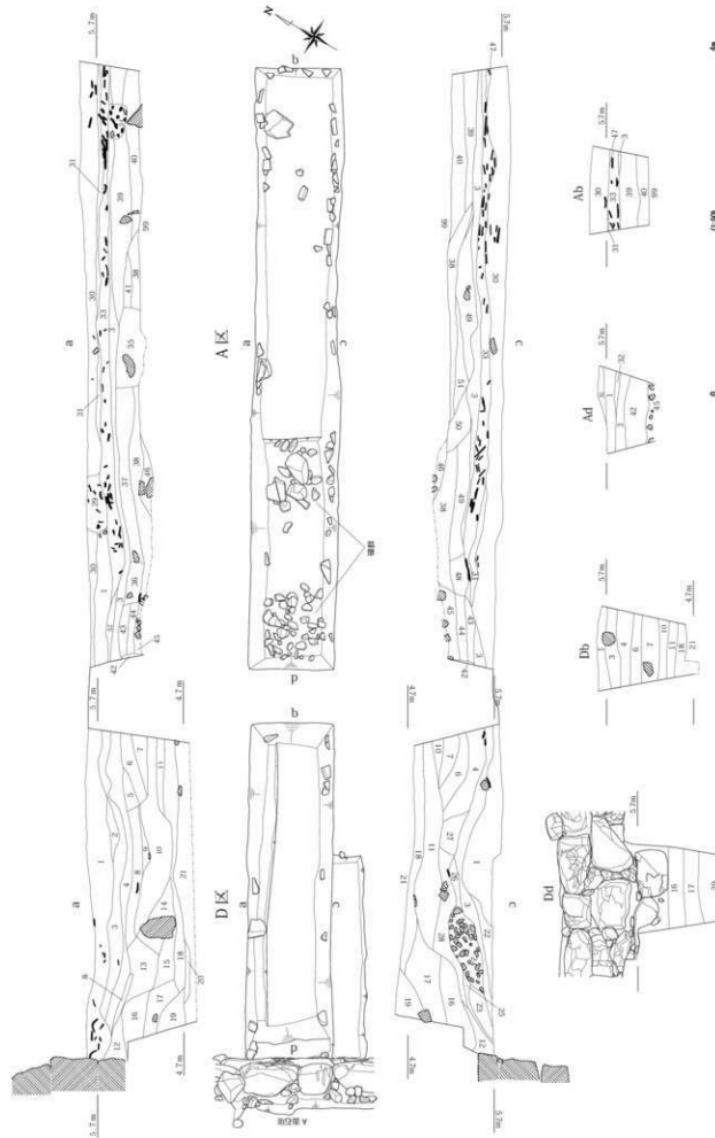
②大規模焼土層(33層)

これらの幕末期路盤面層の下にはA区を中心として、標高5.7m付近を上面として黄色系の砂礫層である31層が広がる。厚さは5cm程と薄いが、硬化し上面が水平である点や、その土質や色調からも他調査

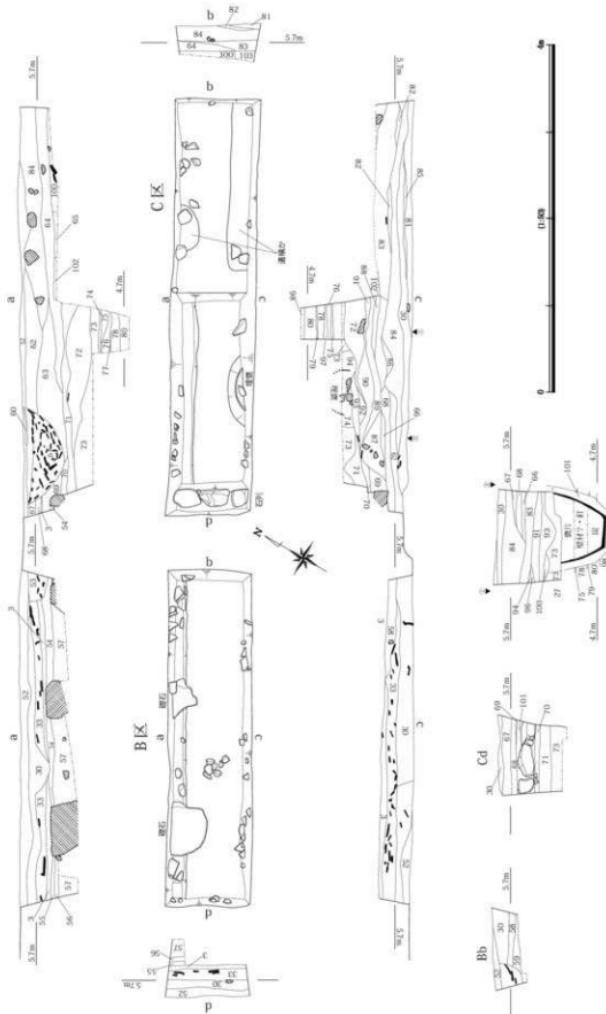


第23図 P9 出土遺物実測図

第Ⅲ章 調査の結果



第24図 第1 トレーンA・D区平面図・土層図



第25図 第1トレーンチB・C区平面図・土層図

第Ⅲ章 調査の結果

1. にじむ・褐色土 2SYR5-3 (瓦片含む)	36. 黄褐色土 10YR3-1	71. 黄褐色土 2SYV4-1 (ブロック土) の堅土地
2. 褐色土 2SYR4-1 (0~5cm の軟土を多く含む)	37. 黄褐色土 2SYR4-1	72. 黄褐色土 2SYR4-1 (瓦片含む)
3. 黄褐色土 2SYR4-1 (瓦片含む、堅土地)	38. 黄褐色土 2SYR4-1	73. 黄褐色土 2SYR4-1 (瓦片含む)
4. にじむ・黄褐色土 10YR4-2	39. 黄褐色土 10YR4-2	74. 黄褐色土 10YR4-2
5. 黄褐色土 2SYR6-6 (堅土地)	40. 黄褐色土 2SYR7-3	75. 明黄色土 5YR6-2/1
6. 黄褐色土 2SYR6-6 (堅土地)	41. 黄褐色土 2SYR7-3 (堅土地)	76. 黄褐色土 2SYR7-3 (堅土地)
7. 黄褐色土 2SYR7-3	42. 黑色土 10YR2-2	77. 黄褐色土 2SYR7-3
8. にじむ・黄褐色土 10YR7-2	43. にじむ・黄褐色土 10YR7-2 (堅土地)	78. 黄褐色土 2SYV4-1 (瓦片地)
9. にじむ・黄褐色土 2SYR7-3 (堅土地)	44. 黄褐色土 10YR7-2 (0~5cm の軟土を多く含む)	79. 黄褐色土 2SYV4-1 (瓦性)
10. にじむ・黄褐色土 2SYR7-3 (堅土地)	45. 黄褐色土 10YR7-2 (1~20cm の堅土)	80. 黄褐色土 2SYV4-1 (堅性)
11. 黄褐色土 2SYR7-3 (上部が堅化する堅土地)	46. 黄褐色土 10YR7-2 (2~20cm の堅土)	81. にじむ・黄褐色土 2SYR7-3 (瓦片含む、上部は堅土地盤面)
12. 黄褐色土 2SYR7-3 (堅土地)	47. 黄褐色土 10YR7-2 (3~20cm の堅土)	82. 黄褐色土 2SYR7-3 (瓦片含む、上部は堅土地盤面)
13. 黄褐色土 2SYR7-3 (ブロック状)	48. 黄褐色土 10YR7-2 (6cm と一塊)	83. 黄褐色土 2SYR7-3 (瓦片含む、上部は堅土地盤面)
14. 黄褐色土 2SYR7-3	49. 黄褐色土 10YR7-2 (7cm と一塊)	84. 黄褐色土 2SYR7-3 (瓦片含む、上部は堅土地盤面)
15. 黄褐色土 2SYR7-3	50. 黄褐色土 10YR7-2 (7cm と一塊)	85. 黄褐色土 2SYR7-3 (瓦片含む、上部は堅土地盤面)
16. 黄褐色土 2SYR7-3	51. 黄褐色土 10YR7-2 (8cm と一塊)	86. 黄褐色土 2SYR7-3 (瓦片含む、上部は堅土地盤面)
17. 黄褐色土 2SYR7-3	52. 黄褐色土 10YR7-2 (9cm と一塊)	87. 黄褐色土 2SYR7-3 (瓦片含む、上部は堅土地盤面)
18. 黄褐色土 2SYR7-3	53. 黄褐色土 10YR7-2 (10cm と一塊)	88. 黄褐色土 2SYR7-3 (瓦片含む、上部は堅土地盤面)
19. 黄褐色土 2SYR7-3	54. 黄褐色土 10YR7-2 (10cm と一塊)	89. 黄褐色土 2SYR7-3
20. 黄褐色土 2SYR7-3	55. 黄褐色土 10YR7-2 (10cm と一塊)	90. 黄褐色土 2SYR7-3
21. 黄褐色土 2SYR7-3 (瓦片地盤面)	56. にじむ・黄褐色土 10YR7-2 (堅土地盤面)	91. 黄褐色土 2SYR7-3 (0cm と一塊)
22. にじむ・黄褐色土 2SYR7-3	57. 黄褐色土 10YR7-2 (1~20cm の堅土地盤面)	92. 黄褐色土 2SYR7-3
23. 黄褐色土 2SYR7-3	58. 黄褐色土 10YR7-2 (2~20cm の堅土地盤面)	93. 黄褐色土 2SYR7-3 (0cm と一塊)
24. 黄褐色土 2SYR7-3 (0~5cm の軟土を多く含む)	59. 黄褐色土 10YR7-2 (54mm と一塊)	94. 黄褐色土 2SYV3-1 (瓦片地盤面)
25. 黄褐色土 2SYR7-3 (8~9cm と一塊)	60. 黄褐色土 10YR7-2 (64mm と一塊)	95. 黄褐色土 2SYV3-1 (瓦片地盤面)
26. 黄褐色土 2SYR7-3	61. 黄褐色土 10YR7-2 (74mm と一塊)	96. 黄褐色土 2SYV3-1 (瓦片地盤面)
27. 黄褐色土 2SYR7-3	62. にじむ・黄褐色土 2SYV3-1	97. 黄褐色土 2SYV3-1 (7mm と一塊)
28. 黄褐色土 10YR4-1	63. 黄褐色土 10YR7-2 (ブロック状の堅土地盤面)	98. 黄褐色土 2SYV3-1 (堅土地盤面)
29. 黄褐色土 10YR7-2	64. 黄褐色土 10YR7-2 (瓦片地盤面)	99. 黄褐色土 2SYV3-1 (堅土地盤面)
30. にじむ・黄褐色土 2SYV5-3 (瓦片含む、上部は堅土地盤面)	65. 黑色土 10YR4-1 (堅土地盤面)	100. 黄褐色土 2SYV3-1 (瓦片地盤面)
31. にじむ・黄褐色土 10YR4-1 (堅土地盤面)	66. 黄褐色土 10YR7-2 (堅土地盤面)	101. 黄褐色土 2SYV3-1 (瓦片地盤面)
32. 黄褐色土 10YR7-2 (堅土地盤面)	67. 黄褐色土 10YR7-2 (堅土地盤面)	102. 黄褐色土 2SYV3-1 (瓦片地盤面)
33. にじむ・黄褐色土 2SYV5-3 (瓦片含む、上部は多量の他瓦を含む)	68. 黄褐色土 2SYV6-3 (磚を多く含む)	103. 黄褐色土 2SYV3-1 (瓦片地盤面)
34. 黄褐色土 2SYR3-2 (10cm 程度の堅土)	69. 白色土 10YR4-2	104. 黄褐色土 2SYV3-1 (瓦片地盤面)
35. 黄褐色土 10YR2-2	70. 黄褐色土 10YR3-2 (堅土地盤面)	105. 黄褐色土 2SYV3-1 (瓦片地盤面)

第24・25 固土層図土色

地点でも確認できる整地層と同類であると考えられ、ある時期の路盤面であったと考えられる。この整地層は直下にある33層上面の凹凸を埋めるように敷かれている。33層はA区からB区までの広範囲に亘りみられる焼土層である。上面標高は掘削で5.5m、山側で5.7mと緩やかに上昇する。最大で20cmの厚さを測る当層には、多量の炭片や焼土塊が混ざり、被熱により赤変・変形した焼瓦が含まれる。瓦は層内一面に廃棄されたように検出され、層自体も黒変することから大規模な火災に由来する層であると推定される。A区では33層に連続する焼土層は確認出来ないものの、31層へ繋がるとみられる67層が厚く堆積する。

出土遺物は第30・31図8~20の瓦のみである。広範囲に厚く堆積する層からは多量な瓦の出土をみたが、破片を含め陶器類は出土しなかった。図化し得なかった分を含め残瓦は皆無であり、器壁の厚い古相の瓦が大半であり、被熱し変色する個体が多くみられた。平瓦片が多く占め、文様瓦は8・9の軒丸瓦だけであり、軒平瓦は出土しなかった。8はC類軒丸瓦、激しく被熱しており、変色変形が著しい。9はE類。10~12は丸瓦で、いずれも断面の厚さが2cmを超える厚手の個体で、12の上面には四菱の刻印が残る。13~17は平瓦、いずれも1/2以下の残存であり、全形は不明である。18は棟込瓦、両端を丸くが台形状の器形に玉縁部を有し、全長は14.8cm。19は磚、破片であるが厚さは3.6cm、域内からの出土例は極めて少ない。

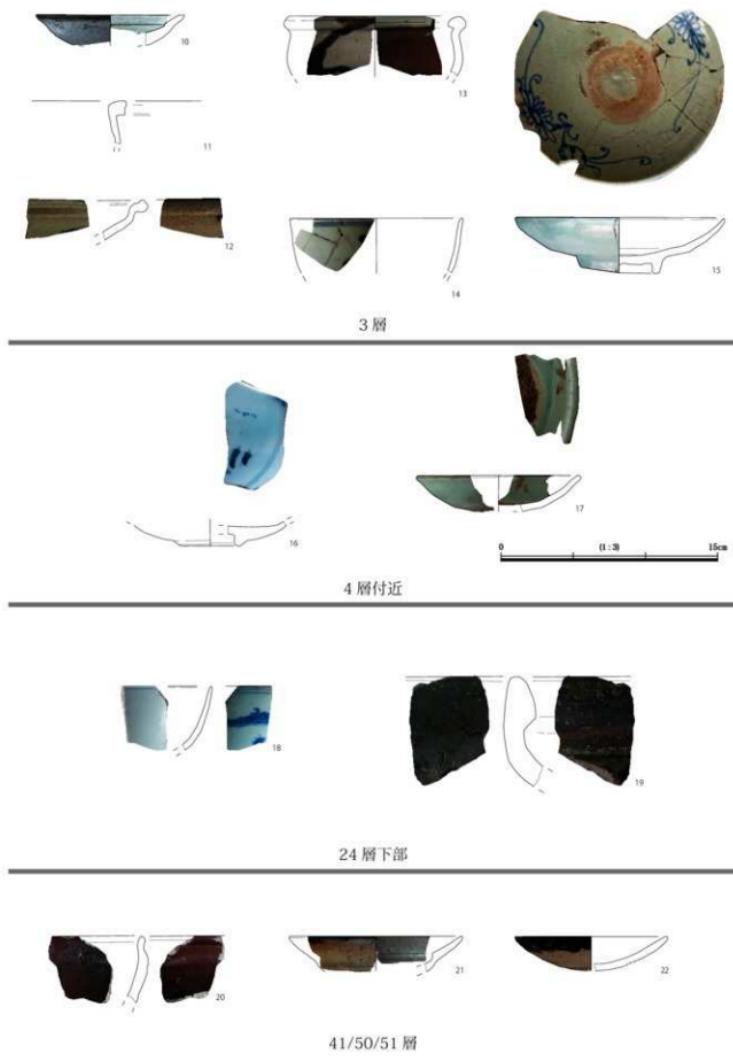
(焼土層下層)

③ 整地層

焼土層直下の標高5.5m前後には黄色系砂礫で構成された3層が広がる。D・A・B区を跨ぐ当層は、石垣へ向けて緩やかに蛇行しながら上昇しており、硬化している点や土質などから31層同様ある時期の路盤面であったとみられる。焼土層は当層の直上に厚く堆積していることから、焼土以前に整地された層である。B区では上面標高が5.5mの礎石とみられる石を2石検出し、それより2.3m程北東側へ行ったD区では上面標高を同じくする石列を検出した。当層はこれらを覆う形で敷かれていることから、これらの機能が廃止された後の整地である。3層はC区へ入ると不明瞭となり、砂礫層ではないが、一連の整地面は63・64層へ統く可能性がある(図版6)。一方トレンチ中央付近の標高5.5m程には黄色砂礫の102層もあり接続関係も考えられるが、位置が若干低いことから石列下部へ向う一段階古い整地面と推定される。同様に黄色系の砂礫で構成された層にはA区の43・44層や56層があるが他層に切られているため、本来の整地範囲は不明であるが、それぞれ硬化した整地層であることからある時期の路盤面であった可能性がある。

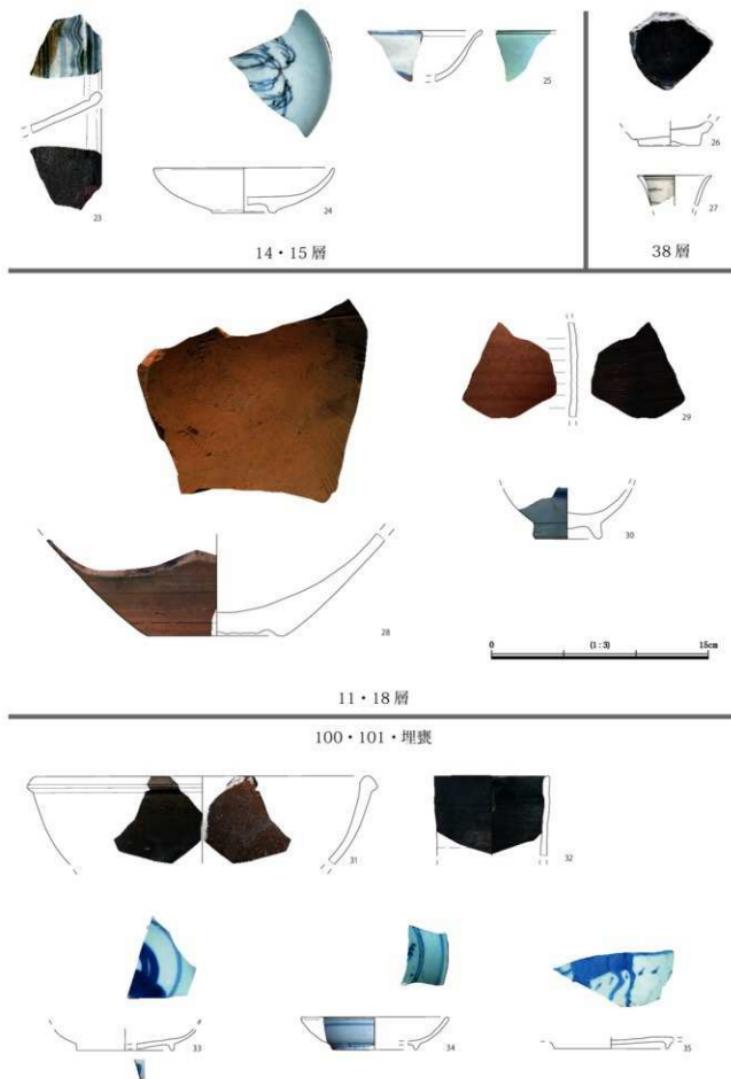


第26図 第1トレンチ出土遺物実測図①(焼土層上)

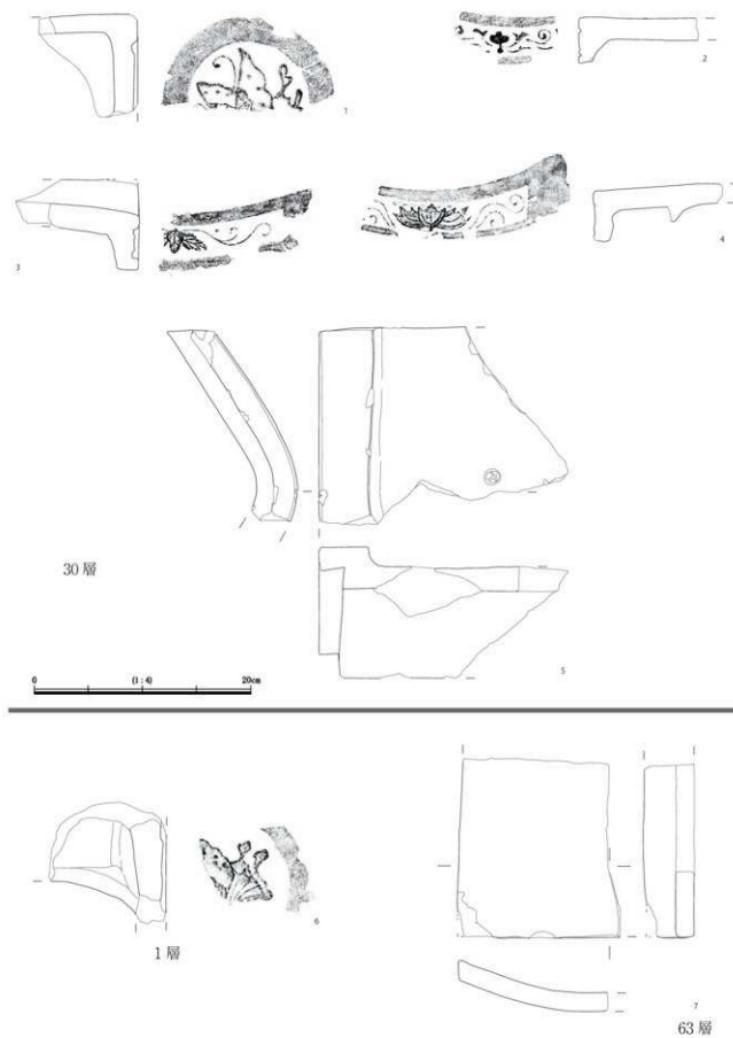


第27図 第1トレンチ出土遺物実測図②(焼土層下)

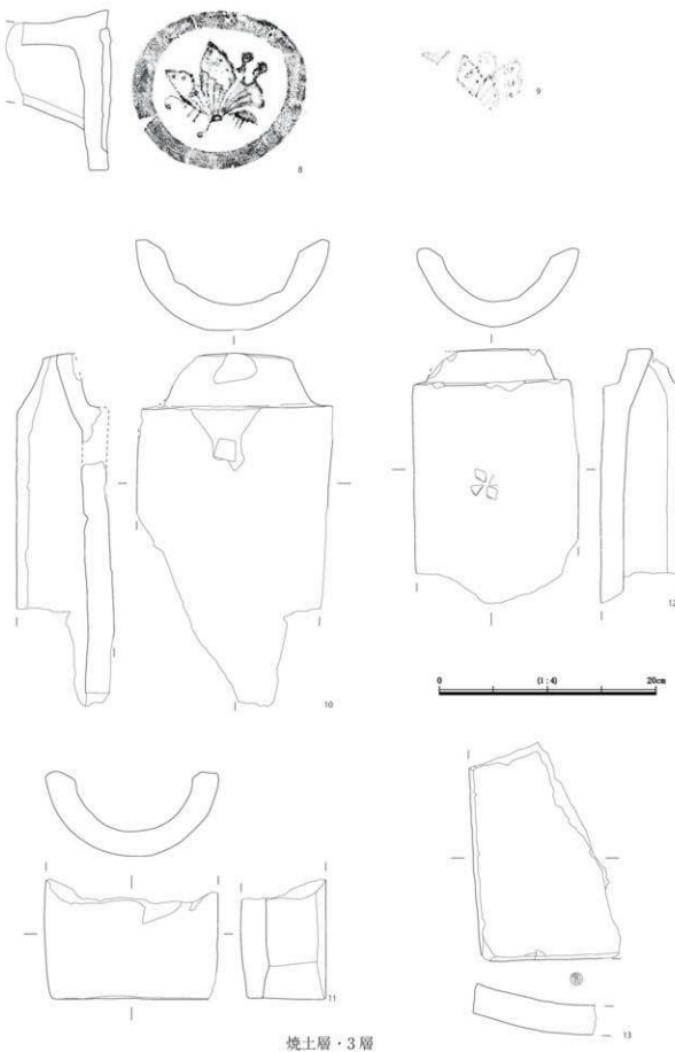
III - I 調査の概略



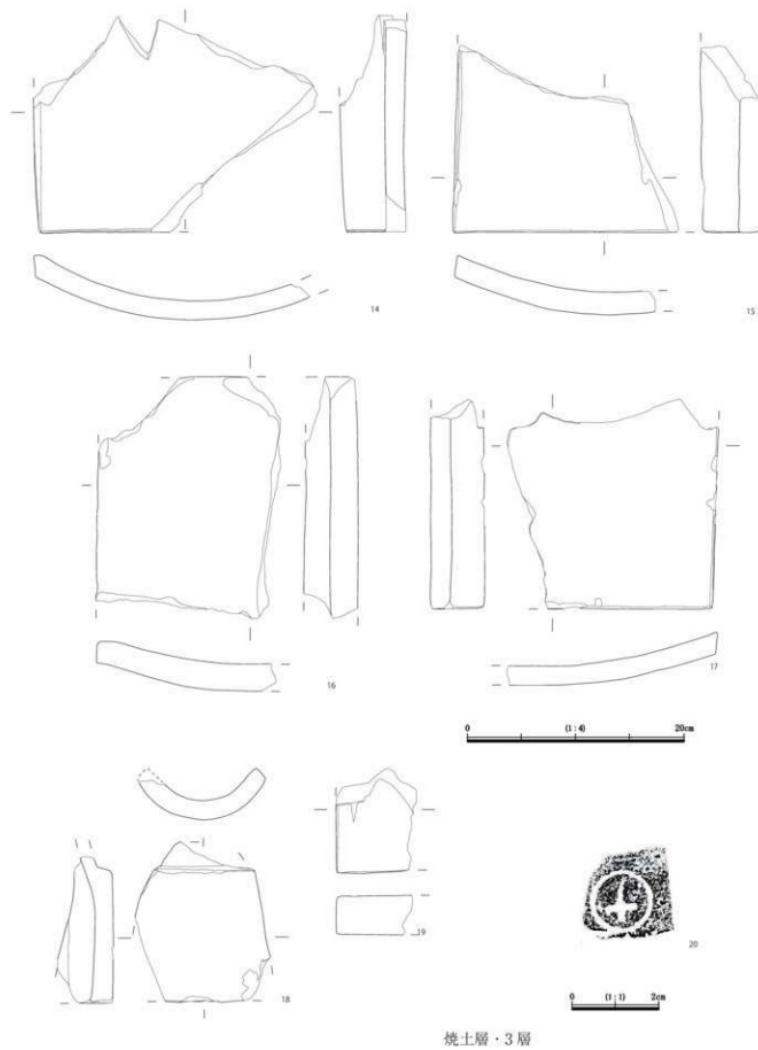
第26図 第1トレンチ出土遺物実測図③(焼土層下)



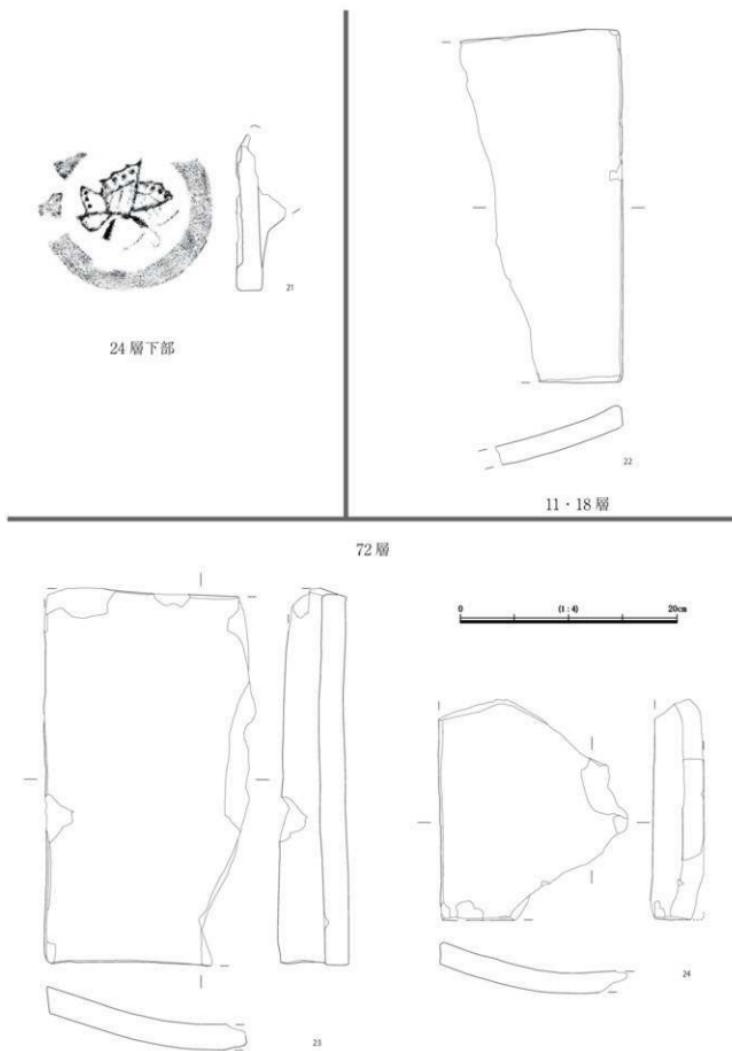
第29図 第1トレンチ出土遺物実測図④(焼土層上)



第30図 第1トレンチ出土遺物実測図⑤(焼土層)



第31図 第1トレンチ出土遺物実測図⑥(焼土層)



第32図 第1トレンチ出土遺物実測図⑦(焼土層下)

A 区の底面に位置する99層は上面標高が5.2m付近にあり、区内の広範囲へ広がる。水平方向に堆積しており46層の礫群に対応する可能性がある。

また、砂礫は用いないものの整地層と考えられるのがD 区の11層である。標高5.0m付近に広がる当層は上面がかなり硬化しており、ある時期の路盤面であったと考えられる。

C 区の75・79層は最初期の整地層であるとみられる。共にシルトを用いた層で上面標高は75層が4.95m、79層が4.75mである。白色を呈す両層は厚さ2～3cmと非常に薄く(Ca 面では一部厚くなる)広く使用されており、土層断面では線状に細く伸びる層である。上層でみられた黄色系砂礫が硬化する整地ではなく、肌理の細かい砂を一面に撒いたような様相を呈する。同様の状況は平成27年度実施の第39次調査の樹形内でも確認できており、城郭形成以前とみられる地山層の上に白色の細砂が薄く敷かれていた。

このように明確な整地層がある一方、D 区4・6～10・26～28層、A 区36～40・49層などは硬化はせず埋土的な質感の層が広範囲にみられる。

④下層焼土層

また、5・41・50・51・93層などの33層とは異なる焼土層もみられる。また、B 区で検出した礫石の基盤層である57層にも焼土や炭の破片が多く含まれている。広範囲に連続しないため一連の層であるかは不明であるが、関連性が想定される。

⑤盛土状堆積

D 区の A 面石垣付近にみられる13～20層で構成されている。Da 面側で標高5.5m、Dc 面で5.4mに据えられている根石の下方に位置しており、石垣より幅2m、地山付近からの高さ70cm程の土壘状を呈す。18～20層はその基礎部分を構成する層である。18層は後述の地山層である21層上に敷かれた層である。上部に位置する16層は石垣下部へ入り込んでおり、Dc 面では石垣設置のためか裾部が僅かに掘り下げられている。その形状から石垣構築以前に存在していた土羽とも想定されるが、外面に明確な硬化面などの露出していた痕跡がみられないことから、嵩上げ中の工程差である可能性も考えられる。

⑥地山面

C 区98層とD 区21層は城郭形成以前の堆積層(地山)である。いずれも均質な粘土層であり、その標高はD 区の石垣下部付近が最も低く4.6mであり山側へ向かい4.8m付近まで緩やかに上昇する。C 区98層は上面の標高が4.65mであり黒色の粘土質である。その上80層は上面標高が4.75m程とD 区での検出高とほぼ同じであり、遺物等も含まず粘土層でないが地山である可能性も残る。

遺物

焼土層以下の層には陶磁器類が点在していたが、いずれも小片であり、図化できたのは第27・28・32図のみである。図化し得なかった分も含めた遺物の磁器はいずれも近世前期であり、17世紀前半台のものが目立つ。

出土遺物は陶磁器類が第27・28図の10～30、瓦が第32図21・22、その他の遺物は第33図の1～3・5である。焼土層直下の広範囲に亘る3層からは第27図10～15の陶磁器が出土した。10～13・15は肥前系で12は溝縁皿、13は火入、14は中国製の薄手の碗、15は見込みを蛇の目釉剥ぎし砂目跡が残る。

3層直下の4層からは第27図16・17の磁器、第33図5の煙管が出土した。磁器は近世前期の肥前系であり、17は青磁の小皿で、見込みは蛇の目釉剥ぎする。高台部分は欠損するが、無釉である。煙管の雁首は小口部を欠き、火皿は碗形である。

同じくD 区の3層直下の礫群である24層の下部からは第27図18の肥前系磁器碗と備前窯の口縁部である19、第32図21の瓦が出土した。瓦は古相の軒丸瓦B 類であり、正面に向かって右を向く唯一の蠍文である。

下層の焼土層である41・50・51層からは第27図20～22の陶器・土師器、第33図2・3の鉄製品が出

土した。20は瀬戸・美濃産の天目茶碗で色調は褐色を呈す。21は肥前系の皿、22は土師皿で口縁付近には模が広範囲に付着する。第33図2の鉄釘は鋒化が激しく、地金部分は明瞭ではないが、断面形は長方形を呈す。3は取手状の鉄製品で、鋒化が激しいが方形状の基部に、直径4.5cm程の輪を取り付く形状が想定される。

D区石垣下の盛土状の堆積である14・15層から第28図23～25が出土した。23は肥前系の平鉢で櫛目文に櫛軸がみられる。破片であるため、本来は縁櫛軸であったとみられる。

初期の整地面とみられる99層上の38層からは第28図の26・27が出土した。26は瀬戸・美濃産の天目茶碗、黒色に発色し高台は露胎する。27は肥前系の瓶である。

また、初期の整地面とみられる11層からは第28図28・29の陶器、その下18層からは30の磁器、そのどちらかより、第32図22の瓦と第33図1の鉄釘が出土した。28の擂鉢は7条1単位の目を持ち、1単位間の間隔は広い。かなり使い込まれており、内面は滑らかとなっている。29は備前の瓶で外面には細い櫛目がみられる。30は碗である。22は平瓦とみられ、全長は32.1cmを測る。1の鉄釘は全体に鋒化が激しいが、僅かながら地金が露出する。

(トレンチ内その他の遺構)

⑦礫群

A区の底部、標高5.0～5.3mに広がる45・46層、2つの礫群である。幅1mほどの範囲内に拳大の礫が集中したものである。性格は不明であるが、天球丸の調査でも確認されている建物基礎部分の地業に類似する。また、46層は整地面である99層に対応する可能性があることから、99層が路盤面であった城郭の初期段階に建物が存在していた可能性がある。

⑧礫石及び石列

B区内では礫石とみられる表面が平らな石材を2石検出した。いずれも壁内へ統いているため全形は不明であるが、上面部分の直径は現状で55cmと35cm、深さは30cm以上を測る。ブロック状の埋土である57層中に据えられており上面標高は5.5m、2石の中心距離は150cmである。また、礫石より2.2mほど離れたC区には上面標高が同じ石が3石、石列状に並ぶ。高さは20cm程度であり、対面する石列はないため溝ではなく、階段状の段差であり区画的な石とみられる。上面標高を同じにしており、57層を路盤面とした礫石立建物とその区画という一連の遺構である可能性が想定される。しかし、3層が整地される頃までは段差ごと埋め立てられている。

⑨木製品堆積層(72層)【第32・33・34・35図】

72層はC区の石列の段差下、標高5.3mより船底状の掘り込みであり、多量の木製品の廃棄層であるとみられる。後述の下層焼土層である93層とはほぼ同じ高さより掘られており、一括投棄された様相を呈する。

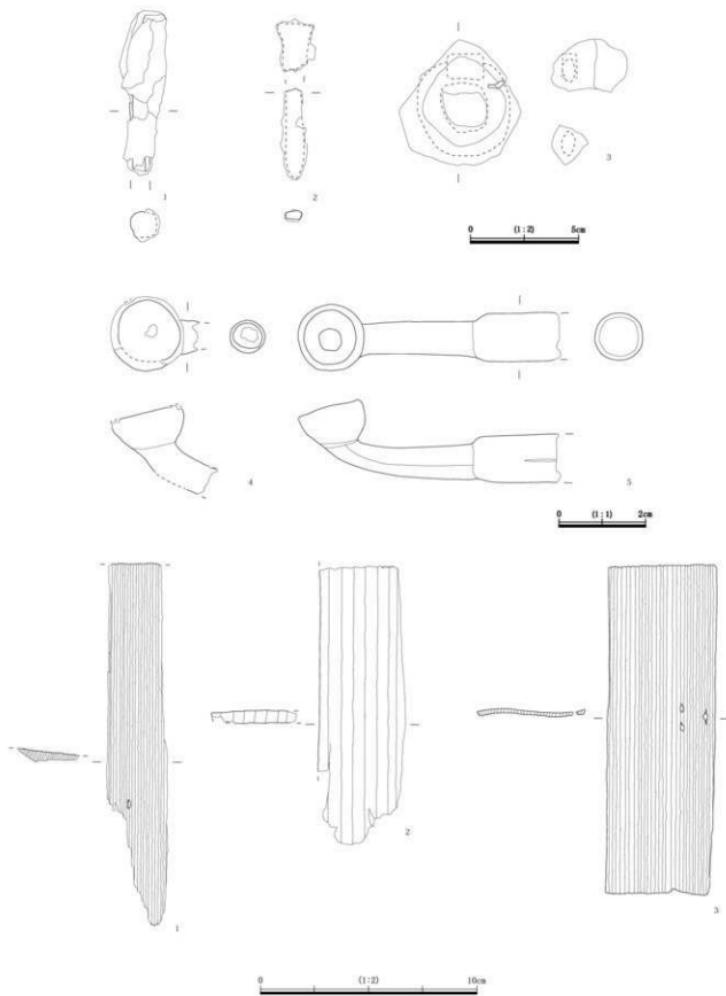
出土遺物は第32図23・24の瓦、第33～35図の木製品がある。屋根材とみられる木製品が中心であり僅かに瓦を含む。瓦はいずれも平瓦片であり、23は全長34.7cm。内部の木製品はほぼ全て屋根材とみられ、柿葺に使用される厚さ1～3mm程度の短冊状の薄板状を呈し、竹釘穴とみられる直径1mm程度の孔を有する



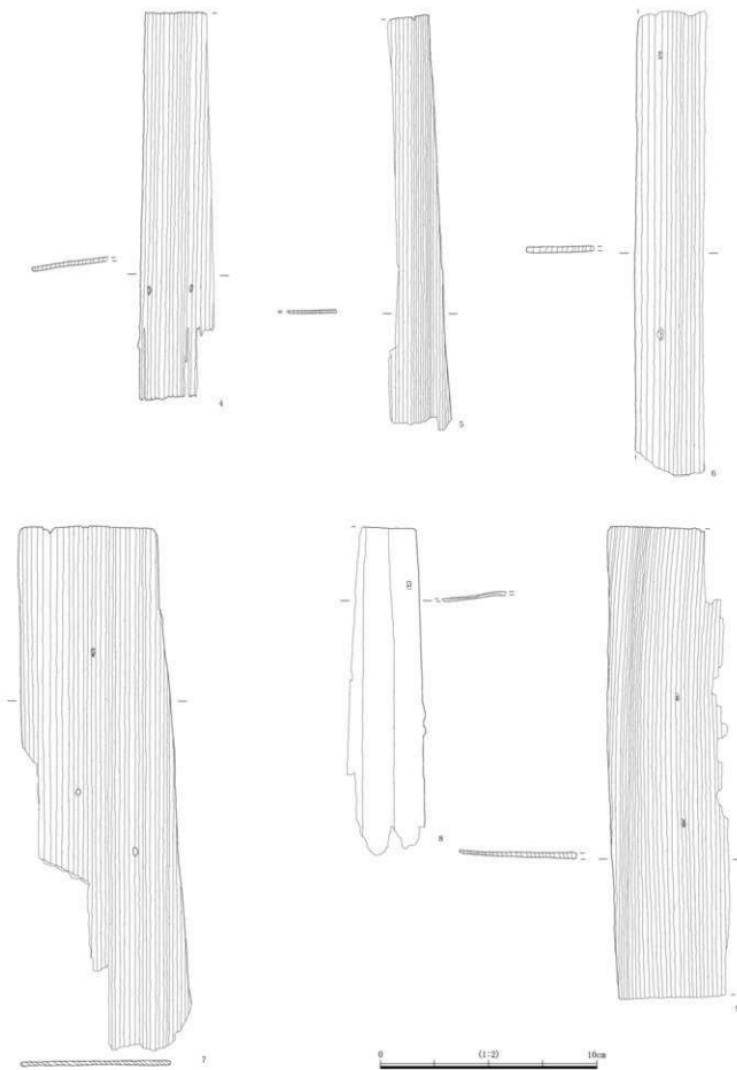
写真3 木器堆積(72)層検出風景



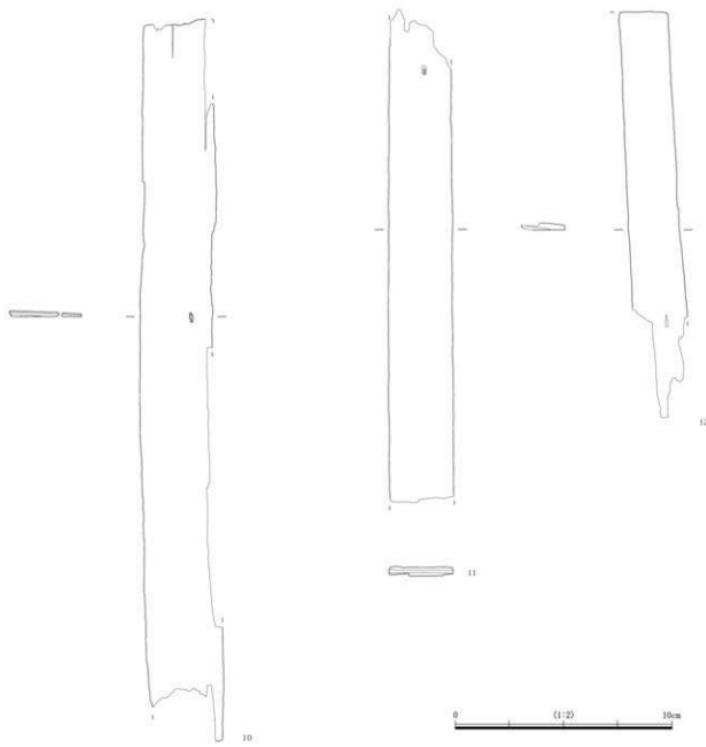
写真4 埋甕検出中(第39次調査)



第33図 第1トレンチ出土遺物実測図⑧(焼土層下)



第34図 第1トレンチ出土遺物実測図⑨(焼土層下)



第35図 第1トレンチ出土遺物実測図⑩(焼土層下)

ものも多数ある。途中で折損するものが大半であるため規格は不明であるが、幅4～5cm前後、長さ15～25cm前後が多い印象を受け、長さ15cm・25cm・30cm以上、に大別できる可能性がある。樹種はスギで木取りは柵目が多く見られるが、30cm以上の大型品となると木目の出ない材を用いているようである。

(10) 墓壇

C区の最下部に位置する。第34次調査でその存在は明らかとなっていたため、平成27年度の第39次調査で追加調査を実施した。詳細報告は次年度以降に行う予定であり、今回は土層図だけ追加で掲載した。C区の土層堆積状況は他区とは異なり、小単位が多く重なる。壇は3層から続くとみられる66層による整地以前に機能していた備前壇である。整地層の下、標高5.3m付近には下層焼土層である93層が広範囲に広がり、その直下に位置する壇は、器壁より10cm程度外側に掘り方を持ち、底部は標高4.7mの地山を掘り込み据えられていた。下半は良好に残存するものの、上半をほぼ失っており、口縁部片を含む多くの破片が焼炭とともに壇内上部に折り重なるように堆積していた。その下方の壇内中位付近には多量の焼炭や、壁材とみられる焼けた土塊、鉄釘が堆積し、さらに下方、壇内下層は全て焼炭であった。壇本体も被熱がみられ、火災等による壇の破壊と機能停止が想定される。73層内には明確な掘り方が確認できたため、城郭の最初期段階ではなく、ある程度時代が下ってからの設置を考えられ、崩壊した上半は地上に出ていた可能性がある。

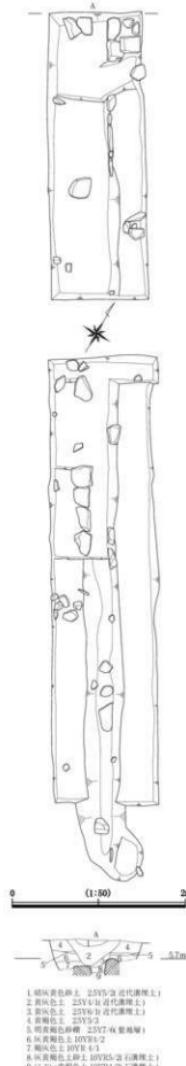
出土遺物は101層、埋葬掘り方理土中より第28図31～35の陶磁器がある。32は備前の瓶であり、33～35は中国系の皿。

(7) 第2トレンチ(溝1)

第1トレンチと直交する形で設定した幅1.2m、長さ9.0mのトレンチである。幕末期路盤面検出時、幅60cm程の素掘りの溝状造構がE面石垣方向へ伸びており、掘削した結果、包含物より近代以降の溝であることが判明し、同時にその下部より石組みの溝状造構が新たに検出されたため、詳細を確認するためにトレンチを設定した。上面標高が5.7m前後である石溝であるが、石垣寄りを中心として大部分が石抜きにあっており、両岸が残る部分は僅かに数石程度である。残存部分から溝幅20cm、深さ20cm程度であることが分った。また、上面から続くかたちで黄色系の砂礫を用いた整地層も確認された。近接する第1トレンチC区ではこの整地面へ続く明確な層は確認出来ないが、67層などが対応する可能性がある。いずれにしても、幕末期路盤面が使用されるより1段階前の路盤面であることを確認した。出土遺物は第37図のI類軒丸瓦のみである。

(8) 掘り下げ中出土遺物

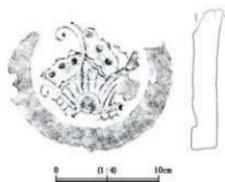
幕末期路盤面上の近代層には、近世遺物が多数含まれて



第36図 第2トレンチ実測図

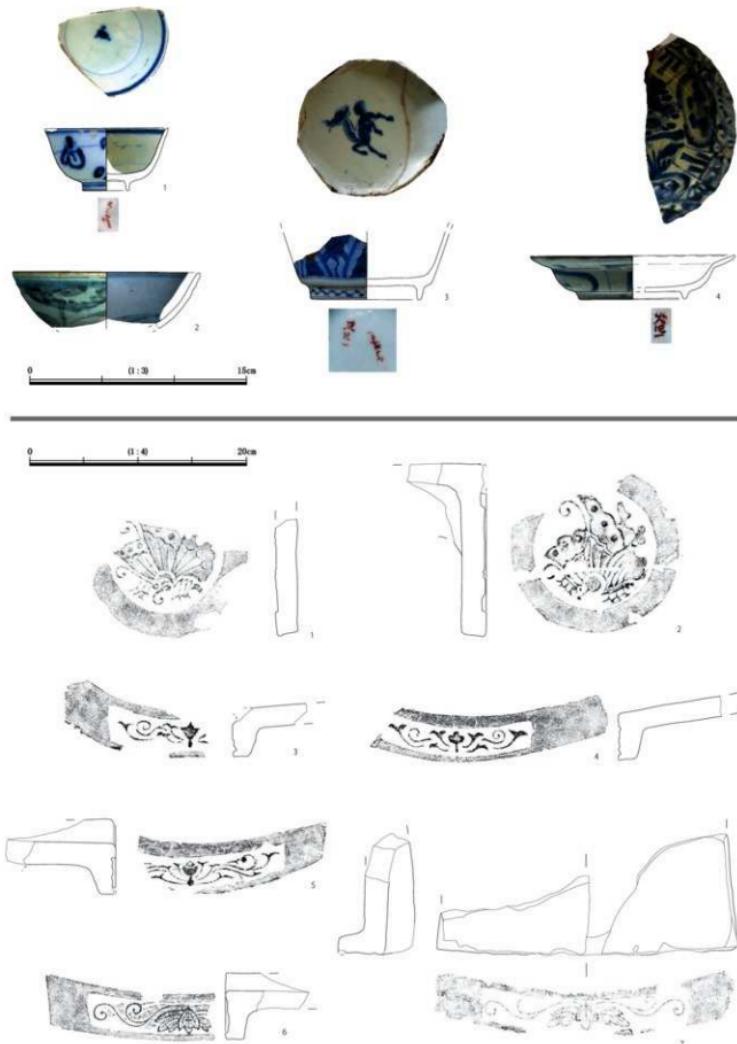


写真5 近代溝検出状況
(第2トレンチ設定前)

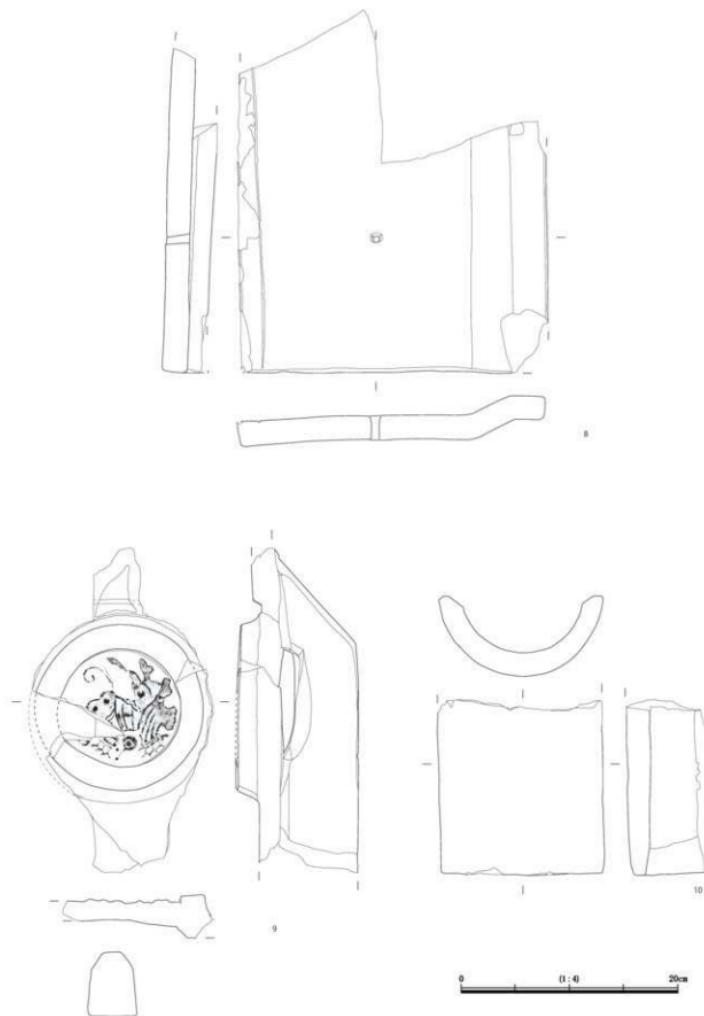


第37図 溝1出土遺物実測図

おり、表採遺物とともに固化可能であったものを報告する。第38図1は小碗、2は中国系の碗で外面花文である。3の肥前系八角鉢は見込みに麒麟が描かれる。4は中国系の輪花皿である。瓦の1はH類・2はI 1類軒丸瓦である。3は初出の型で4のk類の変形とみられる。5はh類、6は下向き三葉のn類、7も下向き三葉であり、唐草の形はn類と同じであるが葉の形が全く異なる。近年同種のものが数点表採されている。39図の8は左棟の目板瓦、28.6cmの幅以上の長さとなることから長方形状となり、3点の釘穴があったとみられる。9は鬼瓦、中央付近に位置する蝶文部分と、背面の支部のみを残す。蝶文はI 1類であり、軒丸瓦と同一のものである。10は厚手の丸瓦である。



第38図 掘り下げ中出土遺物実測図①



第39図 掘り下げ中出土遺物実測図②

III-3 第2調査区

1 調査経過と基本層序

第2調査区は、樹形石垣および周辺部分を含む範囲で、大手橋を渡り鳥取西高校へと至る道路と右方県立鳥取西高等学校グラウンド内に位置する。堀石垣(橋の取り付き部)より山側へ約36m、E面石垣よりグラウンド側へ約29mで設定した調査区で、石垣上面部分を含んだ調査面積は1,100 m²である。第7図の通り、第7次調査で石垣裾部分、第21・26次調査で中ノ御門表門、第27次調査で中ノ御門櫓門、第30次調査で石垣上の発掘調査を実施している。城の正門にあたり、既往の調査より門礎石や解体された樹形石垣下部の残存は確認されていたため、今回はこの全体を検出し、橋・門とともにもう一つの復元対象となっている番人小屋の状況を明らかとすることを目的とした。調査に際しては範囲をバリケードで囲い、重機を用いて表土部分の除去を行った。

基本的な層序は第40図の通り、第1調査区同様大きく分けて3層、近現代の層2つと近世層で構成されており、後者についてはさらに複数の層が含まれる。詳細については下記の通りである。真砂土で整地されたグラウンド面の標高は、堀側で6.5m、山側で6.6m程度と緩やかに上昇する。道路部分についてはアスファルト舗装されており、標高は山側は第1調査区と同じく6.6m程であるが、堀側の橋取り付き部分では5.4mである。グラウンド整地およびアスファルト+路盤基礎が近現代層の1つ目にあたる戦後を中心とした層、近現代2つ目にあたるのがその下層に広がる褐色土層であり、城解体後の明治期以降のグラウンドおよび道路を構成していた層である。

調査区の南東部、グラウンド部分の堆積状況は標高6.5～6.6mの地表面より、50～60cmは所謂グラウンド土である黄色系の土が堆積する。数cmから数10cmまで様々な厚さの整地土が幾重にも重なり、順次グラウンドが嵩上げされている。機械転圧された水平層は戦後でも比較的新しい年代の層であり、急速にグラウンド標高が上昇していることが分かる。その下方には褐色系の土が広がる。黄色系の砂礫を用いてはいないが、水平方向を意識した層が何層も重なっており、それぞれが硬化することからも旧グラウンド面と考えられ。学校利用が開始された明治22年以降順次盛られたと考えられる。この褐色土を除去すると、幕末期遺構面が広がる。後述の通り登城路面は、門や番所付近で標高5.3m前後であり、山側へ向かい50cm程の傾斜が付くため、この近代褐色土も厚さが異なり、堀側へ向かい厚みを増す。橋から高校へと続くアスファルト道部分の堆積状況についても基本的にグラウンドと同じである。10cm前後のアスファルト舗装を除去すると直下には基礎となる鉢石が10～15cm敷かれる。これらを除去すると、グラウンド部分でいう褐色土相当の土となる。明治期の城建物解体以後に解体された樹形石垣は石材すべてが除去されたのではなく、道路部分については根石から1～2段程度は残置されたため、樹形石垣内では1m程の段差が生じており、その解消のため解体石材等が多量に投棄されていた。アスファルト基礎部分直下にこれらの層がみられることから、順次嵩上げされたのではなく、明治期の埋め立てから現代舗装が行われるまでは路面高にそれほど変化がなかったとみられる。戦前の古写真をみてグラウンド側より道路面が高く写っていることが裏付けとなろう。この埋め立て層を除去すると幕末期路面が現れる。

第2調査区中央には堀へと注ぐ近代溝による搅乱が存在する。明治期の敷設とみられ樹形石垣や中ノ御門表門礎石を取り外し登城路を横断し、堀へと続いている、この間の幕末期面は存在しない。また、現コンクリート橋の付根付近より久松公園にかけての範囲には送電線が入った鉄管が埋設されている。



第40図 基本層序

中ノ御門表門の礎石下や雁木下を掘り込み管を通したもので、現場内を縦断する形で続く。埋設時期は不明であるが、動物公園時代の管とみられる。

2 調査成果

検出遺構と遺物

(1) 幕末期路盤面

黄色系砂礫で構成された整地層であり、表面が硬化する。色調は黄色系が主体であるものの、地点によっては水作用の影響か灰色～褐色系へ変色する部分も多い。樹形外は2～3cm程度の薄い層が小範囲に散かれている場合が多く、単色・単層が一面に広がるものではない。

樹形内では黄色系の土色を呈しており、近代褐色土を掘り下げると、瓦片が多量に散乱する層が検出され、幕末期路盤面はその直下に広がる。この状況は樹形石垣奥壁前や櫓門で特に顯著にみられ、併せて門内・門前後の溝にも瓦が堆積することから、城解体時に出た不要瓦の廃棄層であると考えられる。この瓦廃棄層を除去すると現れる均整的な露盤面の上面標高は表門付近で4.8m、直進して奥壁前で5.2～5.3m、右折した櫓門内で5.3～5.4m程と緩やかに上昇する。櫓門を抜けると右側には東西方向に走る溝があり、これを境界として内側が登城路であったとみられ、左折後U面石垣前の標高は5.5～5.6m、さらに直進した調査区間で5.8mである。また、T面石垣雁木前の標高は5.9mである。一方溝2を挟んだ南側、番人小屋付近では小屋前面の雨落溝周辺で標高5.3m、背面のK面石垣前で5.4mである。

入口である表門から山側の調査区間との比高差は約1.0m、直線距離にして31mの区間を樹形石垣沿いに緩やかな傾斜を持ち上昇する。

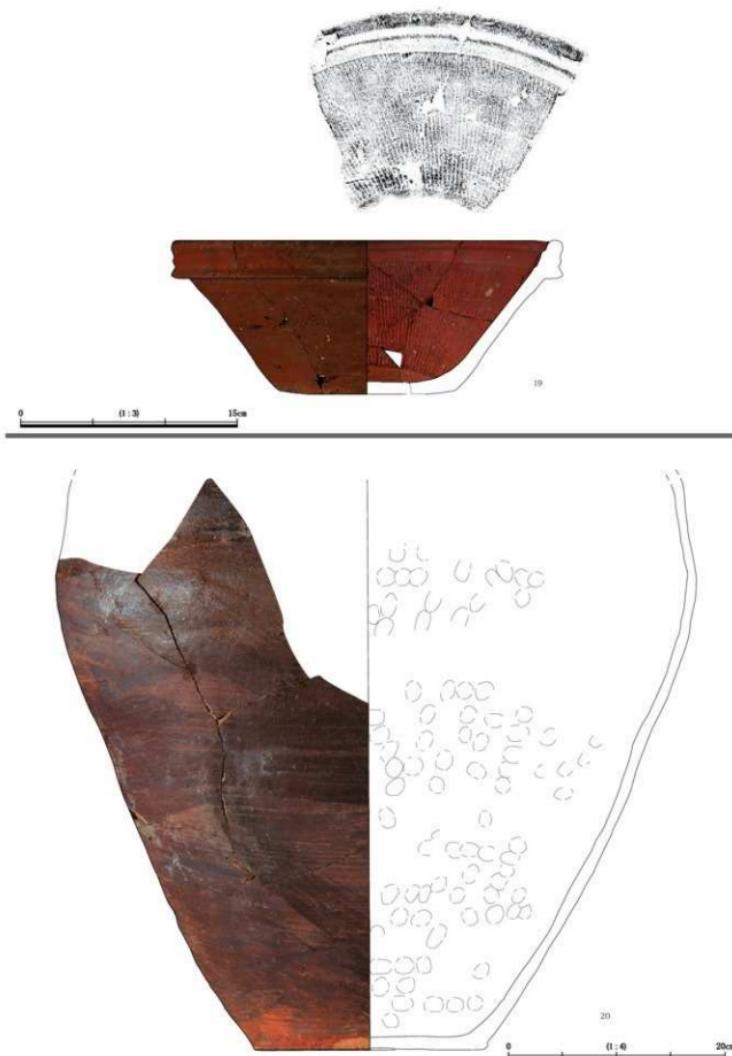
出土遺物は多岐に亘り、露盤面上に散在していた。大半は破片資料であり、図化できたものは第41～49図である。遺物の時期も様々で、近世初期のものも多数みられるが、未図化分も合わせ幕末期に近い資料が多い。近世期においては第2調査区の大半は大手登城路にあたり城の玄関口を担当していたことを考えると、これら露盤面上の遺物は城郭機能時に廃棄されたものではなく、機能停止後に廃棄されたとみられ、その時期としては城解体時が想定される。陶磁器類の1は肥前系の陶胎染付の碗である。2は在地系、3は碗の底部で胎土は黒褐色を呈す。4・5は肥前系、4は輪花皿で見込みは蛇の目釉刺ぎ、5は見込みと高台部に砂目積みの痕跡を残す。6～12は在地系、7は土瓶で底部は上げ底状となり器壁は薄い。10の落し蓋はつまみを欠いており、表面は緑白色に発色する。13は肥前系の平鉢、赤褐色の胎土に線釉を掛けた。14は越前系の深鉢で外底部を除き全体に鉄泥が施され、外面には四線と波状文、底部には小型の脚が付く。15・16は在地系の鉢、15は底面に孔、16は外面に浮文状のものが付く。17～19は擂鉢、17は須佐産であるが底部に工具痕はみられない。18・19は在地系。20は御番人小屋の裏手、K面石垣に添うように置かれており、底部は幕末期面上にあつたため、ここで扱ったが、近世よりこの場所に存在していたかは疑わしく、後年の設置とも考えられる。越前系の甕であり、胴部上半まで残存するが、口縁部を欠く内外面ともに鉄泥を施し、内面全体に指顎圧痕が多数残る。21からは磁器であり、21～23は肥前系の碗、21は円窓に鶴を描く、23の見込みには五弁花の脇に2点の文様がみられる。24は景德鎮の碗とみられ、見込みに兩龍と高台内には「太明年造」の文字あり。26～32も肥前系の小碗、30は外面に草花を描き口縁部は端反となる。31は被熱の影響か釉薬が飛んでいる。33・34は景德鎮産とみられ、33は高台内に「福」の字、34の見込みには「寿」を描く。35～49は肥前系。35～37は蓋碗、39はつまみ付の蓋に色絵を施す。40は青磁であり、外面には白土で文花が描かれていたようであるが、剥落している。41は蓋物、外面に竹籠を描き、蓋については第63図5、樹出土のものが該当する可能性がある。42～49は皿で、42は初期伊万里で器形に若干の歪みがみられる。43・44は外面に唐草、45は外青磁ともみられ、外面釉は青みがある。46は口紅の輪花皿で、内面は東屋山水文、47は岩



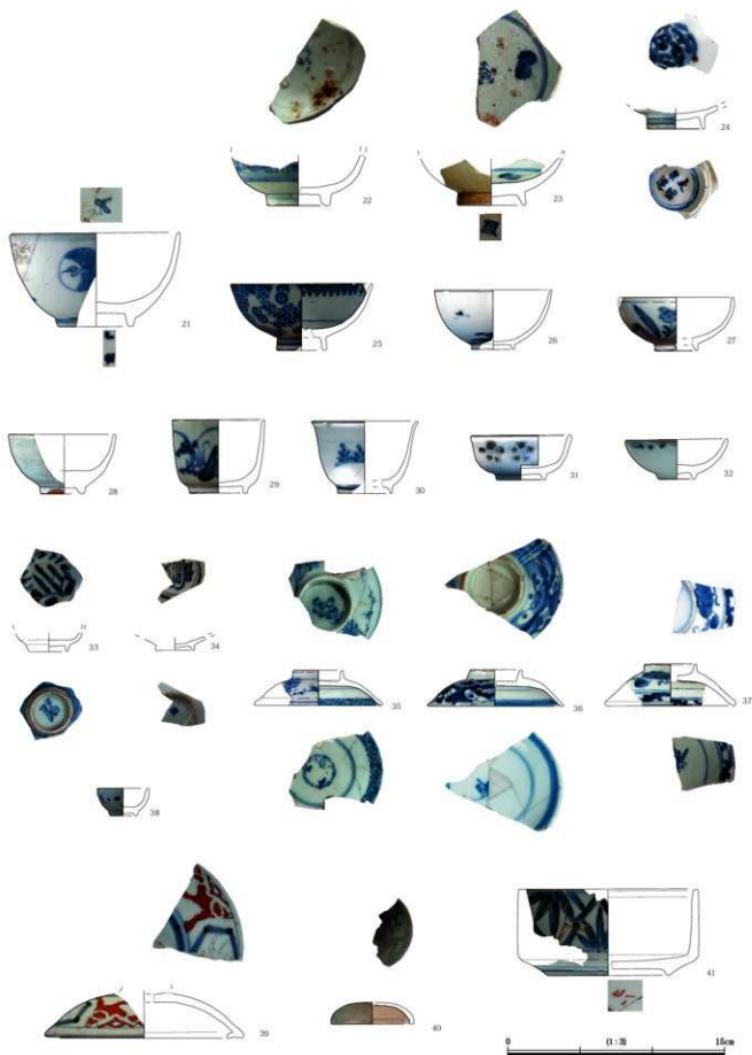
第41図 幕末期路盤面出土遺物実測図①



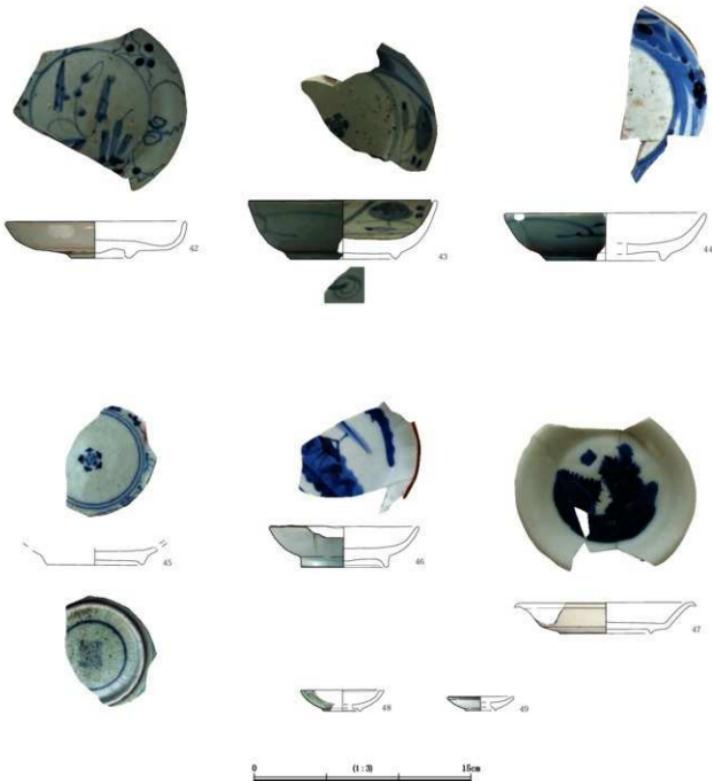
第42図 幕末期路盤面出土遺物実測図(②)



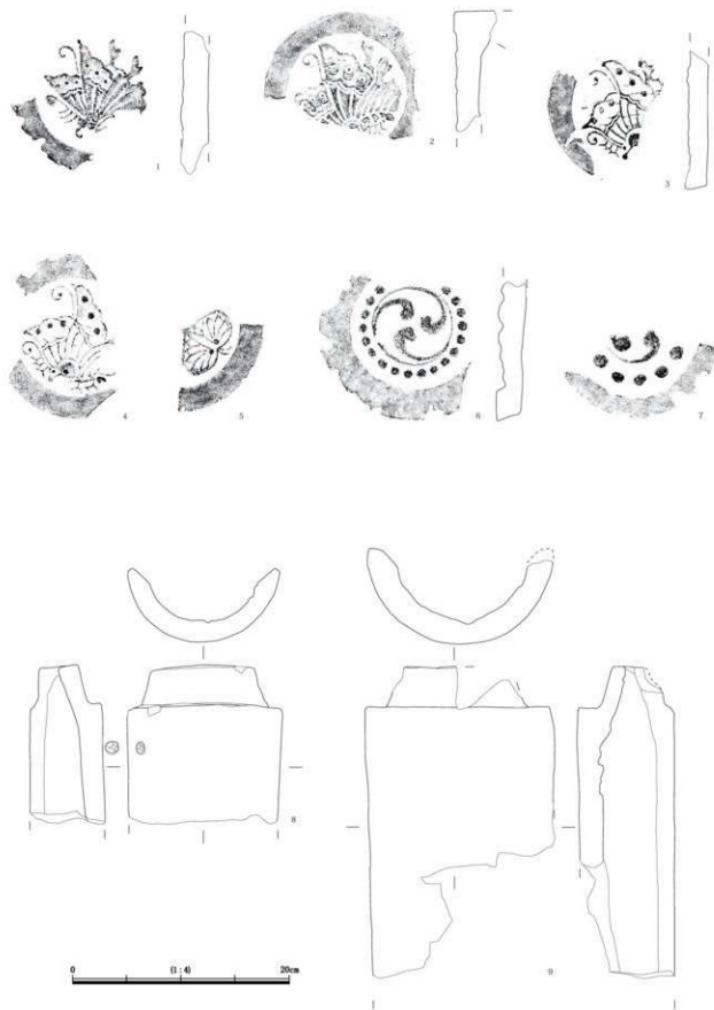
第43図 幕末期船面出土遺物実測図③



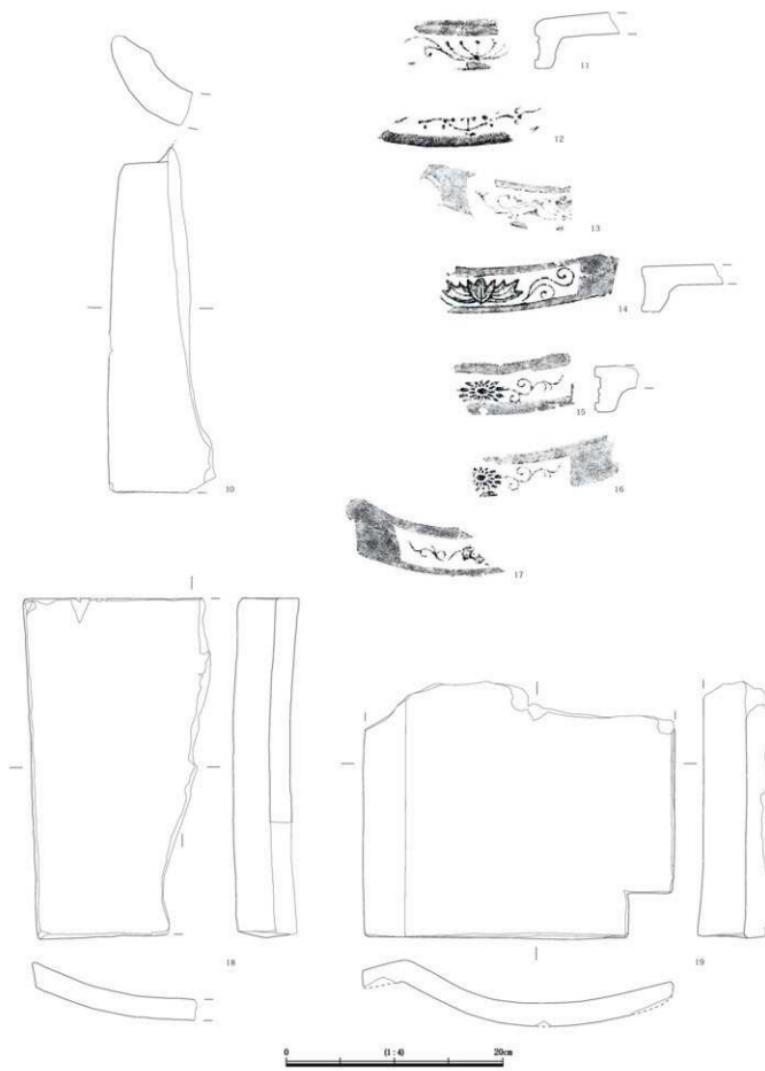
第44図 幕末期船面出土遺物実測図④



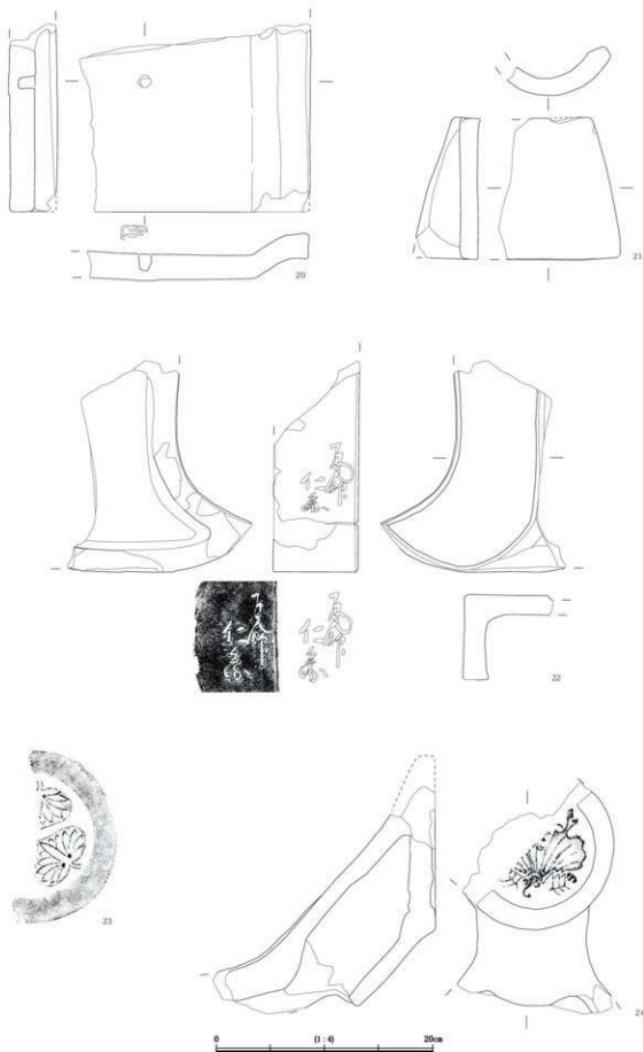
第45図 幕末期路盤面出土遺物実測図⑤



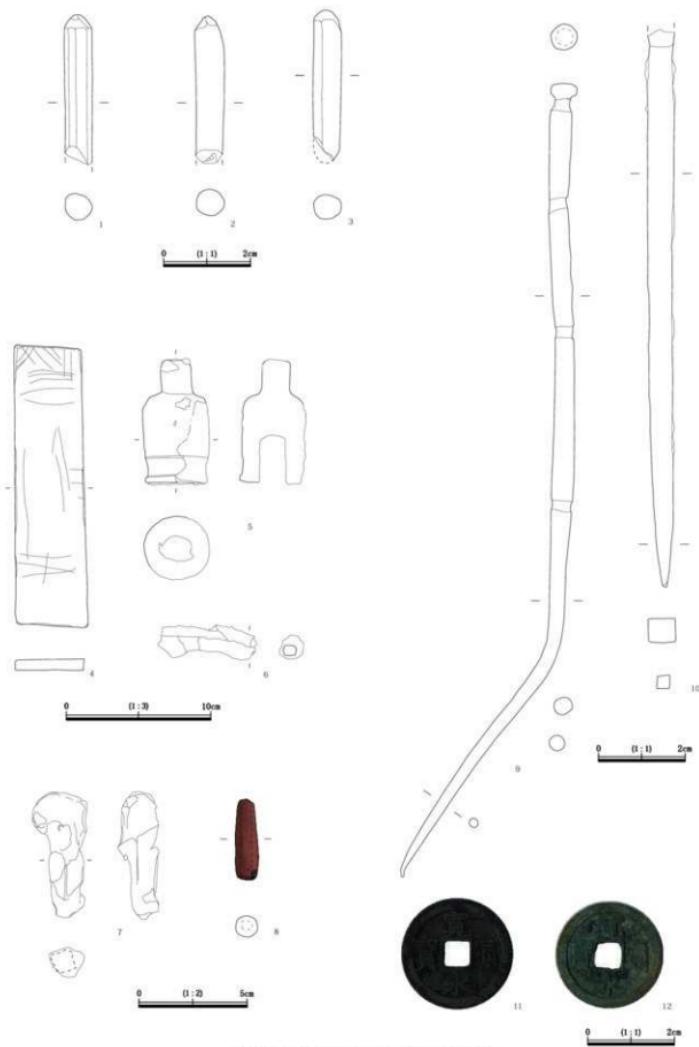
第46図 幕末期路盤面出土遺物実測図⑥



第47図 幕末期盤面出土遺物実測図⑦



第48図 幕末期路盤面出土遺物実測図⑥



第49図 幕末期路盤面出土遺物実測図⑨

に牡丹、48は紅皿で口縁端部は水平となり、外面は露胎する。

瓦は1～7までは軒丸瓦であり1は蝶文D類、2は蝶文F類、3・4は蝶文I1類、5は葵文、6は巴文で巴が時計回りで、珠文は現状で18個確認でき、本来は21か22個あったとみられる。7は巴が反時計回りで、珠文は大きめである。8～10は丸瓦で、8は側面に「〇内にナ字状」の刻印を押す。11・12・14～16は軒平瓦、13・17は右軒棟瓦、11はf類、12はg類、出土例の少ない古相のもので棒の先端に小形の珠が付く。13はk類の右軒棟瓦で14はl類、15・16はo類の多弁の花文。17は第1調査区でも出土をみた桐葉状の下向き葉であり、唐草の形はp～s類に類似するも独自の形である。18は平瓦もしくは棟瓦で、長さは31.3cm、19は右棟瓦で、幅28.7cm、20は左の目板瓦、正面中央に「作」の刻印を押し、中央の穴は貫通していない。21は棟込瓦で長さ13.1cm、平面形は台形であり玉縁は有しない。22は鬼瓦の縁部の一部であり、側面部には「瓦師仁兵衛」の彫り込みがみられる。仁兵衛は近世前期以降、代々繼がれている瓦師の名である。瓦中央には蝶文が貼り付けられていたとみられるが、欠損する。23は鬼瓦中央の瓦当部の葵文である。24は鳥食瓦であり、蝶文D類の瓦当を持つ。

その他の遺物の1～3は棒状石製品である。近年出土数が増加しているが用途は不明である。縱方向への調整により断面多角形状となるが棱は鋭くなく、先尖である。他例でも幅7mm、長さ3.5cm程度が平均的な規格である。瓦留めのための釘とも考えられるが、長さが短いため今後の検討が必要である。4は砥石。5は釣鐘状の鉄製品である。円筒形の胴部に突起を持ち、外面裾部には若干窪みがみられ、内部は中位付近までは中空である。蓋状のものである可能性があるが、用途は不明である。6は鍵、7は釘もしくは鍵であると考えられる。8は土鍤で長さ3.7cm。9は棒状銅製品、最大直径6mmの断面円形で下方が折れるが、本来の全長は18.4cmである。上部には抉りがみられる。10は箸状の銅製品で断面は最大7mmの方形である。11・12は銅錢で寛永通宝。

(2)中ノ御門表門【第50図】

詳細については、第21・26次調査報告書(2013鳥取市教育委員会『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書』)にて報告済であるが、今回の調査では未掘部分であった道路中央付近と門前面付近の掘り下げにより、礎石の全形把握、控柱・雨落溝の検出などいくつかの新事実が明らかとなった。

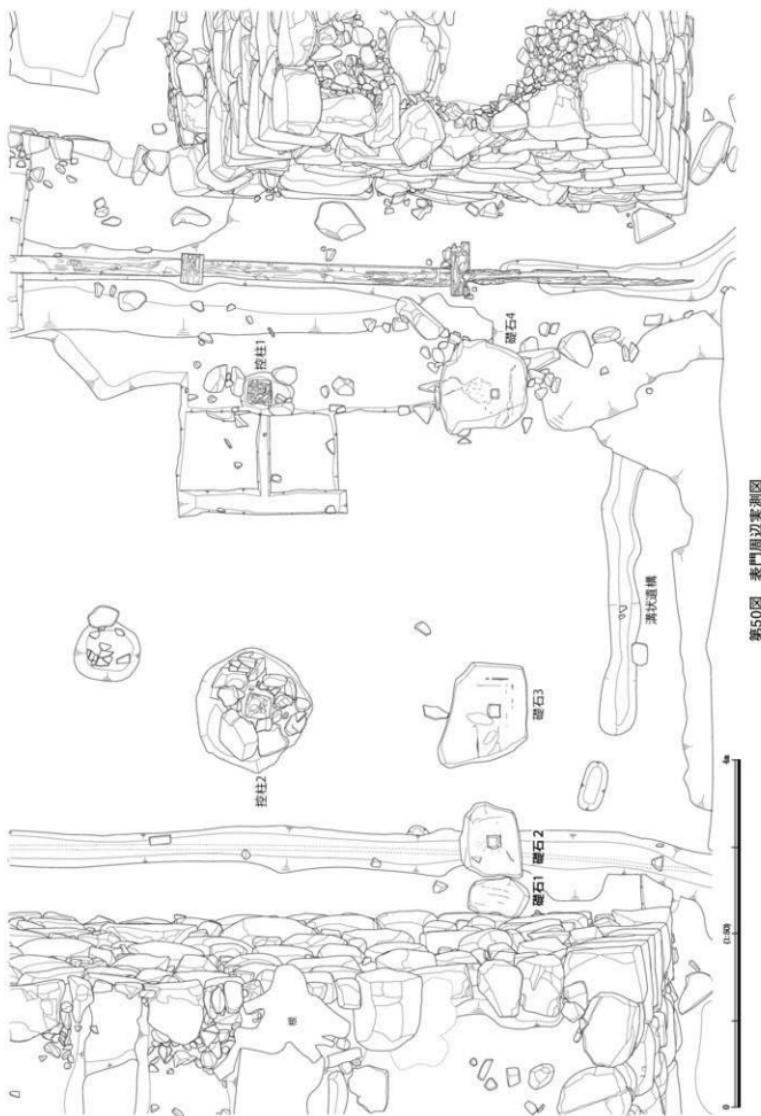
①礎石

調査では第50図のとおり、桁行鏡柱通りで4石の礎石を検出した。2石の鏡柱(礎石3・4)を中心として、正面左側には寄掛柱(礎石1)・袖柱(礎石2)を検出した。本来右方にも2石が存在したとみられるが、近現代溝敷設により失われている。礎石天端には、柱底部に対応する角はぞ穴がみられ、礎石2と礎石3では、はぞ穴を圍むように柱の痕跡らしき変色を、礎石3と礎石4では、柱の裾を巻いた根巻板に打付けた金属板と想定される錆の染みを確認した。詳細は以下の通りである。

礎石1(寄掛柱礎石)の平面規模は奥行き71×幅44cm、上面標高は中央で4.95mである。礎石1は礎石2脇の石垣際の寄掛け柱の礎石で、石垣に接して据えられており、はぞ穴ではなく、表面には盤による加工痕がある。

礎石2(袖柱礎石)の平面規模は72×90cm、上面標高ははぞ穴付近で4.98mである。正面左側袖柱礎石であり、今回の調査により石の厚さが50cmでその下に送電管が埋設されていることが明らかとなった。礎石天端は盤で平滑に整えてあり、中央部には16×15cmのはぞ穴がある。

礎石3(鏡柱礎石)の平面規模は103×120cm、上面標高ははぞ穴付近で4.94mである。第21次調査では一部が調査区外へ続いていたため、今回はじめて全形が明らかとなった。正面左側の鏡柱礎石であり、大型の自然石を使用したものであるが、正面側は直線状に仕上げられ、上面には盤跡などを残さず、平滑に仕上げられている。上面には15cm四方のはぞ穴が加工されているほか、鏡柱と地覆の痕跡らしき幅47cm、長さ34cm以上の薄白い変色がみられ、その外側には、柱外側面形に沿った金属錆の染みが確認できる。柱側面から金属錆までは6.6cm程あり、根巻金具としては厚すぎるため、根巻板に打付けた金属



第50図 表門周辺実測図

板の鋪であると推定される。

礎石4(鏡柱礎石)の平面規模は100×109cm、上面標高は中央付近で4.81mであるが、右方にかけて傾斜しており、左右の比高差は10cm程度ある。正面右側の鏡柱礎石であり、上面には礎石3よりやや小振りな9.5×11cmのはぞ穴と、金属鋪による変色部分がみられる。柱の痕跡は見られないが、金属鋪の状況から柱の配置は礎石3と同様であると考えられる。

②控柱跡

礎石3の後方、約2.6mで大型の円形土坑を確認した。土坑は、幕末期登城路面上層の近代の整地層から掘り込まれており、近代における礎石の抜き取りと想定した。土坑内には多量の瓦片が廃棄され、それらを除去すると方形状の石材が充填されていた。第21次調査ではこの石材までの検出であったが、今回の調査で、石群中に約28cm四方のクリ材の掘立柱が若干傾斜した状態で遺存していた。石材は、その状況から礎石の根固めとして入れられたもので、本来は上部に礎石が乗っていたとみられる。柱はその位置から旧控柱本体とみられ、根腐れ等により柱をカットし根固めをした後、礎石立てと変更されたと考えられる。礎石本体は遺存していないが、柱更新にともない根継ぎではなく、礎石を入れ直す工法は櫓門でもみられる。

さらに、第26次調査ではこの柱と対を成す位置、礎石4の後方約2.6m、幕末期登城路面の下層約30cmでもまた、控柱(クリ材)を確認した。近代水路により周辺を大きく搅乱されているため、根固め石材等は確認出来ないものの、柱上面が同じく低い位置にあることから、上部には礎石が据えられていた可能性は高いとみられる。このようにある時期、掘立柱式から礎石立式への構造変更があったようであるが、櫓門においては柱の修理に際して各礎石がバラバラに追加されていることを勘案すると、左右同時の変更かどうかは定かではなく、或いは片側のみの施工であった可能性も考えられる。

③溝状遺構

礎石はぞ穴中央より前面側へ150cmには門と並行するように幅35cm、長さは現状で350cm、深さ10cm程度の溝状の窪みを確認した。その位置より表門の雨落溝であるとみられるが、E-O、P-F面石垣の角部より50cmも内側へ入り込んでおり軒出を考えるとやや短い印象を受ける。

④中ノ御門櫓門【第51図】

現地盤面から約100cm下層で、概ね幕末期と想定される登城路面と柱痕跡を示す礎石、水路等を確認した。礎石は、櫓門の渡槽礎石であり、8石全てを確認、詳細は第51図の通りであり検出順に礎石1～8とした。

⑤中ノ御門櫓門柱痕跡【第122図】

渡槽の礎石全てを確認した。鏡柱礎石(礎石4・5)、脇柱・寄掛柱礎石(礎石3・6)の4石を前面の桁通りとし、背面の控柱礎石(礎石1・2)、中間の控柱礎石(礎石7・8)の全8石で構成される。礎石1・2・3・4・7・8の上面では柱痕跡を、さらに礎石5では、一ヶ所において柱出隅の痕跡を確認した。

礎石1は門正面からみると右奥の控柱礎石となる。大きな台石上にのっており、外径幅54cm、長さ49cm、上面の幅42cm、長さ41cm、厚さ18cmの台形状を呈し、上面標高は四隅とも5.54mと水平である。裾部では長方形状であるが、上面はほぼ正方形である。不定形な台石に乗っているため、右奥の角部分は石の外側へはみ出している。基本的に上面・側面ともに平面を意識して平滑に仕上げられているが、裾の6～7cmについては、細かい調整が行われておらず、凹凸が残ったままの状態である。登城路側に寄った位置には外形幅9.5cm長さ6.5cm、底形幅8cm、長さ6cm、深さ3cmの逆台形状のはぞ穴が残る。上面の端部より穴の中央まで15cm、長さ方向では中間地点に位置しており、穴を開むように幅27cm、長さ26cmの柱の設置痕とみられる跡が残る。この痕跡ははぞ穴を中心としておらず、穴の中央からの距離は奥行き方向では中間にあたるのに対し、幅方向では10cmと3分の1の位置にあるのが特徴的である。はぞ穴の中心から石垣までの距離は70cmである。



第51図 中ノ御門櫓門周辺遺構検出状況

また、礎石の下部には幅77cm、長さ68cm、高さ40cmを測る三角形状の花崗岩製の台石がある。上面は幅69cm、長さ61cmの平面を持ち、設置部分を中心に若干の調整痕とみられる凹凸が残るが、標高5.35m前後ではほぼ水平である。登城路面側の辺は直線上であり石垣と並行する。全体に赤みを帯びており、溝側の一部は黒変している。ほぞ穴や、柱の痕跡などは確認できなかった。上面の標高は礎石3・4とはほぼ同じことからも、上部に礎石1が乗せられるまでの旧礎石として捉えた。

礎石2は、礎石1の対面、門の正面からみると左奥の柱柱にある。台石上に乗っており、幅45.5cm、長さ46cm、厚さ16cm、上面幅40cm、長さ39cmを測る台形状の礎石である。右奥の角は幅7cm程欠くものの上面、下面ともほぼ正方形に近い。上面は標高5.68mの水平であり、ほぼ中央の位置には幅・長さが8cm、深さ3cmの断面長方形のほぞ穴が作られている。また、ほぞ穴を開むように幅28cm、長さ26cmの柱痕跡が残る。この痕跡はほぞ穴を中心として、幅・長さとも均等の位置にある。横方向に若干長いが、上面の中央部にあることがわかる。平面、側面ともに表面を平滑に仕上げているが柱痕部分は表面が荒れた状態となっており、裾部の一部にも調整の甘い部分が残る。樹形石垣側の辺は、台石寄り2~3cm程度外側にはみ出している。礎石自体を取り外していないが、側面からの観察によると、裏面は平滑な仕上げは行はず礎石1と同様であるとみられる。なお、ほぞ穴の有無は不明である。ほぞ穴の中心から石垣までの距離は50cmである。

礎石2の下部には花崗岩質の台石があり、幅53cm、長さ77cm、厚さは路盤面上に5cm程検出したが、全体は不明である。上面の幅49cm、長さ65cmで標高は5.52mの水平である。登城路側へ向かい石垣と並行する形で、幅方向の両辺はいずれも端部が剥離したような状態であり、特に奥側の辺については顕著である。登城路面側の辺は直線上であり石垣と並行する。石の状態や標高など礎石1と類似しており、表面が平らなことからも、旧礎石であると推定される。

礎石3は、正面右側の柱柱・寄掛柱礎石にあたる花崗岩質の石材である。端部を石垣と接する不定形状の石で、幅103cm、長さ75cm、高さは現状40cm、上面は93cm、長さ57cmを測る。上面の標高は中央付近から登城路側が5.38m、石垣側が5.33mと若干の傾斜がある。表面は細かな調整により、鑿状の工具痕が全面にみられる。全体に赤みを帯びており、上面には黒変部分、辺縁部を中心に石材の剥離がみられる。SD-02側の側面は垂直方向に面を持ち、本来は溝側壁が隣接していた可能性がある。礎石1・2・8にみられる柱痕のよう明確な石面への圧痕はみられないが、柱痕とみられる長方形の幅42cm、長さ27cmの変色部分は確認した。変色部分は、上面部分の中央から登城路側に寄った、標高5.38mの水平部分にうっすらと残り、中央部分と石垣との距離は65cmである。

礎石4は正面右側の鏡柱礎石にあたる花崗岩質の石材である。幅88cm、長さ83cm、上面は標高5.35~5.38mで幅82cm、長さ74cmを測る五角形状の礎石であり、登城路面上に5cmほど露出する。石材の中央から前面および登城路寄りの位置には外径7cm、底径6cm四方、深さ3.2~3.5cmのほぞ穴が残る。石材の前面の側面には表面調整のためと思われる斜め方向の細かい鑿状の調整痕が残る。背面側の三角形状の突出部30cmほどには被熱による赤変が著しく、上面全体にわたり石材の表面剥離がみられる。ほぞ穴の周囲には柱の設置痕とみられる白い変色部分が残るが、表面の剥離が激しく、明確な範囲を測ることは不可能であったが、幅45cm、長さ25cm以上はあるとみられる。ほぞ穴中央から石垣までの距離は224cmである。

礎石5は正面左側の鏡柱礎石にあたる安山岩質の石材である。幅107cm、長さ73cm、上面は標高5.44~5.47mで、幅96cm、長さ68cmの不定形状の礎石であり、登城路面上に5cm程露出している。礎石4と同様、前面および登城路寄りの位置に外径6.5cm、底径5.5cm四方、深さ2.5cmのほぞ穴を持つ。上面辺からの距離は登城路側から40cm、前面から21cmである。前面と登城路側の側面は直線を意識した細かな調整が施されている。明確な赤変はみられないが、表面の剥落が著しく、柱の規模を知ることは出来なかったが、柱出隅の痕跡を僅かに確認した。他の7つの礎石が花崗岩質であるのに対し当石のみが安山岩質である。

ある。はぞ穴の中央から楔形石垣までの距離は227cm程度であり、石端部は7～8cm程度は石垣内へ入り込む形であったと思われる。礎石4とのはぞ穴中心距離は387cm程となる。

礎石6は正面左端の脇柱・寄掛柱礎石にあたる花崗岩質の礎石である。幅97cm、長さ59cm、上面は標高5.49～5.53mで、幅78cm、長さ51cmの不定形状の礎石であり、登城路面より5cm程露出している。前面に整状の細かな調整痕を持つ。石材の外観は同じく脇柱である礎石3と類似しており、背面の辺縁部を中心表面部分の剥落がみられる。門の前面にあたる礎石3～5と同様に、前面部分にあたる辺については直線状に加工されている。全体に赤みを帯びているが、明確な赤変はみられず、柱の痕跡等も確認できなかった。礎石5との距離は70cmほど空いており、この間に潜戸が存在していたとみられる。

礎石7は礎石6の後方、礎石2との中间部分にある控柱礎石である。幅59cm、長さ52cm、上面は標高5.53～5.56mで、幅41cm、長さ52cmの略方形形状の花崗岩質の礎石であり、登城路面より5cm程露出している。石垣側に近い位置には外径6.5cm、底面5cm四方、深さ2cmのはぞ穴が残る。厚さ10cmほどもない板状の石材であり、石垣側から背面側に向い、石材の辺縁部を欠いた状態である。明確な痕跡ではないが、石の中央付近には柱痕らしき平滑な部分が25cm四方の範囲に確認できる。比較的薄型の石材であるが、礎石1・2のような台石を持ってはいないことから、後から設置されたものも可能性もある。礎石2とのはぞ穴中心距離は156cmであり、はぞ穴の中心から石垣までの距離は55cmである。

礎石8は、礎石3の後方、礎石1との中间部分にある控柱礎石である。上面の標高は5.33mであり、外形は46cm、上面は38cm四方、厚さ23cmの花崗岩質の台形状礎石である。中央には外径が幅8.5cm、長さ9cm、底部径は幅7.5cm、長さ8cm、深さ3cmのはぞ穴が残る。他の礎石とは異なり、石材のはぞ穴の周囲には幅24cm、長さ23cmの柱の痕跡を確認した。礎石7同様、下部に大型の台石はないものの、数石表面が平らな石材がある。礎石下面と接してはいるものの、それ自体で下支え出来る程の規模ではなく、礎石設置時に沈下防止などの目的で置かれたものと推定される。はぞ穴の中心から石垣までの距離は70cmである。

(4) 楔形石垣奥壁前瓦廃棄層

遺構ではないが、瓦が集中的に廃棄されていた地点である。奥壁(V面石垣)前面2～3m程度の範囲内には、多量の瓦片が、石垣に寄せる形で山なりに堆積しており、奥壁上より投げ落としたような状況を呈している。第21・26次調査でも同様の状況が確認されているため、壁前に広く堆積していたと考えられる。

出土遺物の大半は瓦の細片であり、出土量の多さに比べ陶器化できたものは第52・53回だけと非常に少ない。陶器の1は肥前系の陶胎染付碗、2は須佐産の鉢である。瓦の1～3は軒丸瓦で1は蝶文F類、2はI1類、3はD類である。4はh類の軒平瓦で縁部には「〇」に十」の刻印が残る。5・6は丸瓦で5は長さ27.8cm、6は上面に四菱の刻印がされる。7～10は棟込瓦、長形の7・8と比べ9・10は平

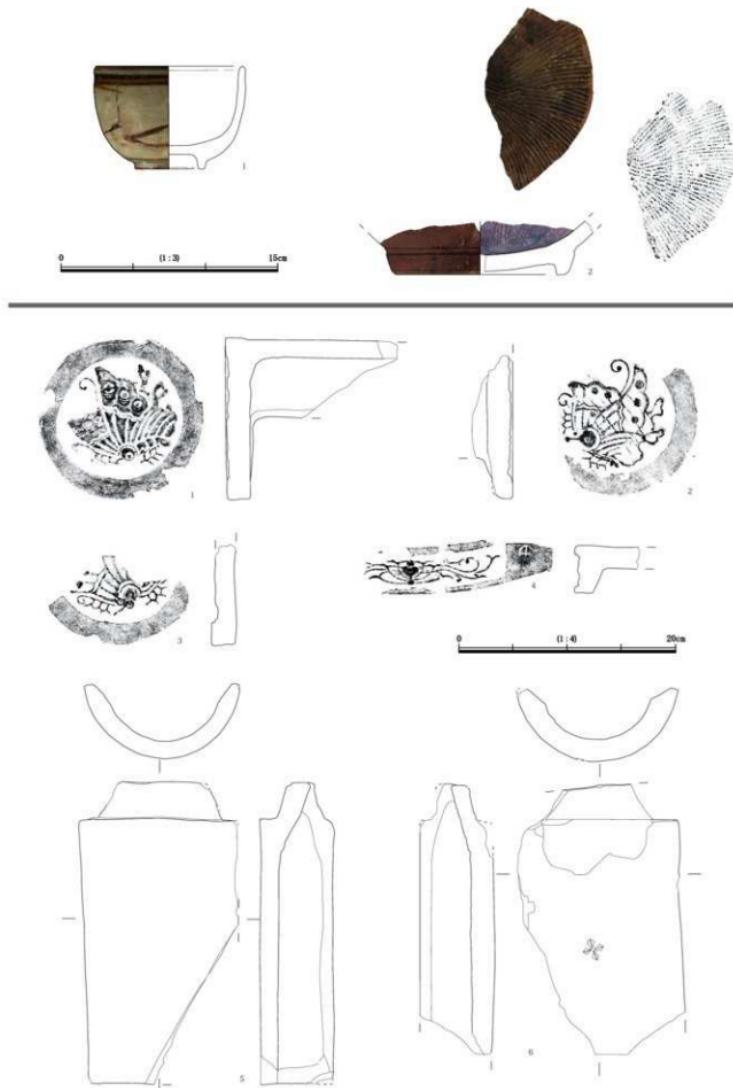
面台形状で長さは短い。幅や高さにはそれほど違いはなく、玉縁も有さない。その他の遺物としては断面長方形の鉄釘が1点出土した。

(5)溝1(大溝)【第54回】

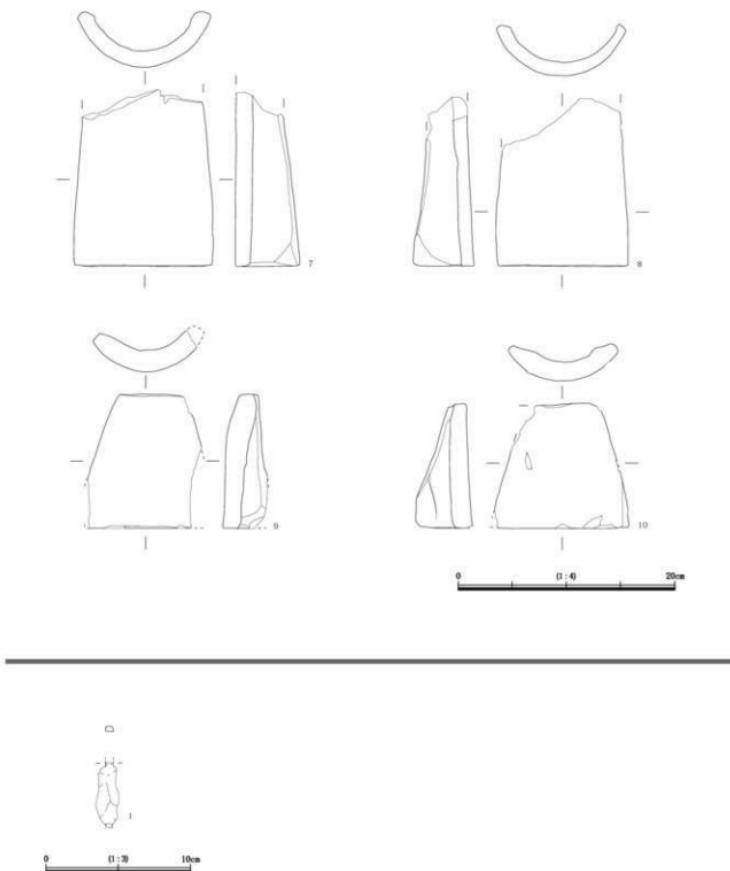
調査区の東隅で検出した北東～南西に走る、内幅120cmの石組みの大型溝である。平均して3段積みの壁石の天端高5.7mからの深さは50～60cmである。大型の水路とみられ、南西(堀)側へ向かい傾斜する。標高5.8mの幕末期路盤面に対し石の天端は僅かに低くなり、天端面も比較的の平らであることから、本来は木



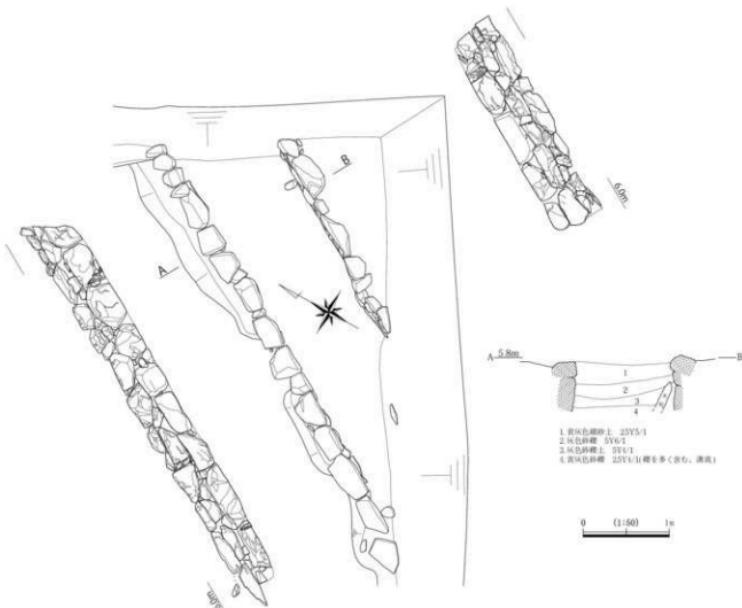
写真6 奥壁前瓦廃棄状況



第52図 桁形石垣奥壁前出土遺物実測図①



第53図 樹形石壇奥壁前出土遺物実測図②



第54図 溝1実測図

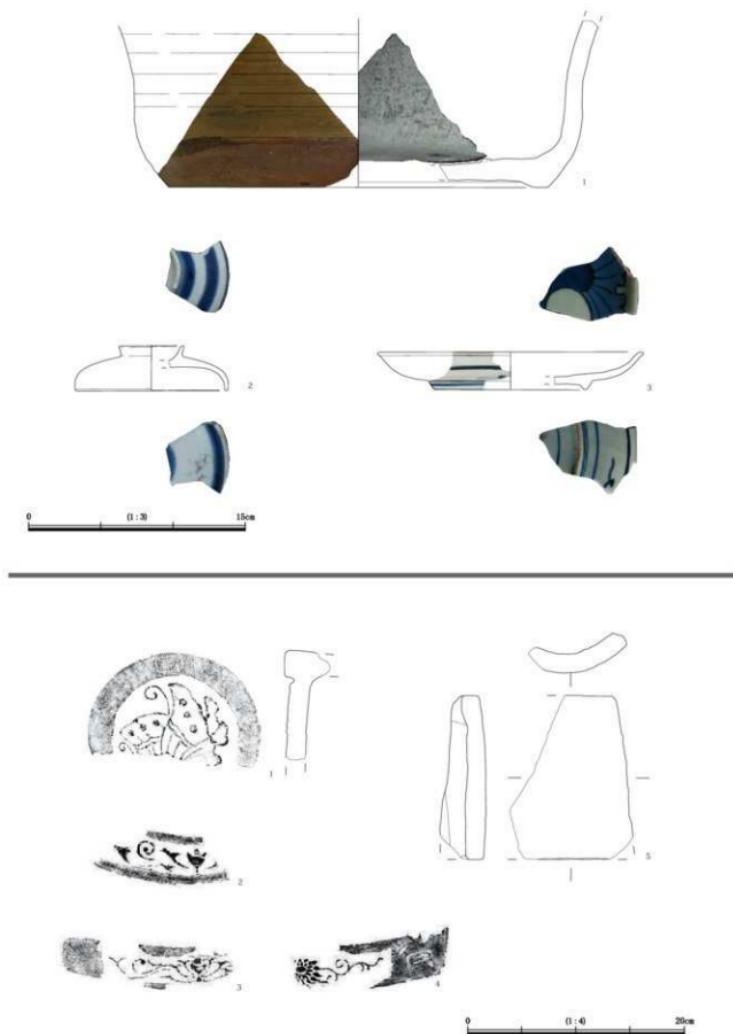
蓋などが覆っていた可能性が想定される。平成27年度の調査では、この溝の続きを調査した結果、馬場入口を通り、三ノ丸へと直接つながる、主要排水路であり大手登城路との区画であることが判明した。また、下流側では、門内を走る溝2と接続することが分った。しかしながら、水路が表記された絵図等にも一切記載されていないことから暗渠であった可能性は高いと考えられる。溝埋土はほば砂の自然堆積であり、機能停止時期は近代遺物を全く含まないことから、城廃絶に近い頃と推定される。

出土遺物は第55図の通りであり、上層部分で棒状の木片、瓦片や陶磁器片が僅かにみられた他は目立つものは少なかった。陶磁器の1は在地系の鉢で灰釉が掛かる。2の蓋は横縞があり、3の皿外面には唐草がみられる。瓦の1は軒丸瓦、蝶文I 2類で縁には「作」の字を刻印する。2～4は軒平瓦、2はk類、3はh類、4はo類で縁には「作」の字が刻印がある。5は棟込瓦で全長は15.1cmであり玉縁は有しない。

溝2～6および樹は一連の遺構である。樹と溝6との間は近代搅乱により欠損するが本来は繋がっていたとみられ、櫓門内を通り左折N面石垣前の樹を経て、表門内を通り抜けて堀へ注いでいた。ここでは水路を各辺に分けて報告する。

(6)溝2(登城路境界溝)【第57～59図】

溝2は中ノ御門櫓門背面から南北方向へ調査区外まで続く内幅30～40cmの石組溝である。櫓門裏の合流部から134°の角度で伸び長さは現状で27mであるが、先述の通り平成27年度の調査において、35mの地点において大型の溝1と合流することが明らかとなった。1～3段積みの壁石の形状は様々で天端



第55図 満1出土遺物実測図



第56図 溝流路(槽門前~堰)実測図

高は上流で5.2m、中間で5.4m、下流の合流部付近で5.2mと一定せず、路盤面に対しても上下する。深さは25cm程度で、底面高は上流で5.0m、下流の合流部で4.94mとほとんど傾斜していない。底面に石敷きはみられず、深度を減じながら下流へ続い、櫓門裏では門を横断する溝3と合流して門内を縦断する。

溝1の大溝が自然堆積により機能を失うのに対し、当溝は瓦等の廃棄による廃絶とみられる。

遺物(第58・59図)は、全て溝内より出土した。溝内には瓦片が多数詰め込まれていたが固化できたものは僅かであった。、当溝磁器の1は型紙摺、2～4は肥前系、2の筒形碗は外面に菊文、3の蓋には格子文、4の瓶は徳利であり胴部が張る。瓦の1は丸瓦で長さ28.4cm、2は平瓦で長さ30.5cm、3は左目板瓦。4・5は棟込瓦で端部を欠く。6は鳥糞瓦で瓦当は蝶文II類、7は鬼瓦で瓦当は蝶文I 2類。

(7)溝3(櫓門背面溝)

門の裏手にあたり、櫓と並行して走る溝をみるとやや鋭角(86°)に合流していることがわかる。U面石垣沿いから直接流入するのではなく、V面石垣側へ若干折れて入っている。溝位置だけをみると、櫓の雨落溝を兼ねた開渠にみえるが、溝石天端が平らであり、門内露盤面より20cmも低い位置にあることから、水路蓋が存在していた可能性は否定できない。また、U面石垣前であるが、平成27年度調査により、石垣前に近世初頭の水路の敷設が確認され、掘り方内に多量の溝石とみられる石材が投棄されていることが明らかとなったことから、本来はU面沿いに溝が続いていた可能性がある。

(8)溝4(門内溝)

溝2と溝3との合流後の溝幅は30cmと若干狭くなるが、深さは20cmと変化しないまま礎石1・8の脇を通り、礎石3・4の間を抜け櫓門前面へ至る。この状況から、礎石3・4の側面は直接構築として利用されていたとみられる。溝上面は目立って平坦ではないため、蓋が存在していたかは不明である。合流部のやや下手の溝底に平らな石がみられるが、連続はしておらず機能は不明である。一方礎石3・4の前面付近の溝底にある幅25cm程度の並列した石については、敷石とみられる。底面高は合流後もほぼ水平であるが、礎石8付近の底面には緑色凝灰岩の切石が置かれた付近で変化をみせ、2.5°ほどではあるが勾配が付く。2方向からの流入を考えると、降雨時などはある程度の水量が想定される。

出土遺物は第27次発掘調査報告書にて報告済みであるが、溝内に瓦が堆積する状況であった。

(9)溝5【第60～62図】

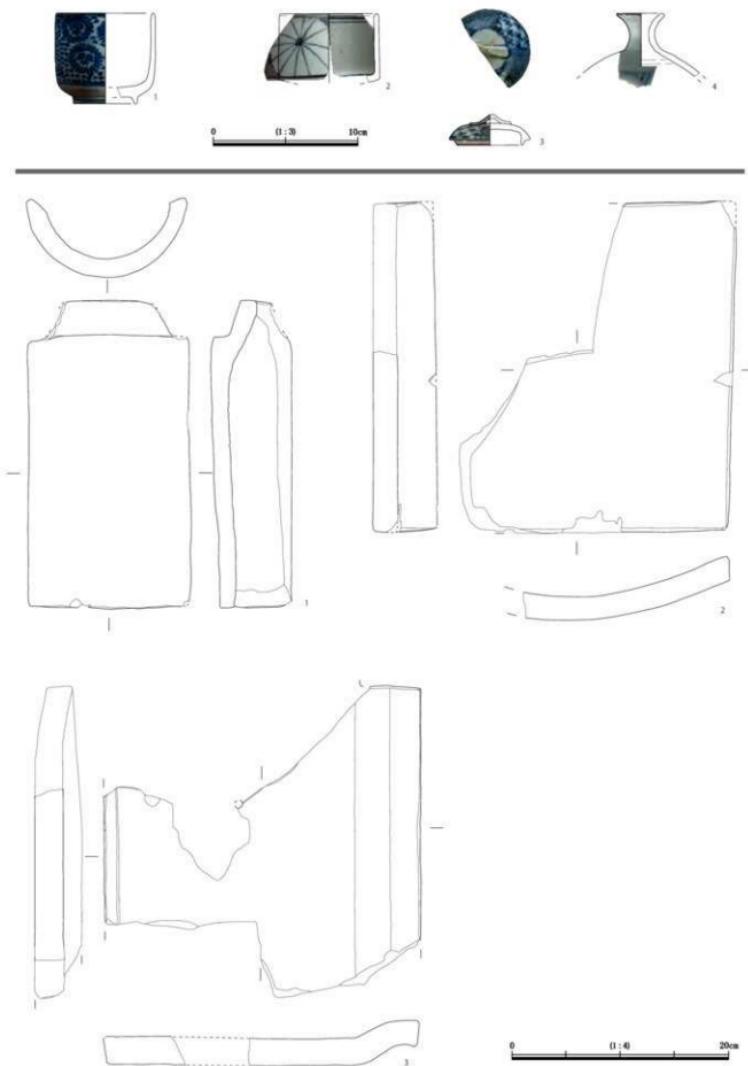
N面沿いの溝を溝5とする。礎石3・4間を通り、櫓門前面へ流れ出た溝は左折しN面石垣沿いを流れ、櫓へと続く。M-N面石垣角部付近は鉄塔敷設のための大規模な搅乱にて遺構が遺存しておらず、折れた先に底石を僅かに残すのみである。底石は溝4と同様に25cmほどの石を並列させており、両底石の比高差は10cm、角度に換算すると5°ほどとなる。溝は門前にて急勾配となることから、溝底の洗掘防止のために敷かれた石と考えられ、搅乱部分を含め本来は石敷きであった可能性もある。溝4と溝5の接続関係は“L字形に折れる”、もしくは“太鼓御門同様ハの字状に斜升し折れる”的2つが想定される。

左折した溝は、底石を境に深度が深くなる。20cmであった溝は底石を境に階段状に30cm程深くなり、壁石も2～3段積みとなる。N面石垣を対壁とし桟まで続き、入口付近で幅40cmであったものが次第に広がり付近では60cmとなる。段差下の底面高はほぼ水平であるが、桟手前120cm程からは傾斜を付け桟内へ続く。

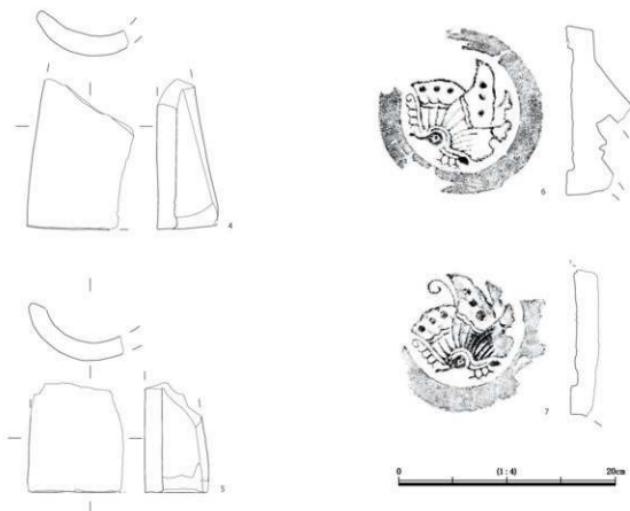
溝内には多量の出土遺物(第60～62図)をみた。桟までの4m程の区間であるが折り重なるように堆積した状況は、溝1の自然堆積埋土とは異なり、門内及び桟形石垣奥壁前と同様、建物解体時に投棄され、その結果溝機能も失われた様相を呈している。陶磁器の1は肥前系の碗底部であり、内外面ともに刷毛目がみられる。2～6は在地系、2・3はともに六角皿、4は落し蓋でつまみを欠損、5は片口鉢。6は口縁部より褐色の皮鯨釉がみられる。7・8は肥前系、7は若松、8の蓋の外面上には蜘蛛を描く。



第57図 溝2土層図



第58図 満2出土遺物実測図①



第59図 溝2出土遺物実測図(2)

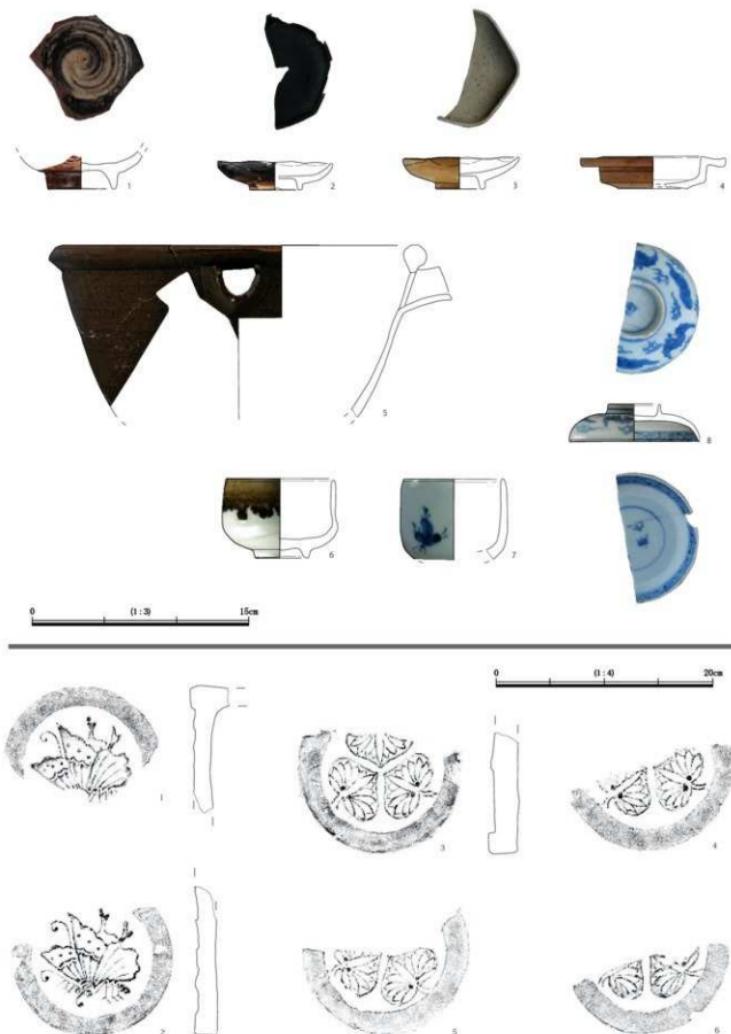
瓦は1～7は軒丸瓦で1・2は蟻文D類、3～6は蟻文であり、蟻文の出土が目立つ。7は瓦当面を欠くが、全長は29.6cmである。8・9は丸瓦で9の全長は29.2cm。10・11は軒平瓦、10はi類、11はt類で縁部に「天文」の刻印を持つ。文化もしくは文政年間の卯の年に生産されたとみられる。12～14は平瓦、明確な平瓦の出土例は極めて少なく、12の幅は26.1cm、13は27.1cm、14は30.5×25.8cmと全形がわかる。横断面系をみるといずれも弧が緩やかで浅い。15は小口の中央付近に「○にナ」の刻印を持つ。16は鬼瓦中央の瓦当部で、蟻文I 2類である。

その他の遺物は不明銅製品と銅鏡がある。前者は厚さが2.5cm以上もある銅塊で、表面は平滑に仕上げられ、一見すると瓦のような形態をしているが用途は不明である。

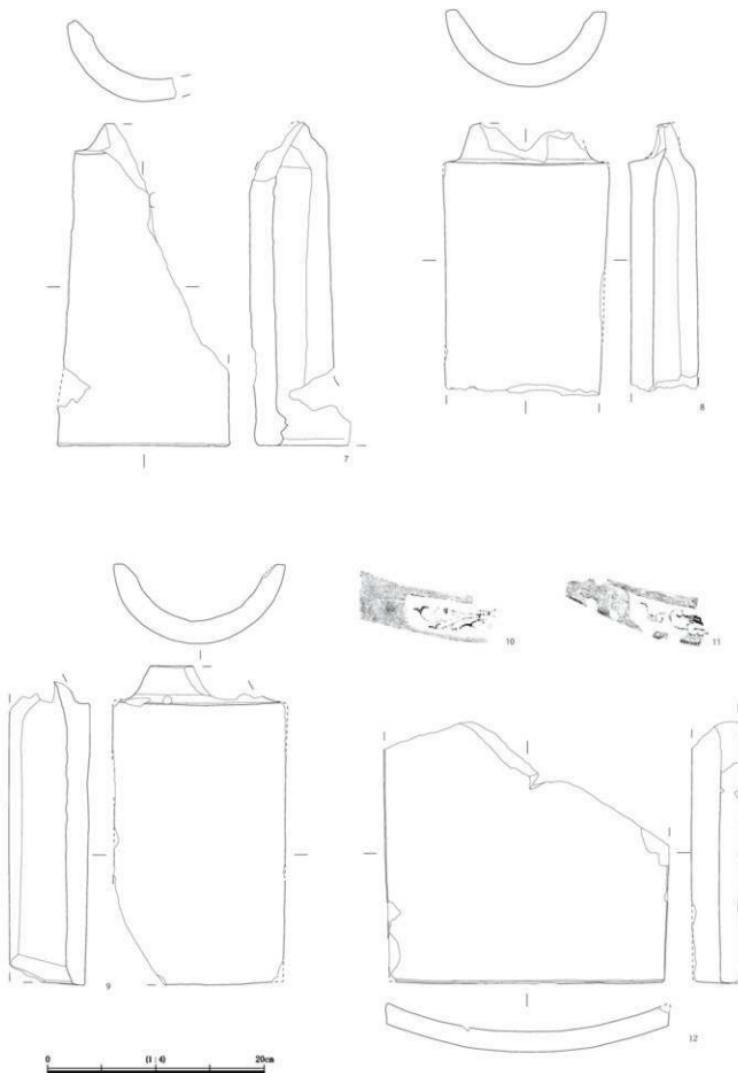
(10) 樹【第63～67図】

溝5から接続するN面とO面との入隅部前には内寸190cm四方の沈砂槽とみられる石組枠が築かれている。北岸は溝5壁石からの続きであるが南岸については石垣に張り付かせるように築いている。南岸は天端高4.8mであり、使用石材の大きさは一定ではなく、積み方も非常に雑である。溝に面した南岸根石には直径70cm、対岸の溝一樹接合部角には50cm程の角材と、要所部分には大型の石材を用いている。北西辺を中心に搅乱され大部分の石材が失われている。枠底は溝接合部付近を中心に洗掘されるよう一段深くなっており、南岸天端との比高差は深い所で70cm、他は50cmほどである。本来、流入部の対角付近(O-P面石垣角部)に流出口があったとみられるが、前述のとおり近代溝の大規模な搅乱を受けており残存していない。樹についての文献記録はないが、堀内へ流入する山側からの多量の土砂が度々問題となっている記録が残るため、当樹も沈砂樹と考えられる。

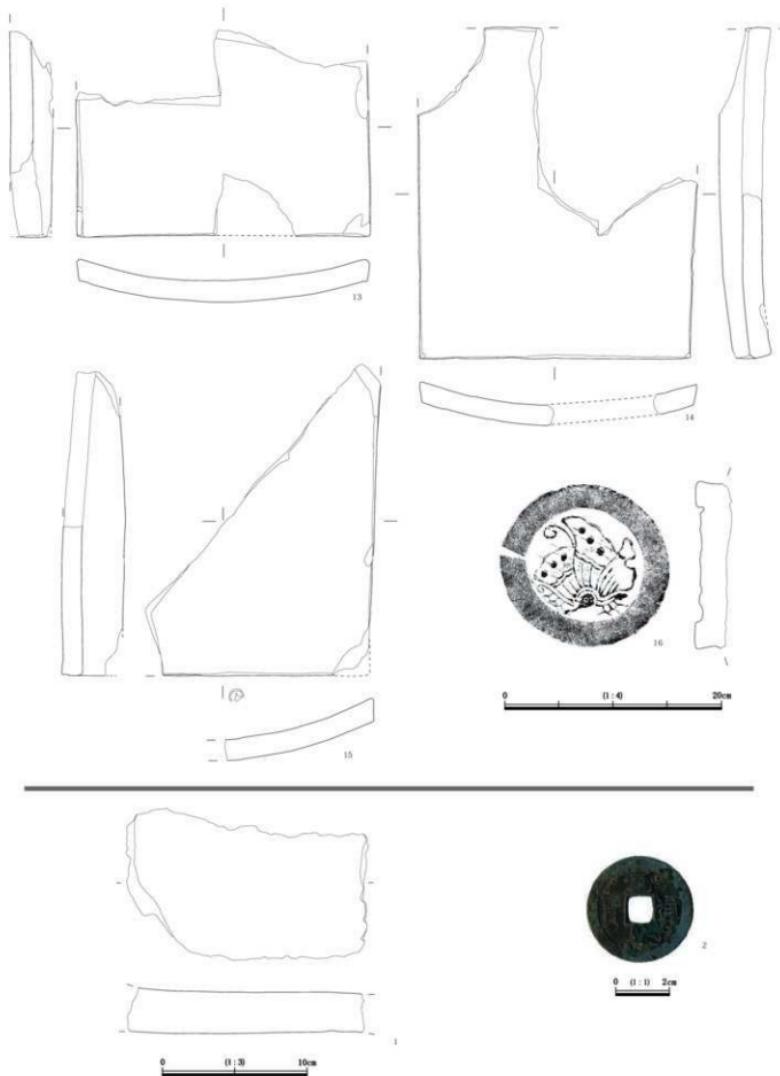
樹内からは多量の瓦を中心とした遺物(第63～67図)を検出した。検出状況は溝5と同様で、比較的大きな瓦片により埋め立てられており、その投棄により樹機能を失ったとみられる。比較的大きな破片が



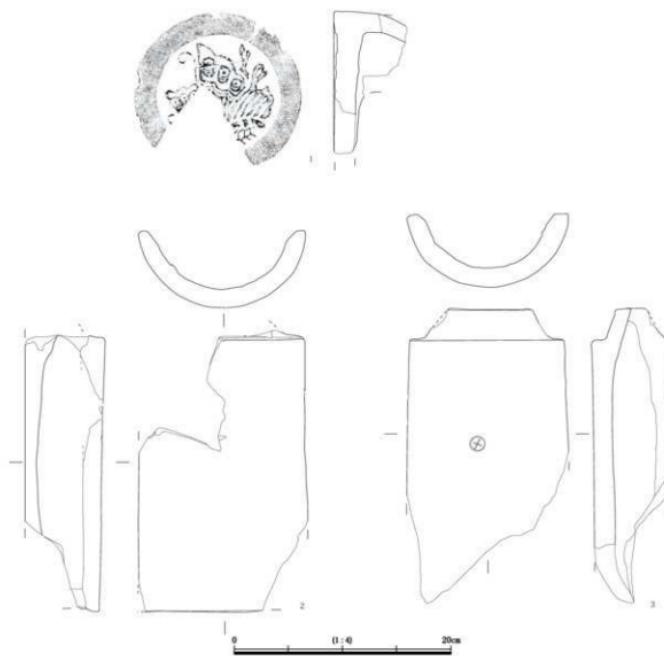
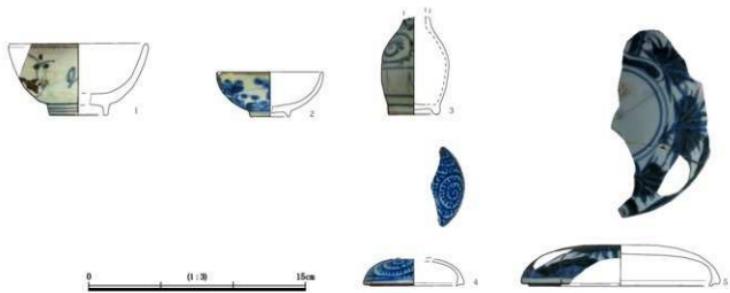
第60図 满5出土遺物実測図①



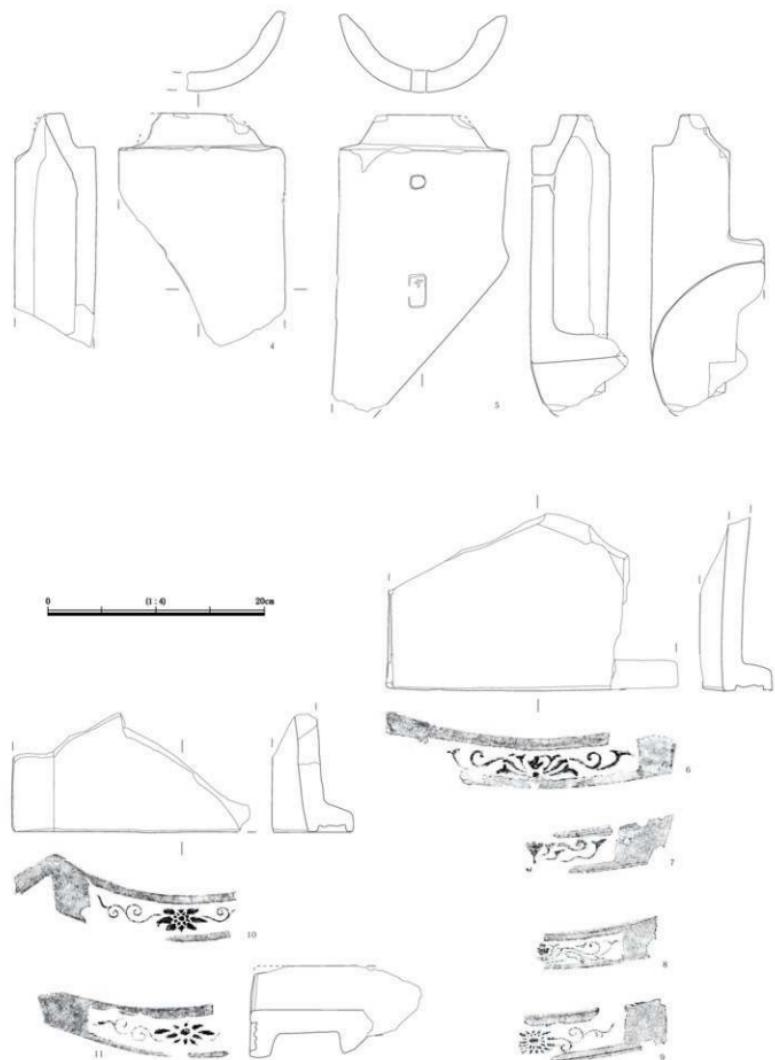
第61図 満5出土遺物実測図②



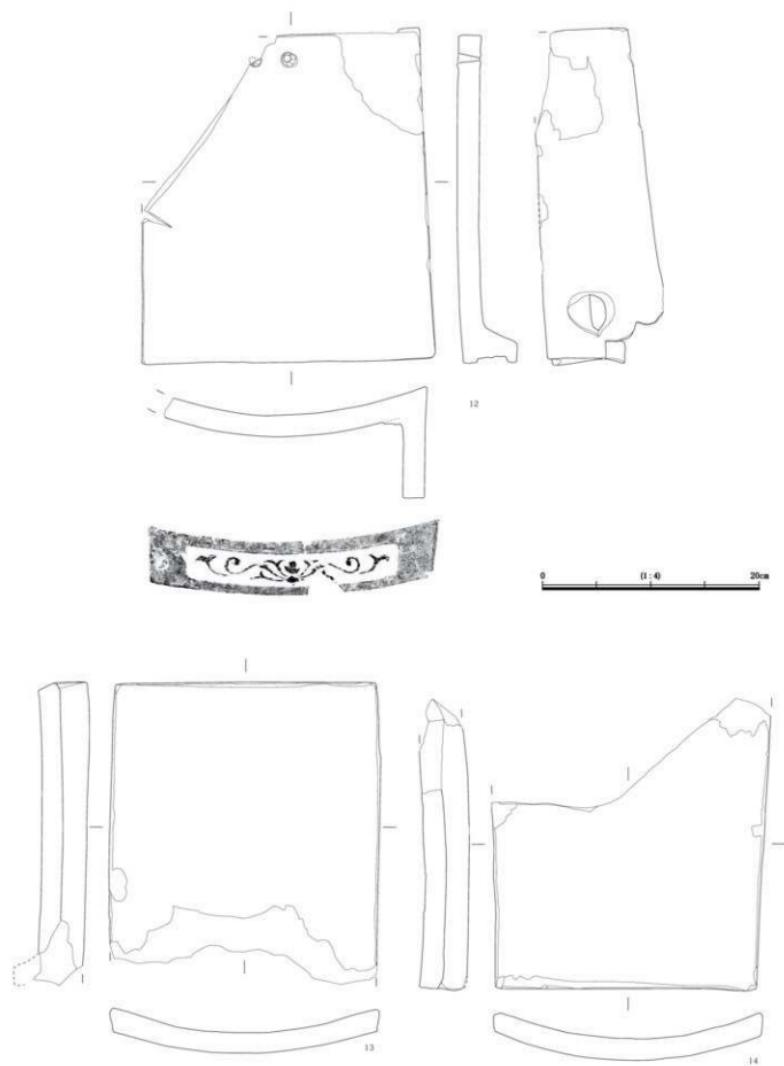
第62図 満5出土遺物実測図③



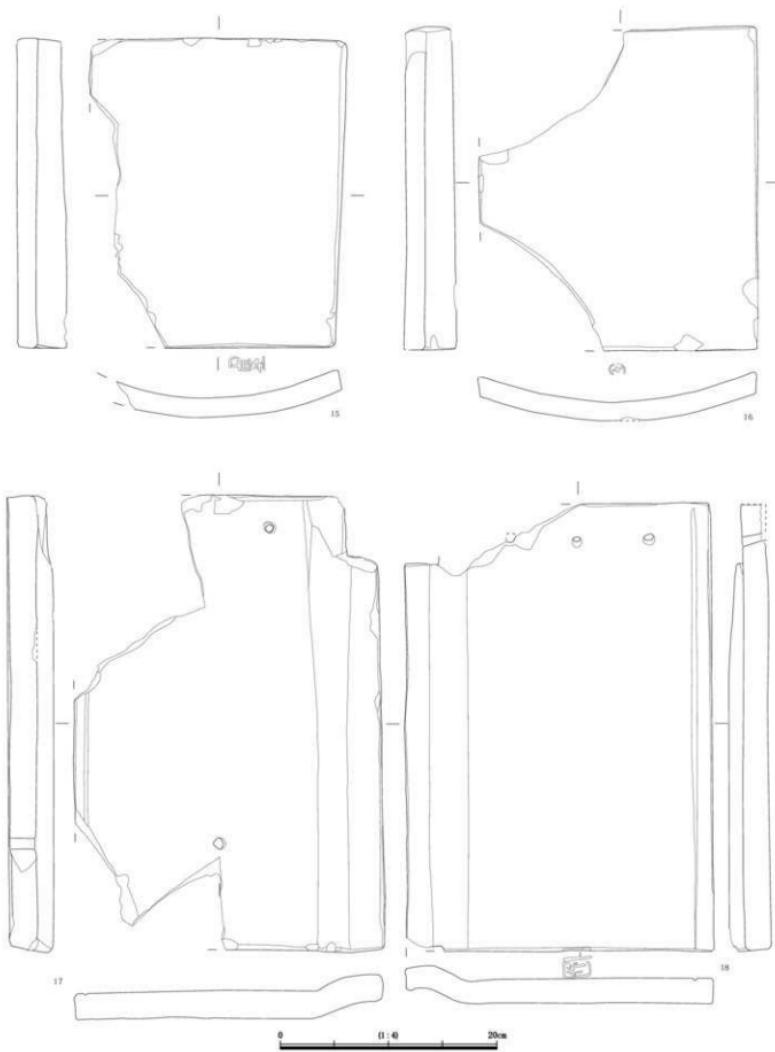
第63図 桧出土遺物実測図①



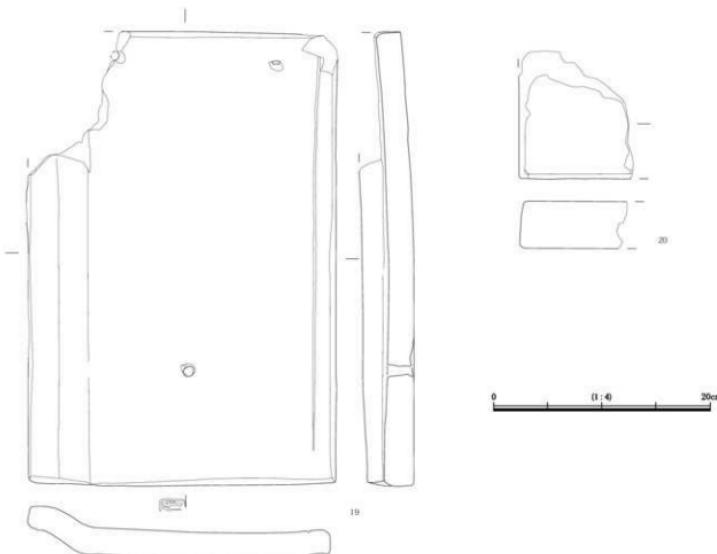
第64図 樹出土遺物実測図②



第65図 桧出土遺物実測図③



第66図 桧出土遺物実測図④



第67図 桧出土遺物実測図⑤

多くみられた。1～5の磁器は全て肥前系、1・2は草花文の碗、3の瓶・4の蓋には鶴唐草が見られる。5の蓋は幕末期路盤面上出土遺物である第44図41の体蓋となる可能性がある。瓦は1が螺文F類の軒丸瓦、2～4は丸瓦で3は上面に「○に十」の刻印を持つ。5は丸隅瓦であり、上面には「文□」と刻印される。6～13は軒平瓦である。6はj類、7はj類に似た新型、8はh類、9はo類、10は右軒桟瓦q類、11はs類に類似するが唐草の形が異なる新型である。12は左軒袖瓦j類の左軒袖瓦であり、30.7×27.0cmを測り、後方に2孔を有する袖部は前方を雲形に切る。13も軒平瓦であるが瓦当面を欠き、幅は25.0cmである。14～16は平瓦、14は幅25.7cm、15は28.5×23.6cm、正面中央には「文申」の刻印、16は29.8×25.7cmで正面中央には「○に十」の刻印がされる。断面高はいずれも5cm以下と低い。17～19は目板瓦、いずれも棟部後方の切り欠き部分から割れているが、全形は復元可能である。17は左棟の目板瓦で40.0×28.6cm、本来は後方2ヶ所、前方1ヶ所の計3ヶ所に孔が穿かれていたとみられる。18は右棟の目板瓦で41.2×28.4cm、前面中央に「作」字の刻印。孔は後方に3ヶ所、19も同じく右棟の目板瓦で「作」字の刻印をもち、平面規模は41.6×29.0cm。孔は17同様3点である。平瓦・棟瓦・目板瓦はいずれも1辺30cm前後の規格が一般的であるが、これらの目板瓦は長さが40cm以上となる縱長形である。出土位置より、石垣上部にあった埴瓦の可能性も考えられるが、規格が大きく異なるため、面ごとに使用瓦が異なっていた可能性もある。

(1)溝6

排水から出た水路はO面石垣の前を堀側へ流れていたが、近代木橋や現代水路の大規模な搅乱を受けたため旧状を留めておらず、正確な流路は不明である。遺存する表門礎石をみると、寄掛柱と袖柱礎石

は連続し石垣と接しており、古写真より礎石位置を左右対称に復元すると、水路が抜けられる場所は礎石4の鏡柱礎石の脇のみとなる。櫓門においても鏡柱礎石脇を流れているため、同様の想定が可能である。また、礎石4の周囲には元水路側壁とも取れる長方形状の石材が数石存在している。表門を通り抜けた水路は南方向へ斜走していたとみられる。F面前の大走り上は現代挖乱が広範囲に及んでいたが、旧水路とみられる石材が斜め方向へかろうじて遺存していた。溝は表門から約45°の角度で堀へ続き、第28次調査では注口部直下の堀内で木製枠を検出した。堀内枠は文献記録に残る沈砂槽であることから枠形内の樹とともに2段構えであったとみられる。図化可能な遺物は出土しなかった。

(12) 樫門前石列(溝)

今回の調査では櫓の前面、ほぞ穴より155cmの位置に面を揃えた石列を検出した。奥行き30~40cm程度の石材を並べたもので、両端部は挖乱により失われているが、現状で幅3.8mが遺存する。N面石垣の延長線上にあり、上面標高は向って右側が5.4m、左側が5.5mと、僅かに勾配がつく。櫓門礎石前列とはほぼ同じ高さであり、礎石間の路盤より高い位置にある。また、石列に沿うように幅50cm、深さ10cm程度の窪みがあり、右側の水路に向かい傾斜を持つことからこれを雨落溝として捉えた。ほぞ穴~溝中央までの距離は170cmである。溝の片岸のみに石を並べたものであり、雨水の跳ね返り防止のためとみられる。

出土遺物(第69~76図)は、ほぼ完全瓦であり、石列上や溝状の窪みにかけて多量に堆積していた。検出状況から櫓解体時の廃棄層とみられ、堆積した瓦は櫓門に使用されていた可能性が高い。唯一の陶器は肥前系の平鉢、刷毛目上に透明釉が掛かる。瓦の1~15は軒丸瓦、1~6は蟻文12類、7~9は下類、10はH類、11~15は葵文であり、12類と葵文に出土が集中する。16~19は丸瓦、16は2つの孔を有する。17は完形で全長は28.7cm、上面中央付近には「文末」の刻印を持つ。18も完形で全長28.3cm、19は全長28.8cm。20~26は軒平もしくは軒棟瓦である。当地点で出土分のうち全形の分るものはいずれも軒平或いは平瓦であることから、棟瓦を含まない一群とみられ、幕末期の一群としては非常に珍しい状況である。21はe類で幅は25.2cm、22はn類、23~26はo類、23はほぼ完形で30.7×27.1cmで後方の中央に孔を穿つ。向って左側の縁には「作」の刻印が逆さまに確認できる。26もほぼ完形で、規格・逆さまの「作」字・孔の位置等は23と同じであり、同一ロットでの生産も考えられる。27~33は平瓦である。27~29の3点は23・26の軒平瓦とほぼ同じ30×27cmの規格であり、27は「作」、29は「〇にナ」の刻印がみられる。30はやや小さくなり27.9×23.1cmである。34は右目板瓦であり後方に2孔が穿かれる。35は鬼瓦、中央上部と裏面のえぐを欠くがその他は残存する。幅は50.5cm、復元長は27.6cm、出土品としては一般的な形であるが、全形が復元できた初例である。中央に蟻文12類の瓦当面を有し、裏面は窪む。蟻文脇には1cm程度の孔を左右に有す。

その他の遺物は金属製品2点である。1は釘状銅製品で円形の断面で先端部は面取加工が施される。2は断面方形の鉄釘である。

(13) 御番人小屋【第77図】

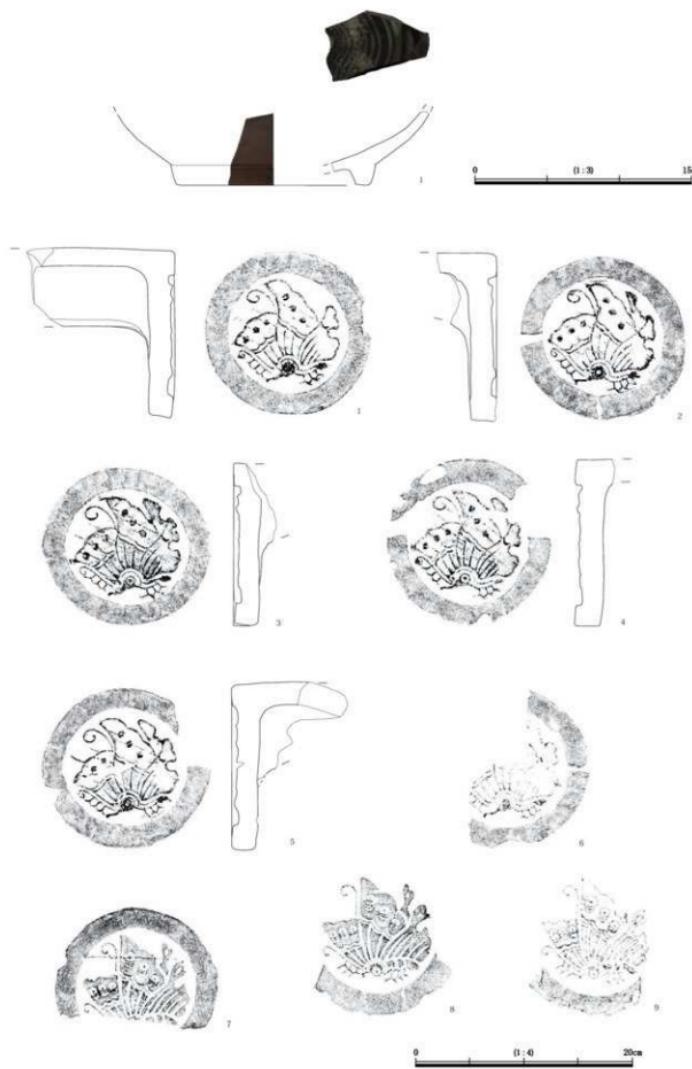
櫓門を抜け右手M面石垣前に位置する。絵図ではL面石垣より半間空けて二間×四間の建物が建っていたとされる。櫓門の右壁となるM面石垣の延長線上



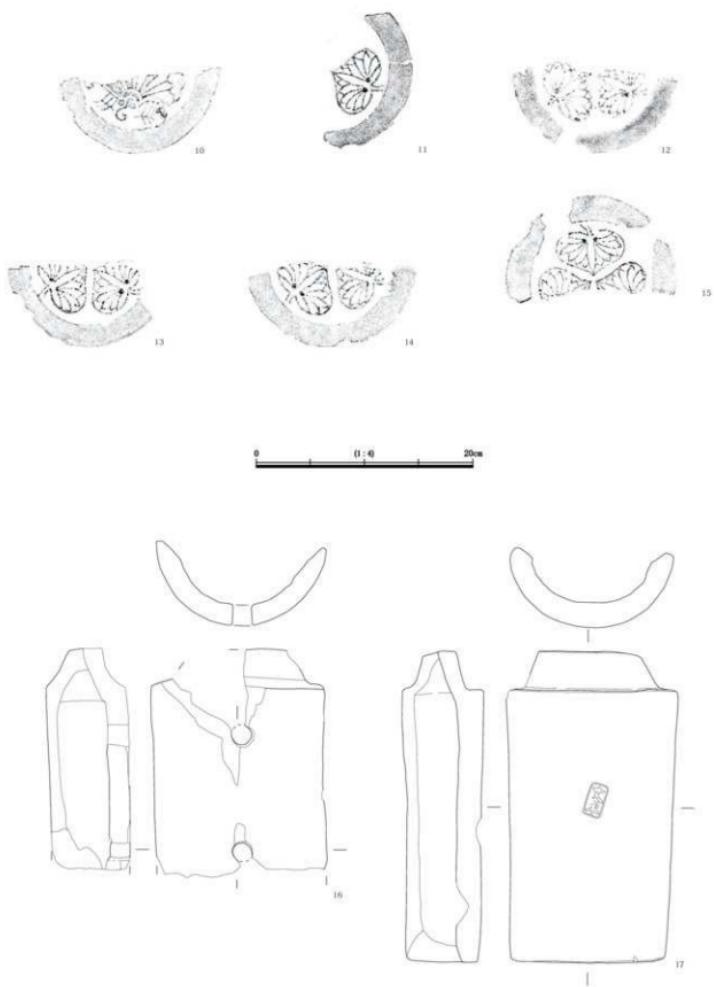
第68図 樫門前石列土層図



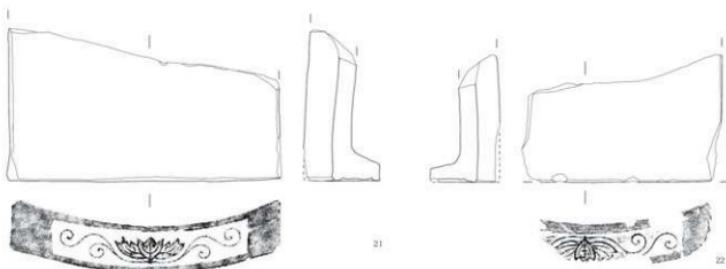
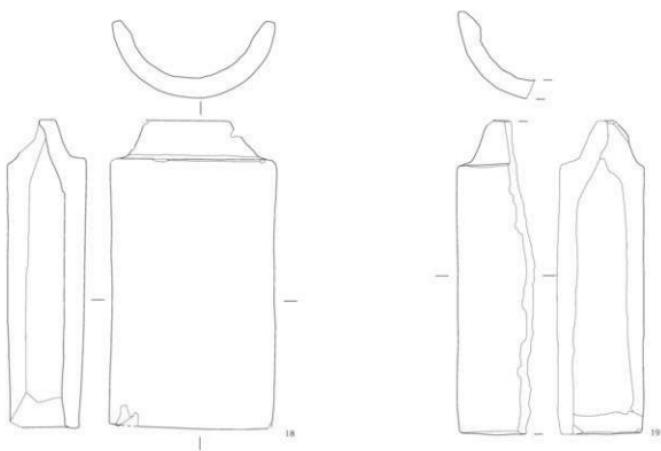
写真7 石列前瓦出土状況



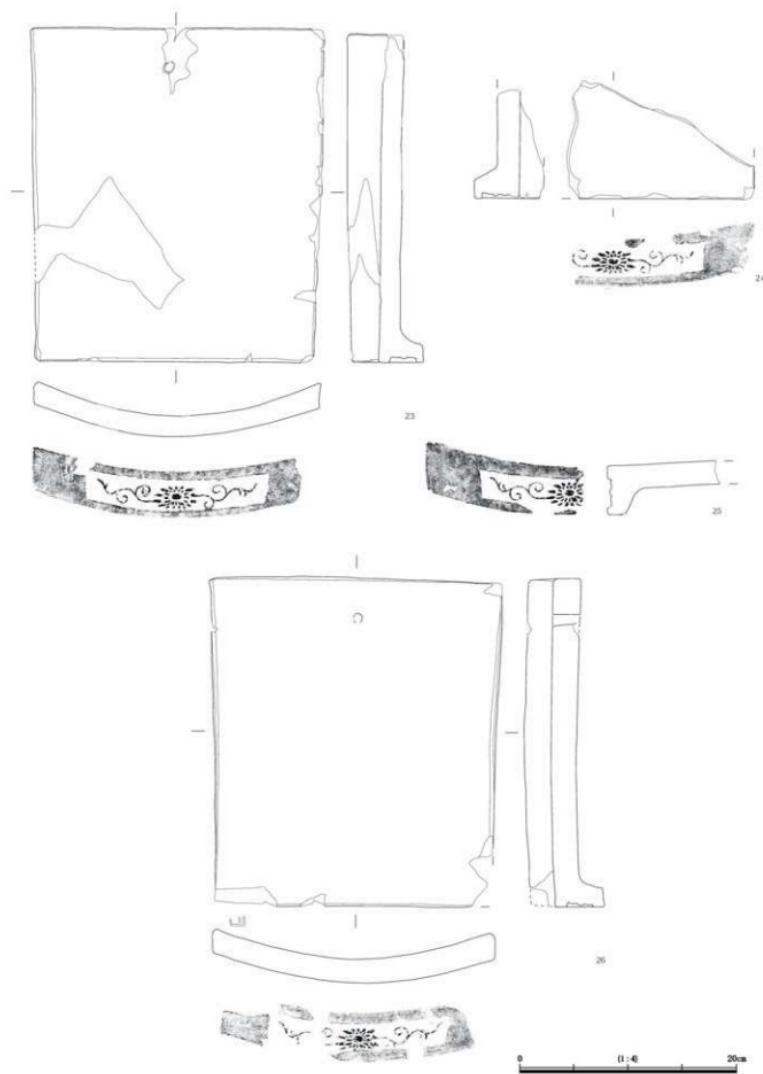
第69図 梶門前石列出土遺物実測図①



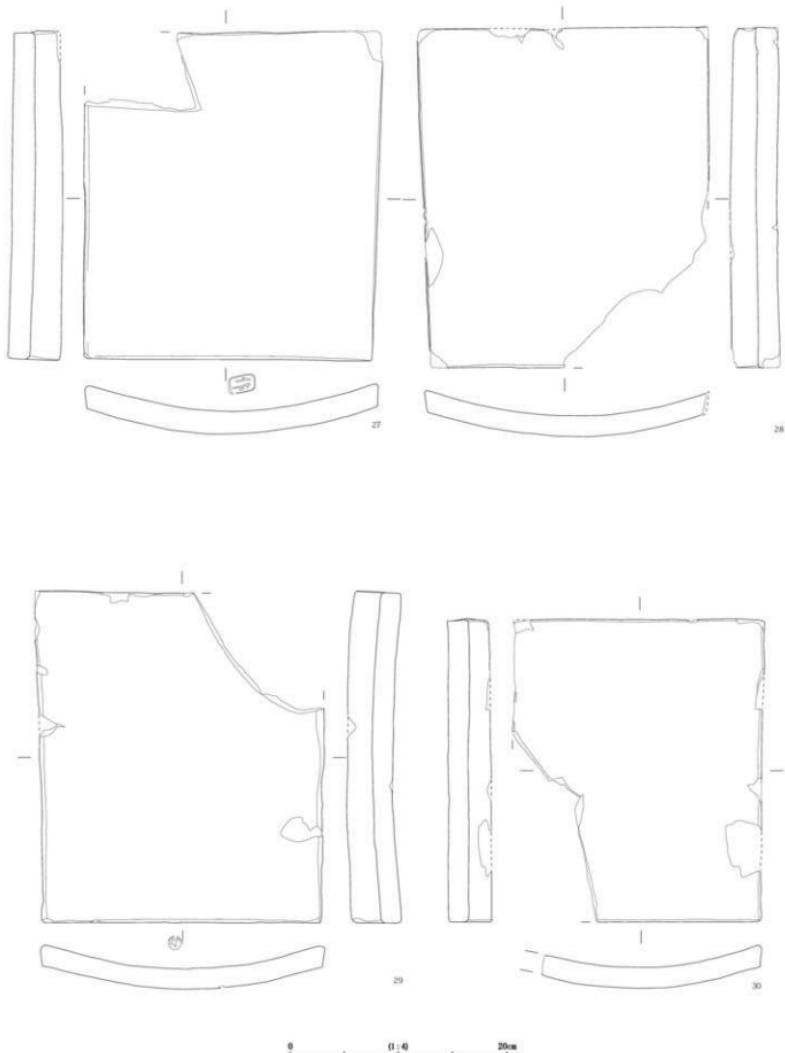
第70図 横門前石列出土遺物実測図②



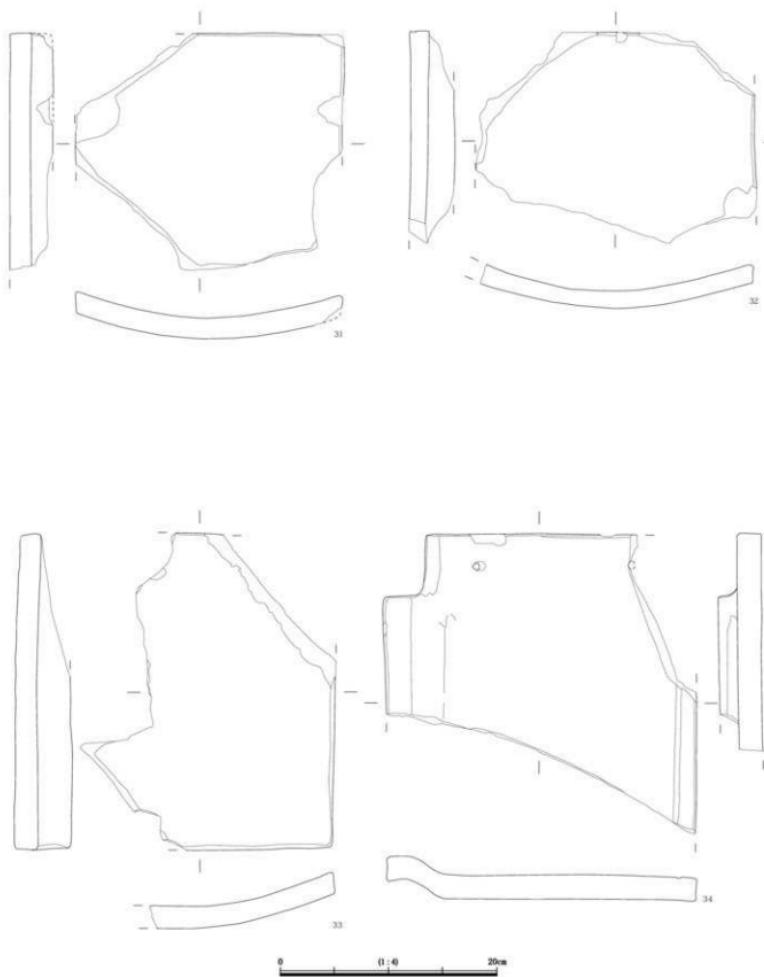
第71図 檜門前石列出土遺物実測図③



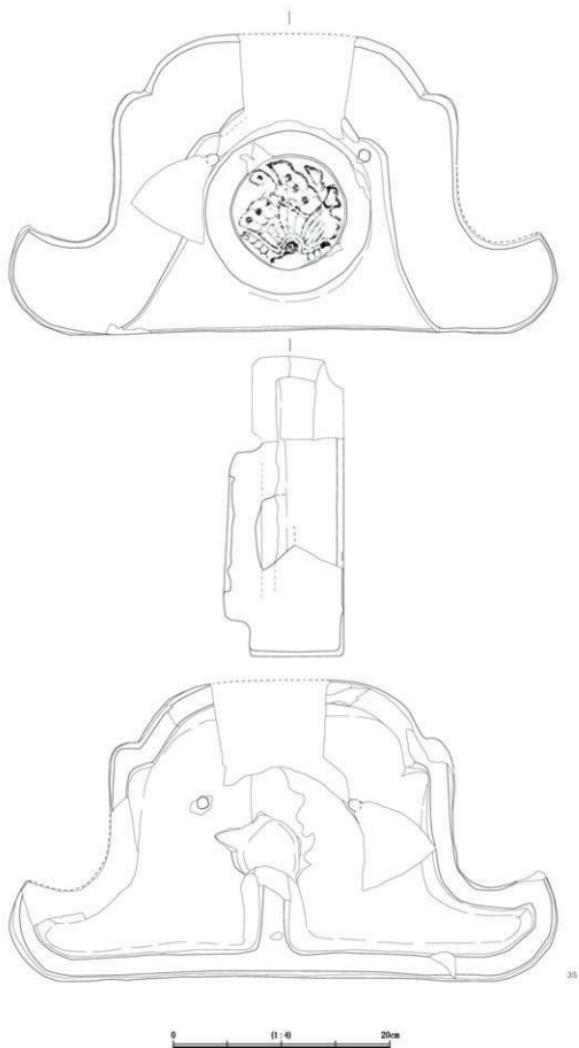
第72図 楠門前石列出土遺物実測図④



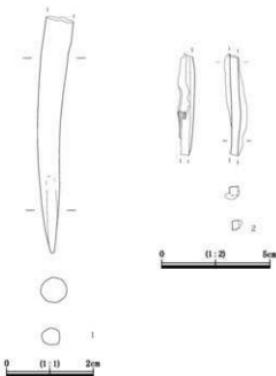
第73図 橋門前石列出土遺物実測図(5)



第74図 楠門前石列出土遺物実測図⑥



第75図 横門前石列出土遺物実測図⑦



第76図 権門前石列出土遺物実測図⑥

瓦片を充填したもので、石列と並行することから小屋の雨落溝であったと考えられる。

(14)雁木【第78図】

T面石垣には雁木の一部が残存する。平面形をみると、石垣面の中央部には1石分、約70cm程内側に入り込む範囲が8m程続く。この部分の石は上面が平滑に仕上げられて列を成していることから、石垣ではなく階段の踏面である。踏面の標高は5.9～6.0m程度であり、5.85m前後の幕末期路盤面からは僅かに頭を出す程度である。ここより上位の階段は石垣解体により残存しないが、側壁となる石列は左右とも4石程度並ぶ。また、下部を掘り下げるに2段の石段を確認し、それぞれ上面標高は6.6m前後と5.3m前後であった。最下段の前面は石垣の延長線上にあり、段前の標高5.1mには硬化面が接続することから、ここを初期の面として捉えた。残存3段は一段毎に30cm程の段差であることから、8.6m付近の天端までは残り8ないし9段存在していたと考えられる。第104図の絵図には雁木四間と記載されおり、基準尺である1間を6尺5寸と矛盾なく合致する。統く石垣四間の記載とも合致する。

(15)焼土層【第79図、写真3】

表門の礎石2下部から樹形石垣中～雁木下部を通り久松公園へ統く鉄管掘り方の壁面を精査すると、標高5.3m付近に焼土層が広範囲に亘って確認された。第78図の雁木土層図の6層と同一地点によつては7～8cmも厚く堆積する。焼土層中の標高5.35mより見込みに胎土目跡が残る肥前系の陶器小皿を1点検出した。

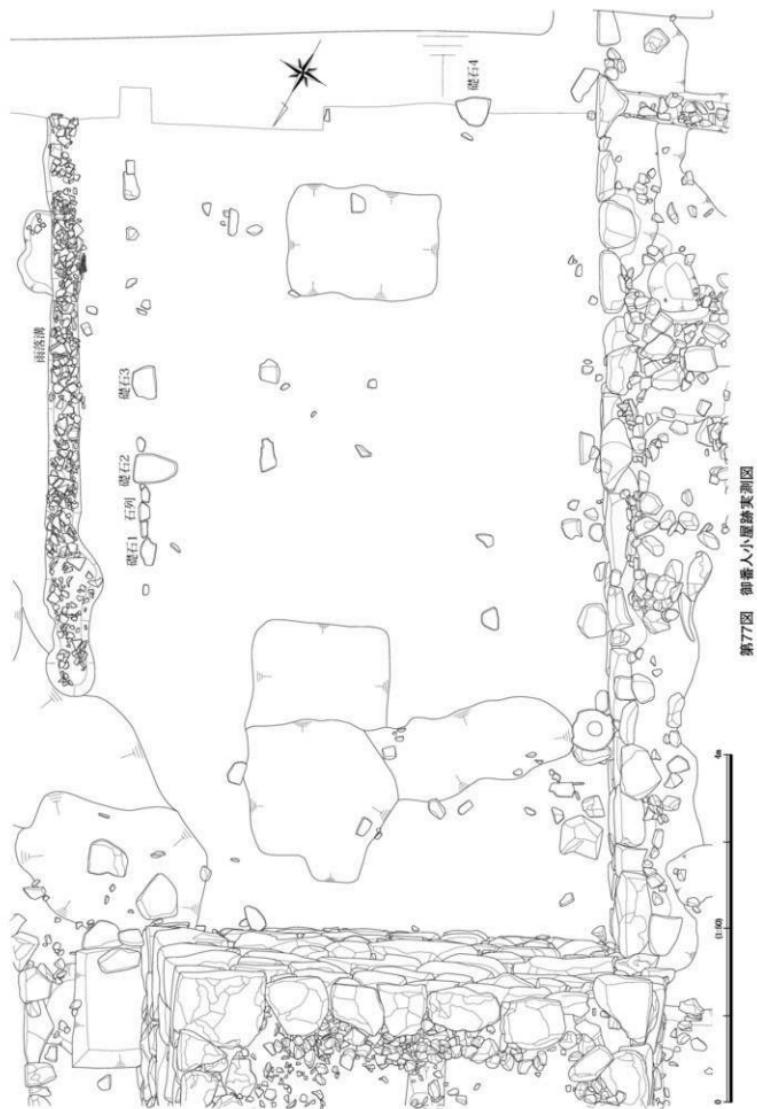
(16)掘り下げ中【第80～86図】

黄色系のグラウンド土を除去後、幕末期路盤面に至る間には近現代の遺物片が多く包含されており、その中から近世遺物と思われるものを中心として掲載した。また、耕上部付近には近代遺物が集中して出土する地点があり、一部ではあるがそれらについても報告する。遺物の時期は17世紀の前半から幕末期まで様々であるが、在地系としたものについては19世紀代以降であり、その中心は半ば頃である。

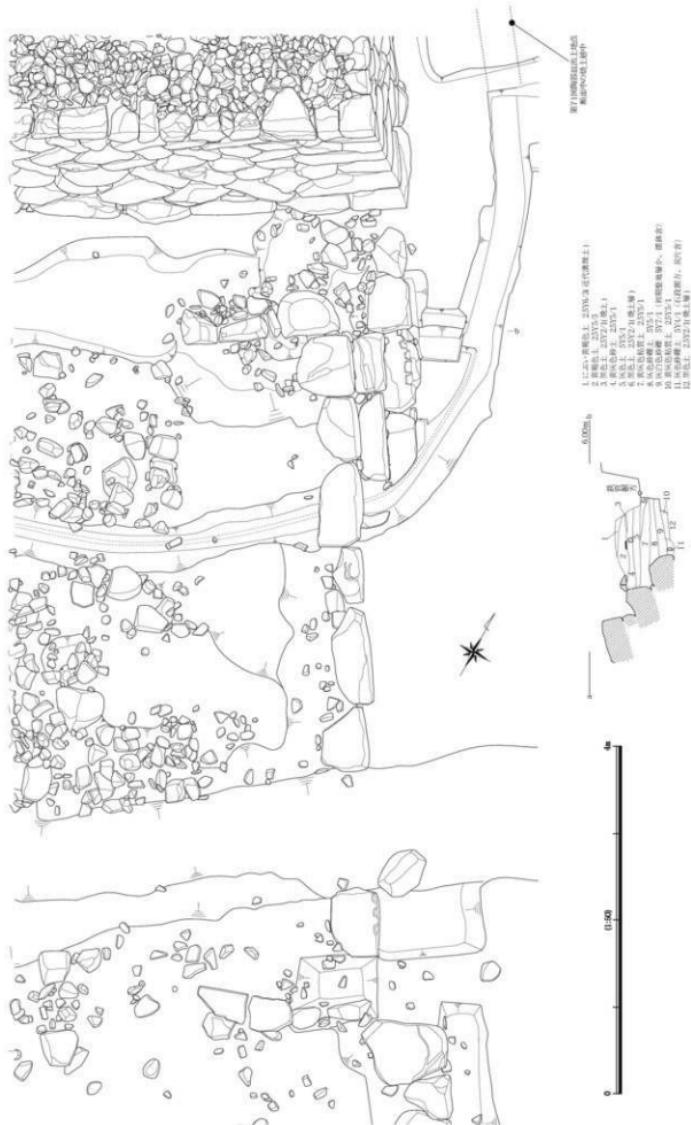
陶磁器(第80～82図)1・2は土師皿、3・4は肥前系の碗で内外とも刷毛目を施す。6～8は肥前系の小皿、6・7見込みに胎土目跡が残る。9は在地系の灯明皿で内面には4条1单位のカキメがみられる。10は花器。11・12は肥前系の平鉢、11は白化粧土に褐彩が施される。12は縁釉で見込みには砂目跡が残

る。石列ならびに礎石とみられる平らな石を確認した。M面石垣の延長線上、角部より南東へ5mの位置には50×35cmの上面が平らな石が置かれる(礎石2)。上面標高5.4m程のこの石の左右1mには礎石とみられる上面が平らな石(礎石1・3)があり、その間を小型の石材が繋ぎざらに続くことから、この列が御番人小屋の前面石列と考えられる。この大型の礎石より南東側へ4m、石垣側へ4mの位置には40×35cmの礎石とみられる石を検出した(礎石4)。1間 = 6尺5寸×197cmを当ててみると、横へ2間、後ろへ2間の位置にあり、その位置から小屋の角にあたると推測される。全礎石が遺存していないが、石列はこの大型礎石を中心として、左右に2間ずつ続き、礎石は半間ごとに据えられていたようである。

石列の前面、礎石中央より100cmの位置には幅35cmの瓦敷きがみられる。櫓門側については撲落を受け遺存していないが、残存長は6.5mである。標高5.3mの幕末期路盤面より5～10cm程度の窪みをつくり中に



第77図 御番入小屋跡実測図



第78図 屋木平面・土層図

る。13は在地系の深鉢、14・15は片口の鉢で14は煤が付き黒変する。16～18は擂鉢、16は備前産で5条1単位の摺目が粗く入る。17は須佐産で底裏には工具痕が残る。18～22は在地系、19は素焼きの落し蓋で中央には耳状のつまみが付く。20～22は宝珠形のつまみを持つ土瓶蓋。23～34は肥前系の碗類、23は外青磁で見込み五弁花、24は七宝繫文に火焰宝珠、25・26は菊文、29は端反となる。30は青磁で32・33は体部が筒形、35は景德鎮産で高台内に「成化年制」の文字を持つ。36は猪口、39は輪花皿、38は大皿、40は瓶で面取りし「福」字を入れる。41は紅皿、長方形状の器の中には赤色の付着物が残存する。42・43は窯道具の焼台とみられる。42は素焼きであり、被熱の痕跡が確認できる。サヤとも考えられるが、内高が3cmしかないため焼台として扱った。43は円形で上面には別個体を乗せた円形の痕跡が残る。44は越前系の壺の下半であり、外面とともに鉄泥を施し、内面には指頭圧痕が多数残る。

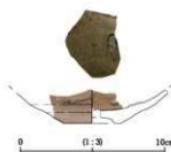
瓦(第83・84図) 1～3は軒丸瓦、1は蝶文D類、2はG類、3は葵文である。5～9は軒瓦、5は細片であるが類例の少ないd類で、下向き三葉文を左右に並列した文様配置である。6はe類、7はm類の右軒桟瓦、8・9はs類で8は右軒桟瓦。10・11は棟込瓦、10はほぼ完形で14.4×12.4cm、縦断面形は天端が直線ではなく、上方へ向い緩やかに曲がり玉縁は有さない。12は鬼瓦、中央の蝶文は12類で、瓦当の直下には瓦の下辺(底部)がくることから、高さの低い種類であるとみられる。13は瓦を加工した円形の製品であるが用途は不明である。14は釉瓦で枠内に「湖九」と刻印する。

その他の遺物(第84・85図) 1は緑色凝灰岩製の柱根巻きである。柱の根腐れ防止のため、コの字形の石材を対面させ根元に巻きつけるもので、断面形は台形状を呈す。細かな撃跡が多数みられる。内寸から23cm程度の柱に使用されていたことが推定される。2～4は棒状石製品、直径7mm、長さは3.2cm程で用途は不明である。5・6は煙管の雁首、6は火皿の一部を欠くが、小口付近より羅字が僅かに残存する。7・8ともに不明銅製品で筒状の体部で端部は閉じ、8は平面三角形状で内部は中空である。9は銅鏡で寛永通宝、裏面には波文がみられる。11・12は鎧で銹化が激しい。13は土錘で全長4.9cm。

近代遺物(第86図) 樹上部でまとまって検出された1～8は瀬戸・美濃地域で生産された戦時下の磁器であり、1・7以外は戦時下の窯業統制で義務付けされた、产地名と窯番号が描かれている。1は外面に兵隊を描き、2～5・8は岐阜産、6は美濃産である。9は旧制中学校時代商業科の磁器鉢である。10は岡山の三石煉瓦、11は明治9年の一錢貨幣。

(7)近代溝【写真9】

調査区の東側、溝1と並行して走る近代溝で、両岸に石を並べた内寸は30～40cmである。幕末期路盤面上に構築されていることから近代溝(近代溝1)であるが、石材は石垣からの転用の可能性が高いため、写真撮影後に除去し、石垣復元工事の際には再利用する予定である。また、当溝と併走するように木枠ないしは胴木として、木材を用いた溝状の本列(近代溝2)も確認した。検出時点で畜糞が激しく全容は把握できないが、幕末期路盤面より高い位置にあることから近代遺構である。第27次調査において櫓門内を通る木材を使用した近代溝状遺構を検出しており、それへ繋がる可能性がある。2つの溝とも近世の溝2と同じ角度で流れしており、大溝廃絶後も山からの水はこの場所へ集まっていたと考えられる。



第79図 燃土層出土遺物実測図



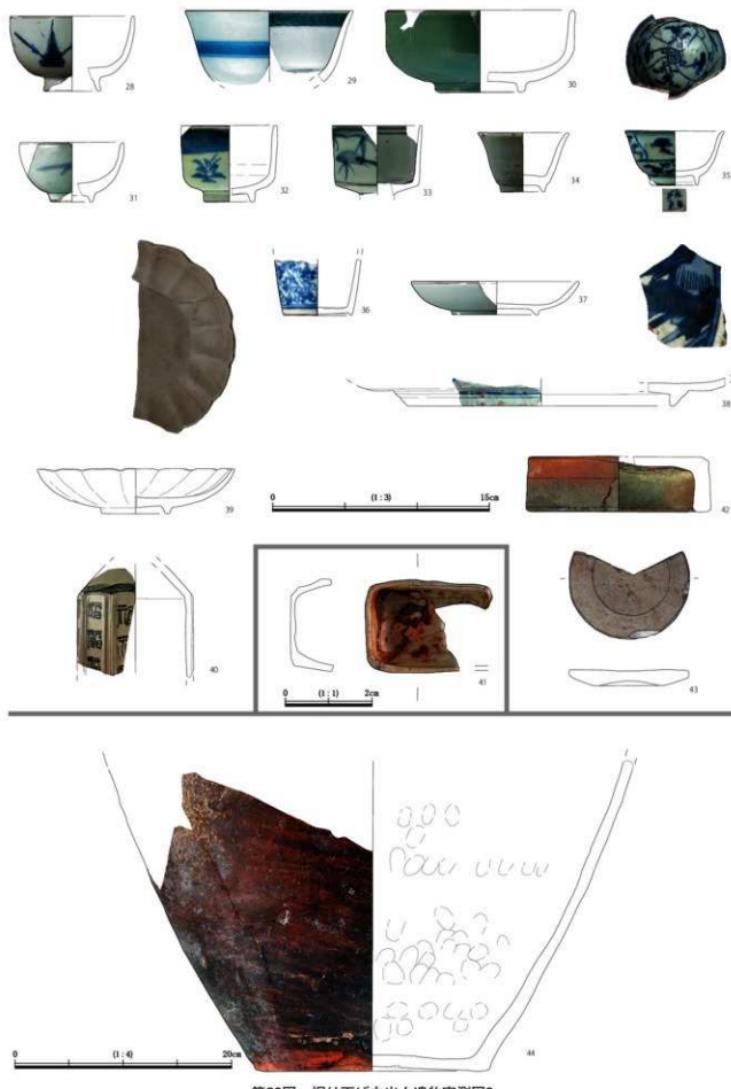
写真8 遺物出土状況



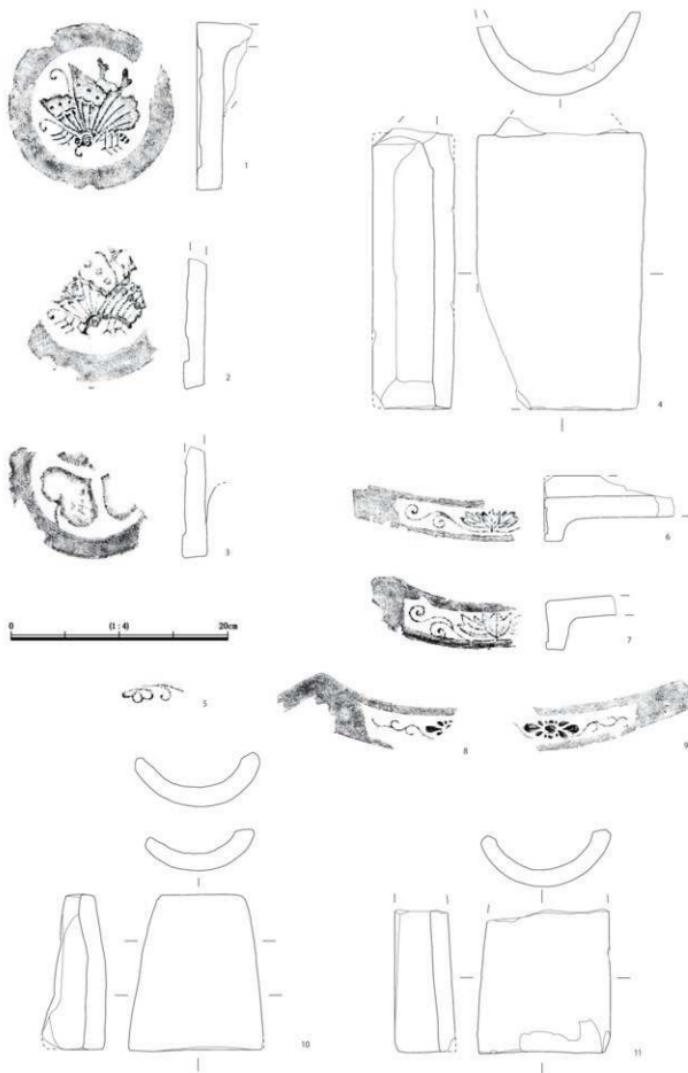
第80図 掘り下げ中出土遺物実測図1



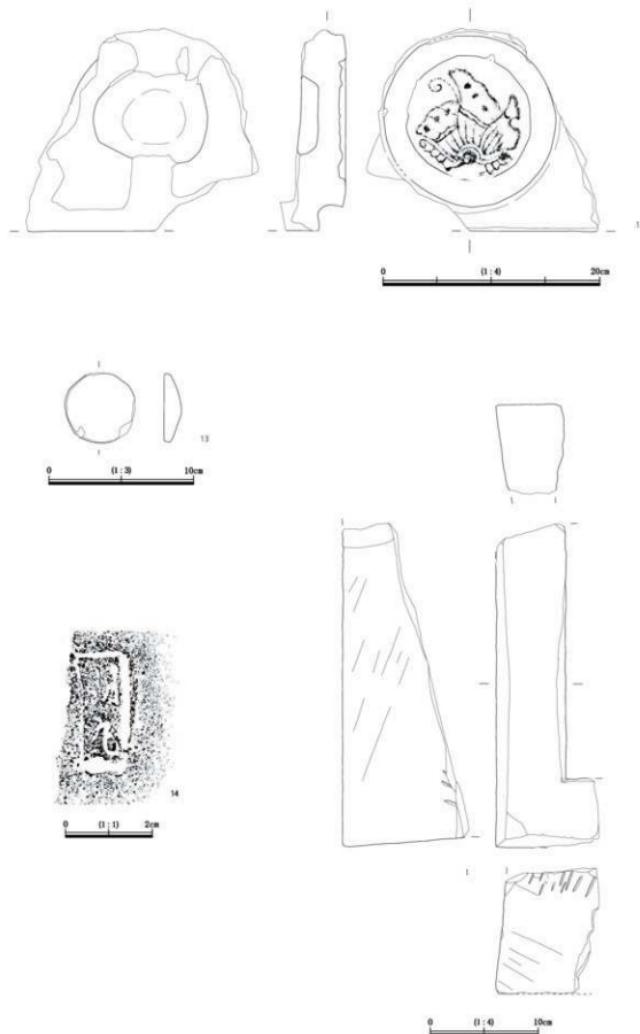
第81図 掘り下げ中出土遺物実測図2



第82図 掘り下げ中出土遺物実測図3



第83図 掘り下げ中出土遺物実測図④



第84図 掘り下げ中出土遺物実測図⑤・瓦拓影



第85図 掘り下げ中出土遺物実測図⑥



第86図 掘り下げ中出土遺物実測図⑦(近代遺物)

(18)近代木樋【写真10】

樹の横付近より掘へかけて、木樋を確認した。撤去した現代コンクリート溝の直下に位置しており、20cm四方のマツ材の中心に直径10cm程の孔を割り貫いている。樋の縦目には方形に割り貫いた木材を設置し、隙間は白色粘土で目張りする。上面標高は表門礎石4の横で4.2mであり、標高4.8m程の幕末期路盤面よりはるか下方に位置する。堀側の端部は欠損するが、現在でも僅かながら通水している。第39次調査により、この木樋は櫓門跡への切り込みが確認できることから、近代溝であり明治17年に陸軍が敷設した水道管とみられる。従来、表門礎石は、コンクリート溝の前身を構築する際に除去されたと推定されていたが、今回の調査によりそれ以前の木樋敷設時に除去された可能性が高いことがわかった。

また、樹の上層付近では表土剥ぎの段階で大量の近代磁器片を検出した。戦時下の磁器を含んでおり、学校グラウンドが昭和18年の鳥取大地震後仮設住宅地になった際のゴミ層であるとみられる。



写真9 近代溝検出状況



写真10 近代木樋断面

III - 4 石垣

(1) A面【第88図】

堀に並行して走る石垣で、B面との入隅部より北西方向へ12.5m、復元整備範囲までを検出した。上面標高は、平均して6.7m前後であり、入隅部で5.8mと僅かに高くなる。第1トレーナーの調査状況から標高5.3mを底として1段目が設置され、平均3段積みで北西側では4段積みになるとみられる。底部からの比高差は1.2m程度であり、幕末路盤面からは90cm程度である。最上段は高さが30～40cmで、下部は横方向へ一直線状に目地が通る。

隣接する第1トレーナーでは、城の初期整地面を確認しているが標高は石垣底部より低い4.8～4.9m付近にある。また整地面より石垣下部へ向けて盛土状の高まりもみられることから、当初は石垣でなく土羽であった可能性が高い。石垣の構築年代は、17世紀の後半から18世紀の初め頃が想定される。これは、第30次調査で実施した、石垣内部のトレーナー調査で拳大の裏栗石とともに17世紀後半頃の磁器を検出しているためにこれを上限とし、石垣自体も被熱により赤変している点を、鳥取城内石垣に特徴的な享保5(1720)年の石黒大火の影響として捉え、これを下限とした。

(2) B面・階段【第88図】

A面とC面との間に位置する階段部分である。B面は階段の側面部にあたり、比較的大きな石材を中心に使用し、間詰めに小型石を多用する。積み方はA面のように目地は通らず、やや不規則な印象を受ける。C面前面のA面との接続をみると、上2石はA面側へ入り込むものの、下部については逆転しA面がB面内へ入り込むことから、積み上げに時期差がある可能性が考えられる。C面となる階段とD面との接続状況は構築に時期差が想定される上下3段ずつともD面石垣が内部へ続いており、階段が石垣に摺り付く形となっている。

(3) C面【第89図】

樹形石垣左側壁の裏面にあたる全長21.5mの石垣である。向かって天端の標高は右(堀)側で8.3mであるが、緩やかに上昇し、左(山)側では現状で8.6～8.7m程度となる。E面との角部よりE面全体については昭和の大規模改修を受けている可能性が高く、角より7m程の範囲については、樹根跡の陥没により天端が下方へ滑り出しているため原位置ではない。陥没前面については、石垣崩落防止のための大型土のうを設置しているため測量・図化は困難であり、石垣修理時に行う予定としている。石積みをみると標高7.0m付近を境に長方形状の石材を横方向へ一直線状に並べており、明瞭な横目地が確認できる。また、目地より下については、被熱とみられる赤変した石材が全面にみられることから、上半部分については、火災を受けた後に積み足されたと考えられる。C面前面からの比高差は、横目地天端まで2.3m、天端まで3.4m、幕末期路盤面から横目地天端まで1.1m前後、石垣天端まで2.7m前後である。

当該地付近についての詳細な記録については、19世紀初頭頃に制作された第104図『鳥取城内手配之圖』があり、絵図中には「石垣高サ九尺」とあり、幕末期路盤面からの高さと一致する。このことから、この時期までには石垣の積み足しが行われ、路盤も幕末期と変わらない標高まで嵩上げされていたと推定される。

(4) D面【第89図】

樹形石垣奥壁の裏面に当たり、本来はT面と一連で雁木を挟み23m程続く石垣であるが、明治期の解体と昭和の積み替えにより、現状で下部幅5.2m、天端幅4.0mの形態となり、幕末期路盤面から現状の天端までの比高差は2.8mである。平面図より石垣の裏栗石が隙間なく詰められている範囲が昭和38年頃の修理範囲である。右上から2石下より左下までを境にした左側は石積みの形態が新しく、当面の半分程度が新造である。しかし、石材を見る限り周辺石垣と違いはないことから、本来存在していた石垣からの転用であると考えられる。向かって右方の標高7m付近には、D面より続く横目地が幅2m

程度残存しており、積み足し前の低い石垣は当面まで続いていることが分る。

(5) E面【第90図】

樹形石垣左側壁にある24.7mの石垣である。向かって右手側の6.2mの区間は本来奥壁の裏側にあたり、明治期に新しく積まれ、その後昭和18年の地震で崩壊し昭和38年頃に再び積まれた範囲であるため、現状より下に石垣は存在しない。残りの範囲は残存石垣であるが樹根の影響等で中央付近が孕み出している。天端は左手端部より3m程の所で一段高くなり僅かに勾配を付け上昇して行く。表門の屋根はこの段差前に収まるとみられ、対面のP面でも同様の段差がみられる。

(6) F面【第90図】

表門へ向かい右側、堀に面した幅7mの石垣である。門と接する左手部分の切石状の安山岩質の石積みは昭和40年代の修理跡である。地震と樹根の影響により全体的に石材間に隙間がみられる。右方上部には方形状の石材を配しており、本来天端面には塗が塗かれていた。

(7) G・H・I・J【第90・91図】

堀側へ向かい僅かに突出する石垣で、幅はG面2.5m、H面10.7m、I面6m、高さは3m程である。前面裾には犬走りが残っており、石垣下部は埋没する。H面からI面にかけ天端石を中心として、昭和40年代に積み替えが行われており、質感の異なる石が積まれている。

(8) K面【第92図】

御番人小屋裏に位置する高さ1.3m程の石垣である。3段積みの箇所が僅かに残るが、上段は崩壊が著しく、本来の高さは不明である。石材が減失するため拳大の栗石が露出する。矢穴を持つ石材も数石みられ、中央付近には矢穴を開けかけたような石材もみられる。

(9) L面【第92図】

御番人小屋の脇に位置する幅6m、高さ3.4mの石垣である。標高6.5m付近より下の変色部分は調査前に埋没していた範囲である。石垣中位付近に大型の石を使用し、上下は比較的小さな石材を用いており、下部には間詰め石も良好に残存する。

(10) M面【第93図】

櫓門と接する石垣であり、天端石まで良好に残存する。上半と下半とで大きく積み方に違いがみられる。上部は石材同士を加工し、設置面を広くとり、石材間の隙間を空けない積み方であり、城内では18世紀前半代以降にみられる積み方である。下半は中央左寄りに位置する鏡石を挟み左右で積み方が異なる。右側は長方形状の石材を数段布積みしており、左側はL面下部からの続きで、間詰め石が多く見られる積み方である。また左端の下部には埋没石段が2段ほど残っている。櫓門が幕末期の形態となる以前に埋められたこの石段は、古相の鳥取城のものであり、L面下半より続く石垣もまた古相であるとみられる。

(11) N・O面【第94図】

N面は櫓門へ向い右手にあたる石垣である。天端石の中央右よりの位置から左下にかけて積み方の異なる石垣がM面から続く。左側の稜線上では最下段の一石のみ角度が異なっており直上の布積み石垣とは形状が異なり、間詰め石も多くみられることから古段階のものとみられる。右下にはO面にかけて石垣面と接する形で樹が塗かれる。樹は規格性のない形態の石材を粗く積みあげたもので石垣とは時期差をもって塗かれたとみられる。

(12) P面【第95図】

樹形石垣右側壁にあたり表門が接する石垣である。右方の安山岩質の石材は昭和40年代の修理によるもので、他部分についても全体に孕み出しや抜け落ちが著しく遺存状態は悪い。左側の稜線は堀へかけて開き気味であり、O面へかけて算木積みが顕著である。一方右方の角部は下2石の稜線が縦方向に通っている。近代溝の搅乱により現状位置まで石垣下部が露出しているが、本来は50～60cm程度は埋

没していたと考えられる。角部以外は様々な大きさの石材を組み合わせて使用しており、他面と比べ様相を異としている。E面同様天端中央には階段状の段差がみられるのが特徴である。

(13) Q面【第95図】

表門へ向い左手に位置する石垣である。堀へ面した門脇の石垣ということで目立つ形に鏡石が設置されている。1.2×2.0mほどの石材は城内の石垣でも2番目に大きな石材である。天端には長方形形状の薄型石材を積む。

(14) R・S面【第96図】

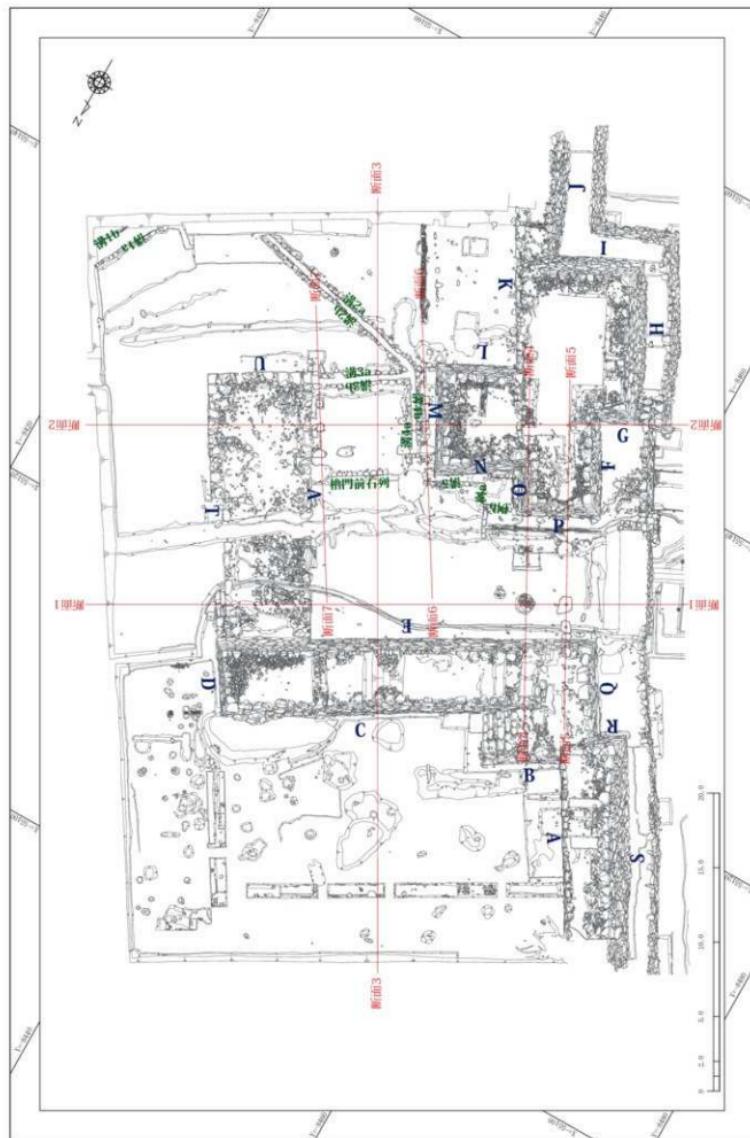
Q面から続く石垣でR面を経て1.5m程堀側に突出し堀沿いに続く。角石のR面側には幅13cm程度の矢穴痕が多数残る。S面は松の樹根により一部に孕み出しがみられる。角より13mの地点には幅80cm程の大型石材が上下2段積まれており、ここを境にして30cmほど天端面に段差が付く。天端石も大型石材の右方に比べ左方は小型となる。

(15) T・U面【第97図】

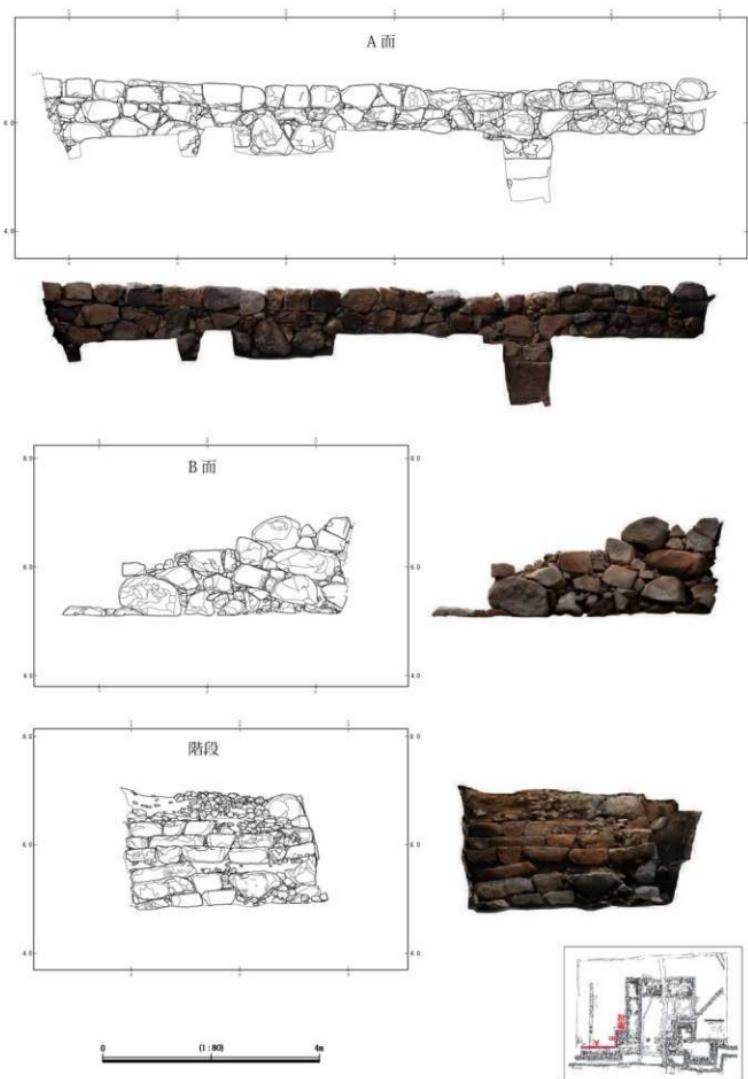
T面は楔形石垣奥壁の裏面にあたる。標高5.8～5.9m前後の幕末期路盤面付近を境にして上部は解体され残存しない。平面を見ると右方の8mの区間内は階段にあたり石垣が80cm程内側へ入り込む部分がみられる。立面図でも明らかな通り上面は平滑となり、下部に2段が埋没する。階段の端部より8.4mでU面との角部に達する。角部の裏側には大型の石材が1石埋め込まれる。絵図に記載された寸法によると「雁木四間、石垣四間」とあり、一間=6尺5寸(≈197cm)に換算すると階段寸法は一致し、石垣部分はやや長くなることから石垣の天端での計測値とみられる。U面は長さ6.3mで比較的大型の石材を用いており、天端面では三間程度であったとみられる。

(16) V面【第98図】

楔形石垣奥壁にあたる長さ18mの石垣で左方を鉄管埋設、中央付近を近代水路により欠く。右方はほぼ路盤面付近で解体され、左方のアスファルト道下部付近については2段程度、70cm程度が残存す。

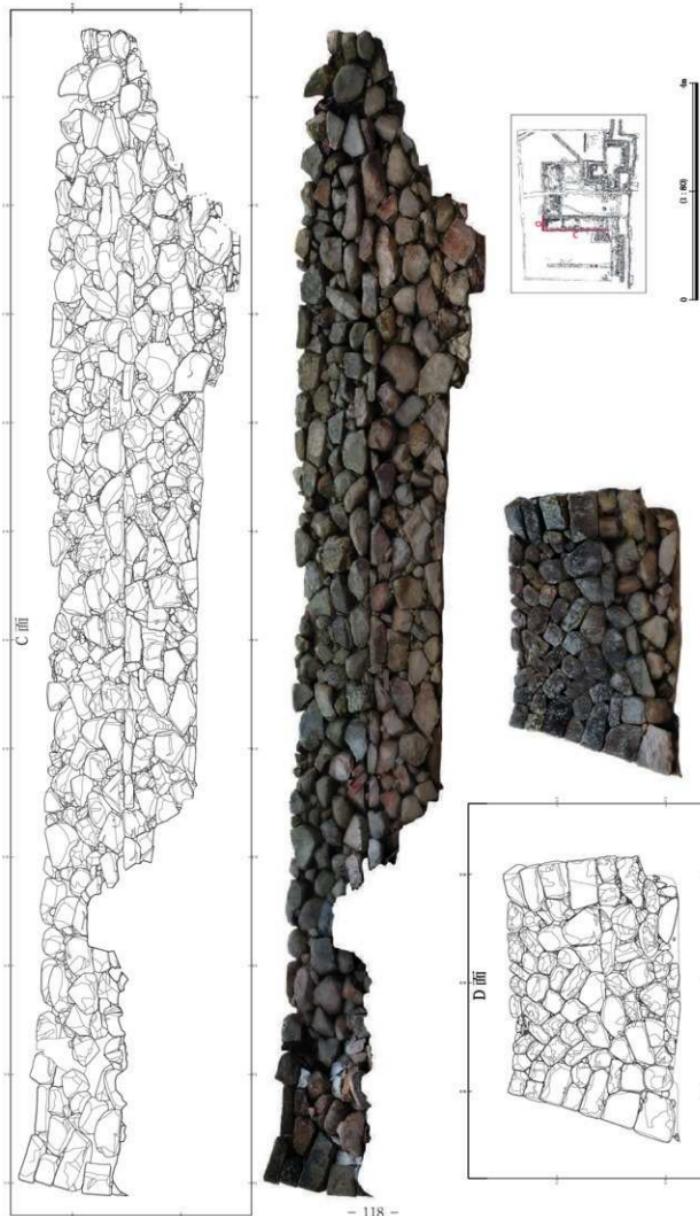


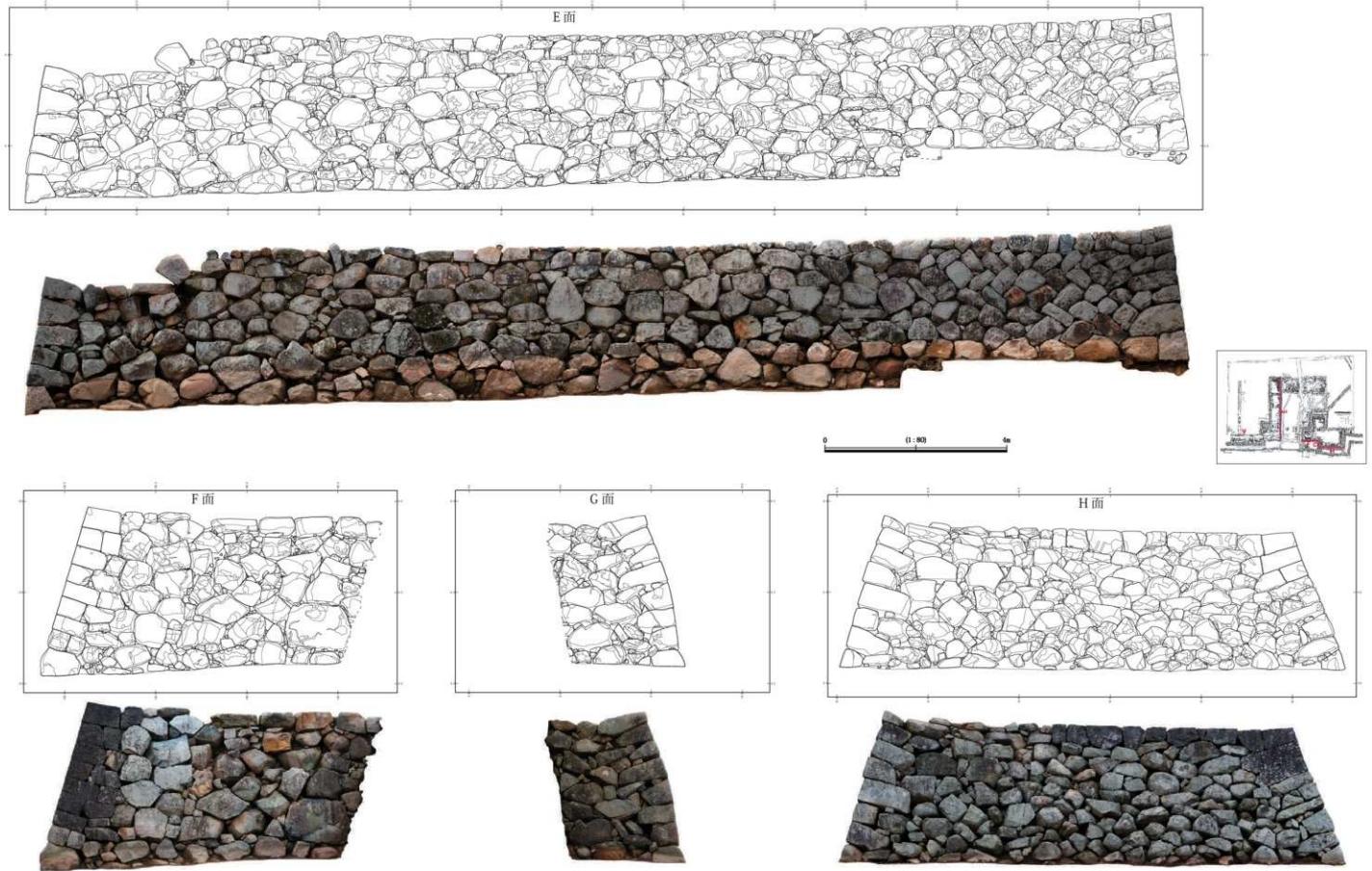
第87図 断面・石垣面位置図



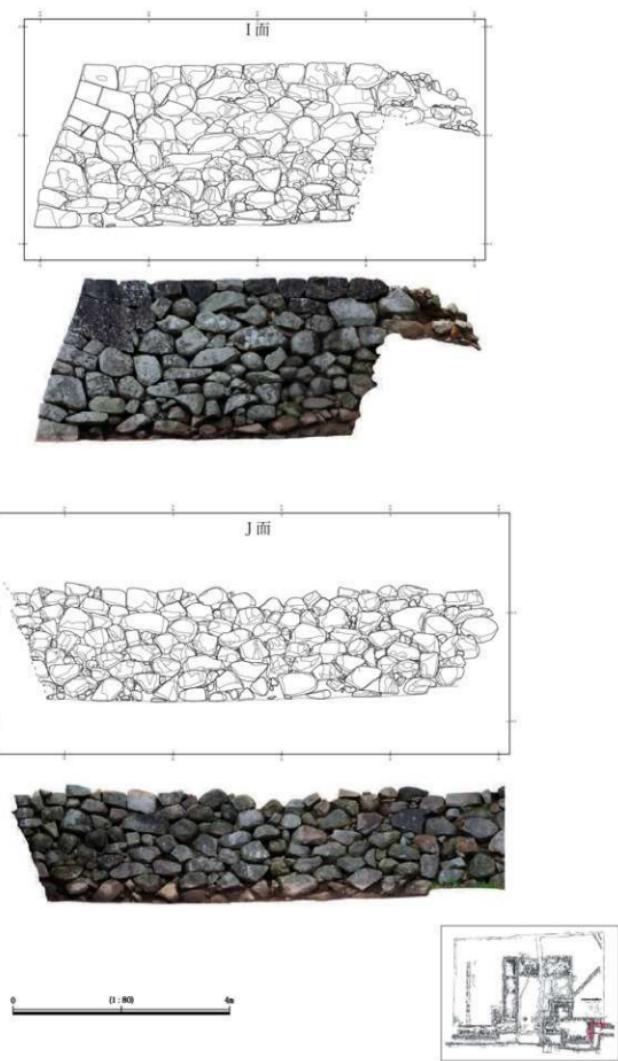
第88図 石垣立面・オルソ図①(A面-B面-階段)

第89図 石垣立面・オルソ図② (C面・D面)

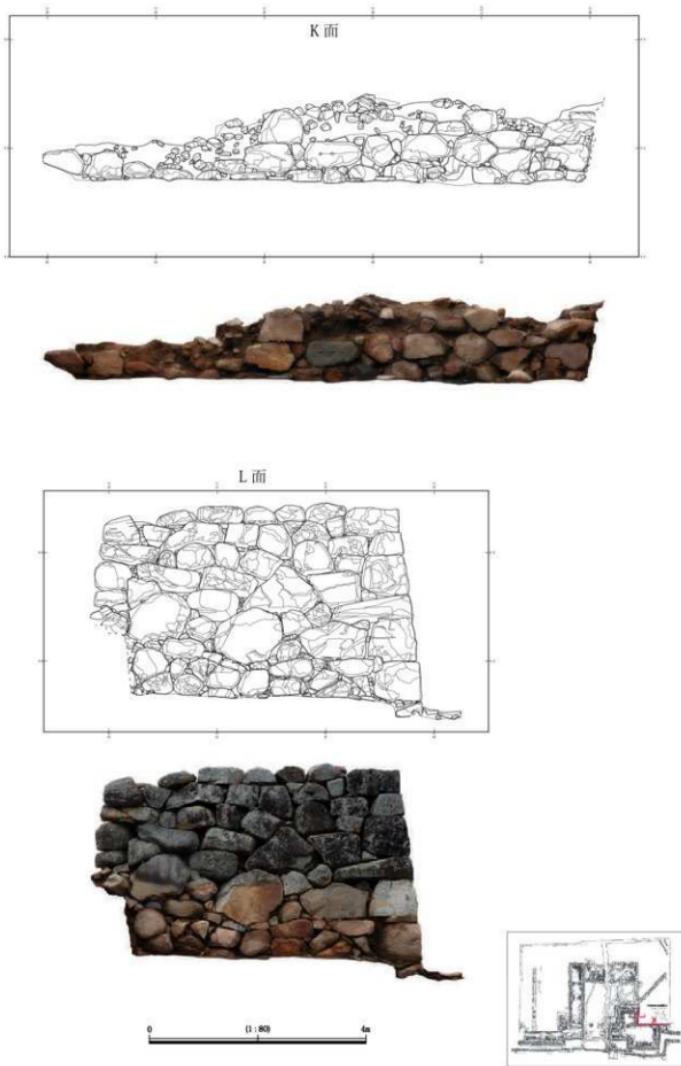




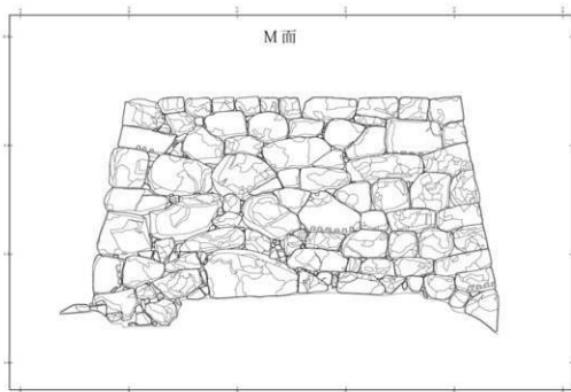
第90図 石垣立面・オルソ図③(E面・F面・G面・H面)



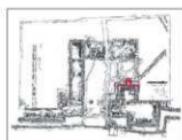
第91図 石垣立面・オルソ図④(I面・J面)



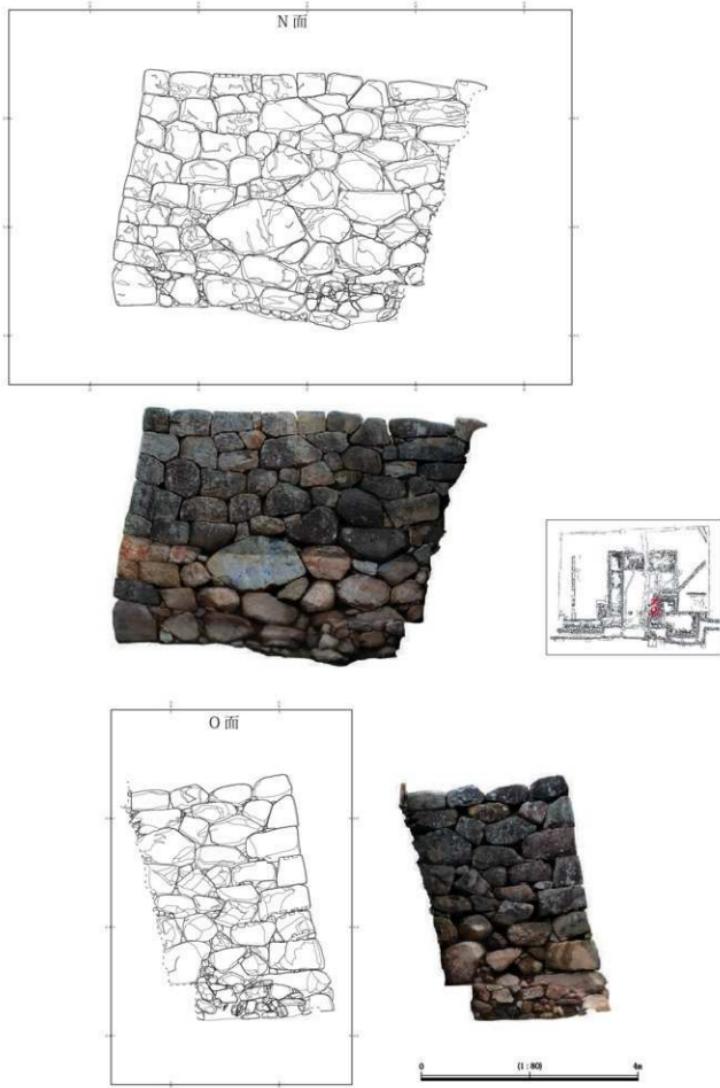
第92図 石垣立面・オルソ図⑤(K面・L面)



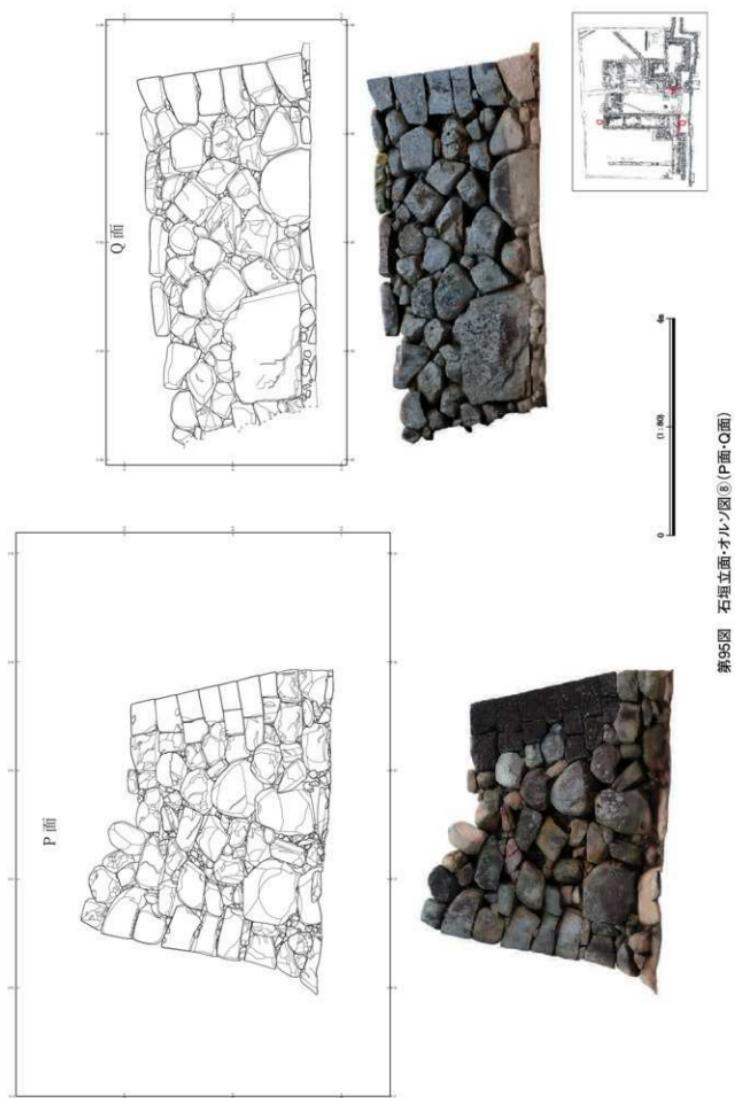
0 1:80 4m



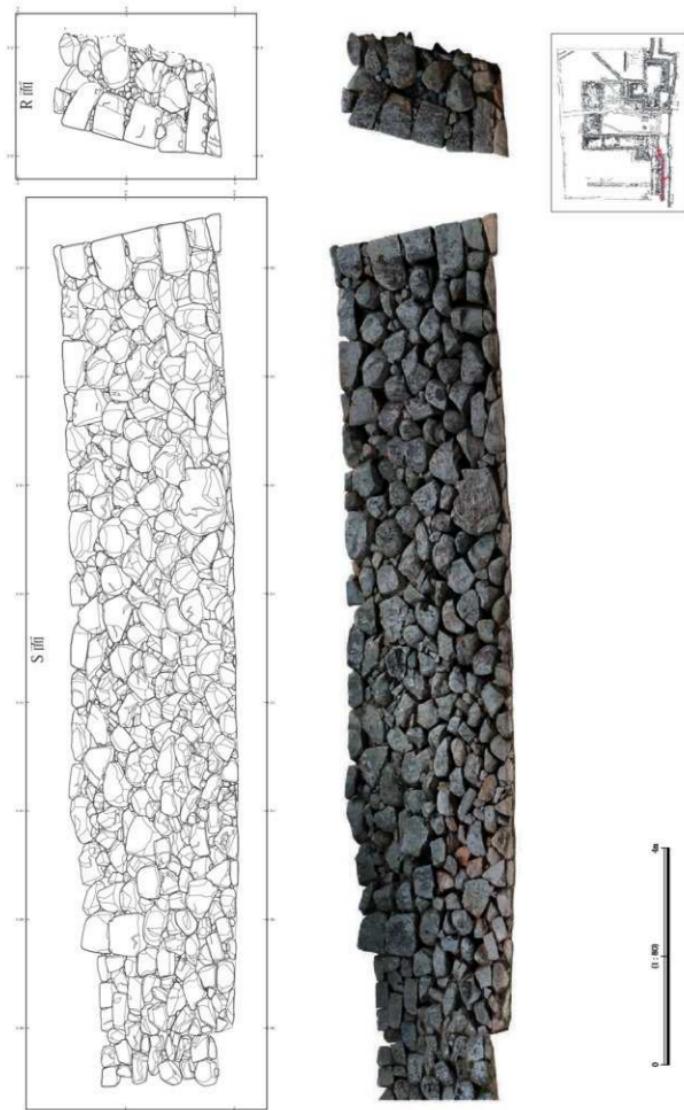
第93図 石垣立面・オルソ図(⑥)(M面)



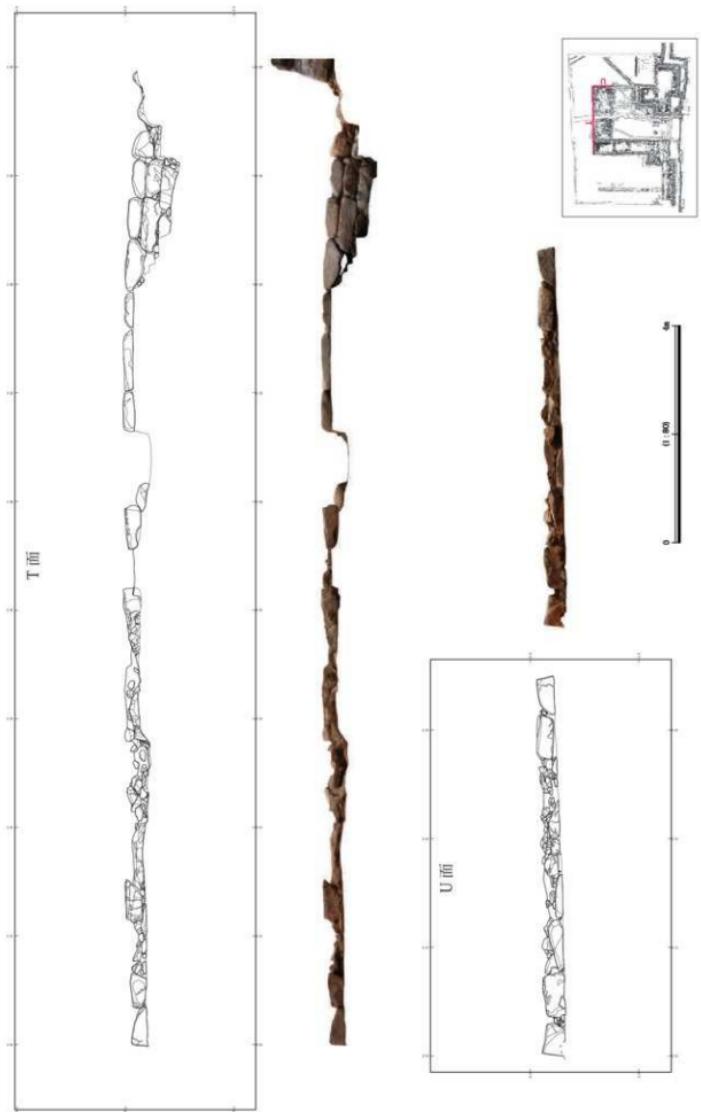
第94図 石垣立面・オルソ図⑦(N面・O面)



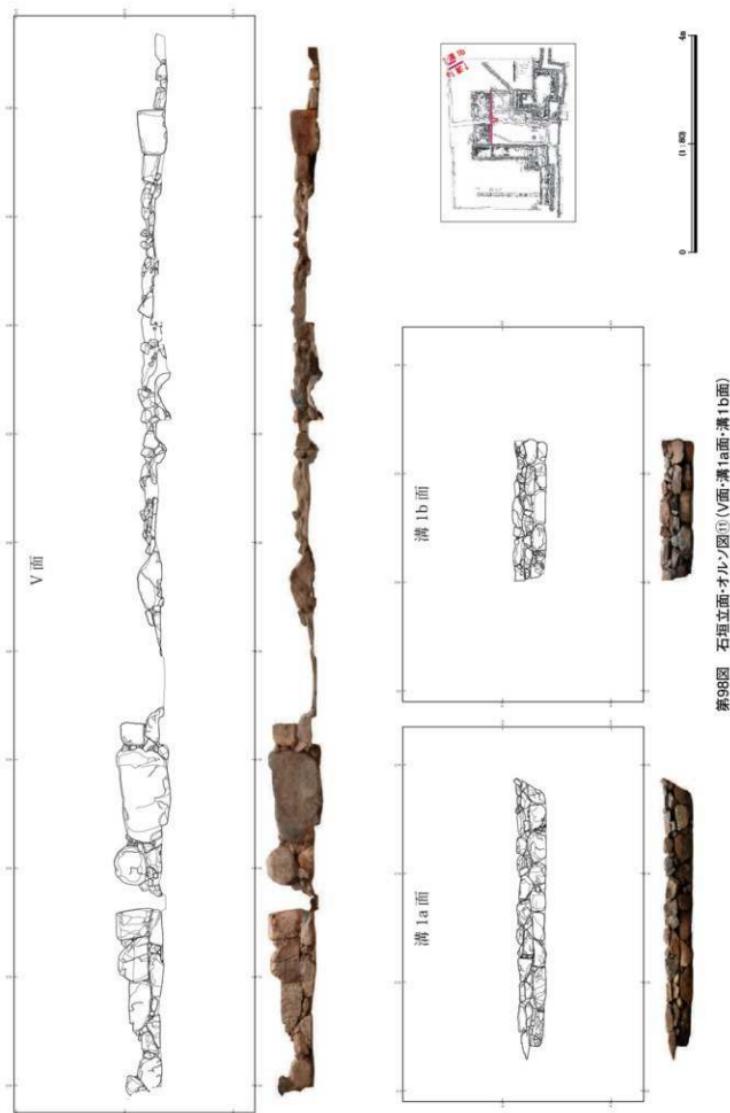
第95図 石垣立面・オルソ図⑤(P面・Q面)



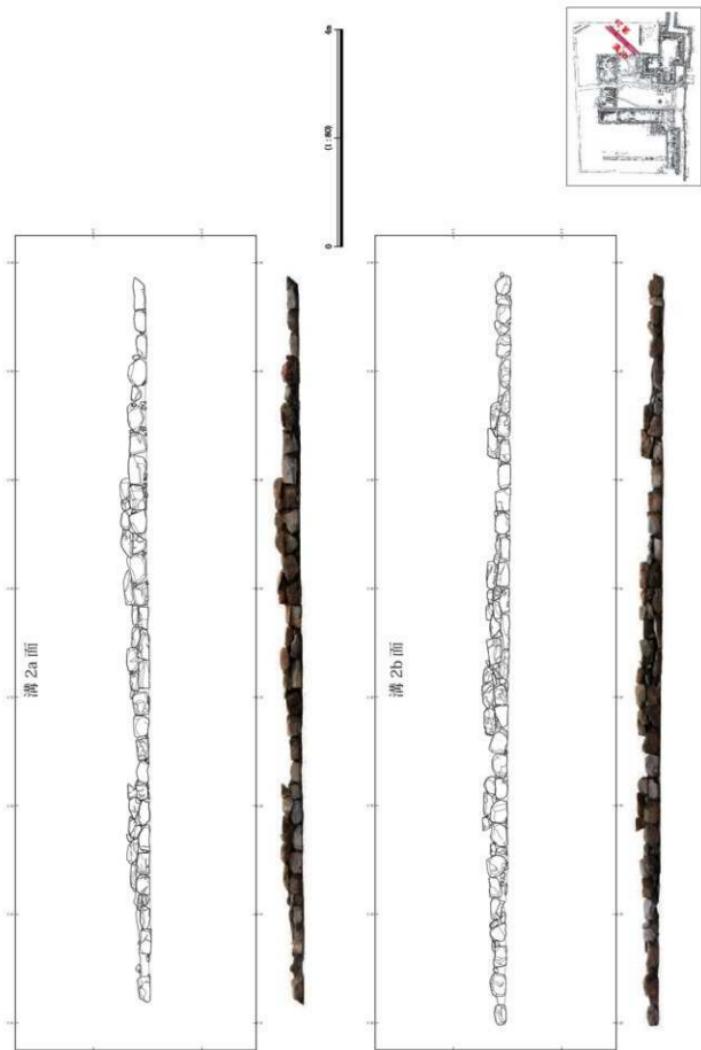
第96図 石垣立面・オルン図⑨ (R面・S面)



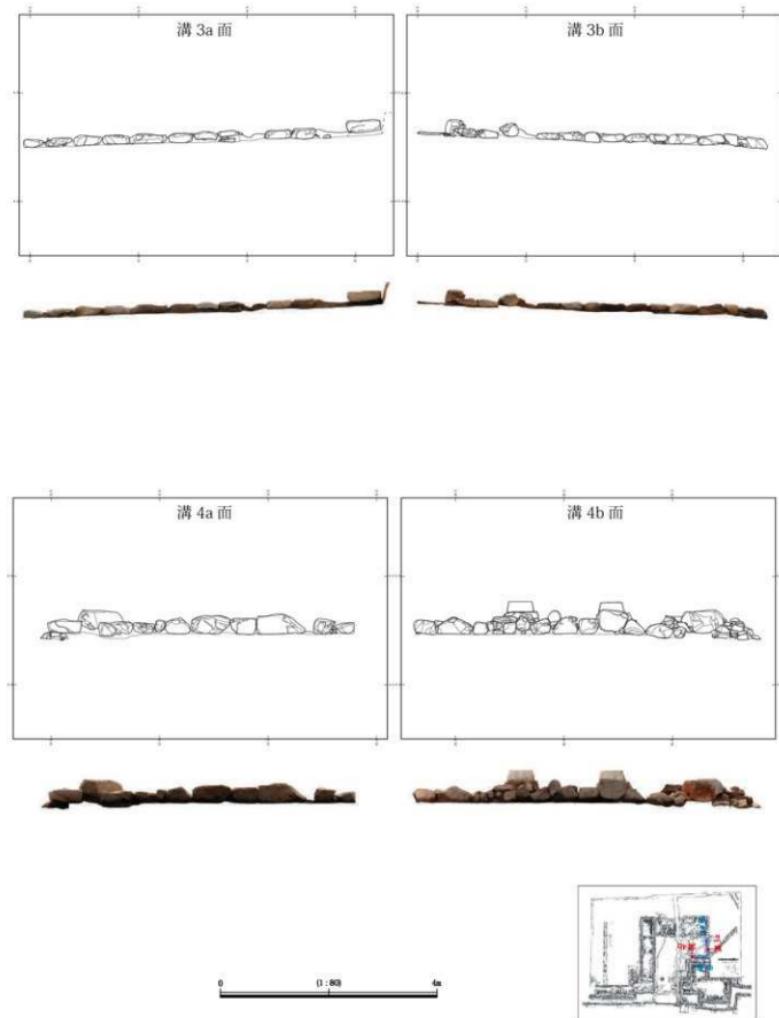
第97図 石垣立面・オルン図(T面・U面)



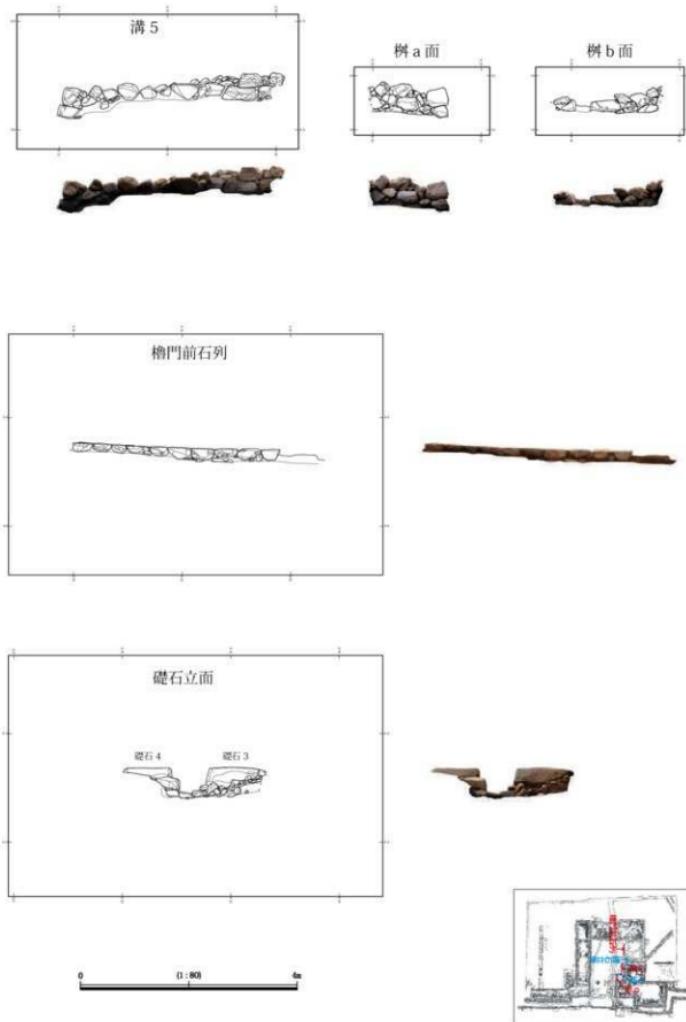
第98図 石垣立面・オルソ図①(V面・溝1a面・溝1b面)



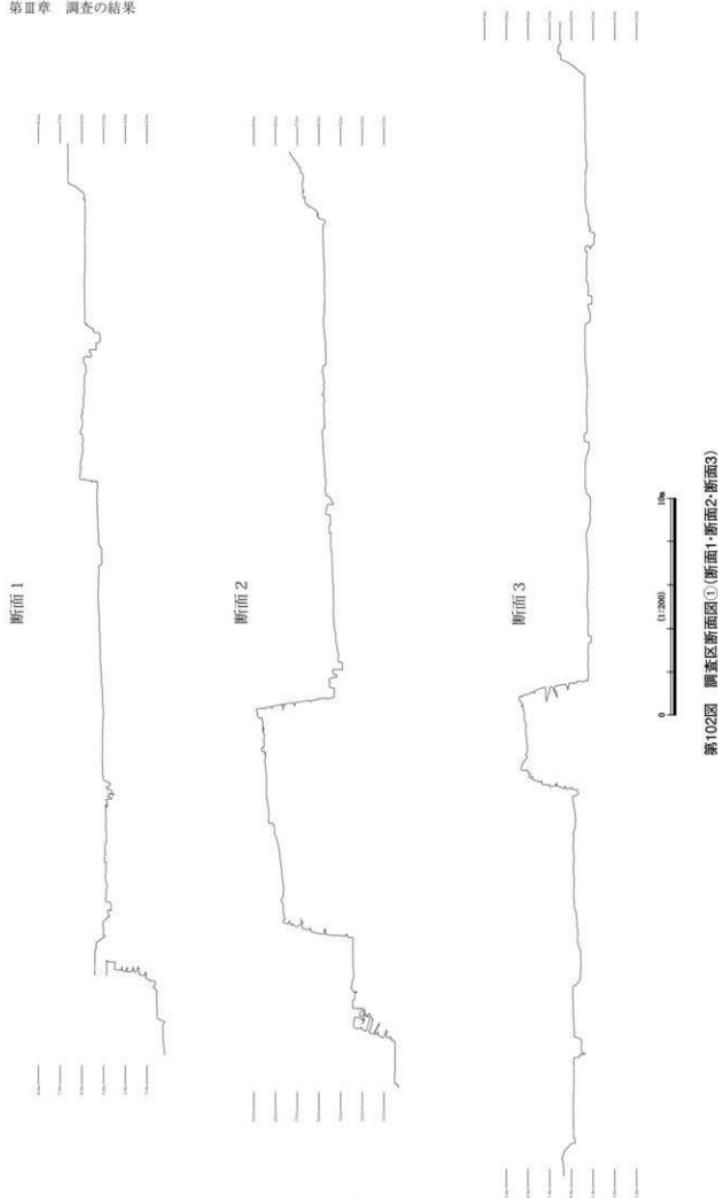
第99図 石垣立面・オルソ図(2)(溝2a面・溝2b面)



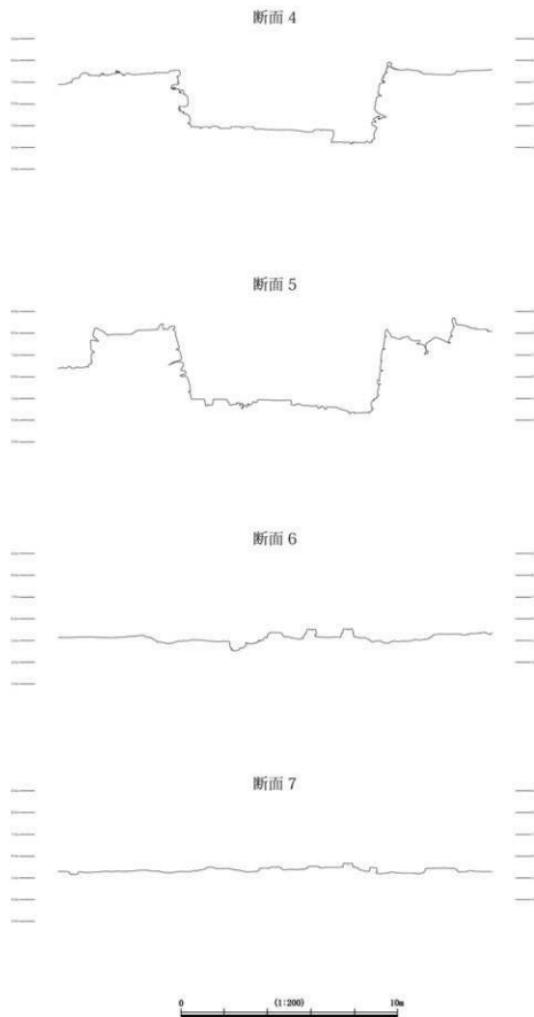
第100図 石垣立面・オルソ図⑩(溝3a面・溝3b面・溝4a面・溝4b面)



第101図 石垣立面・オルン園②(溝5・樹a面・樹b面・楕門前石列・礎石立面)

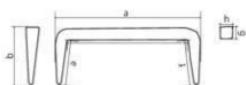


第102図 調査区断面図(1)(断面1・断面2・断面3)



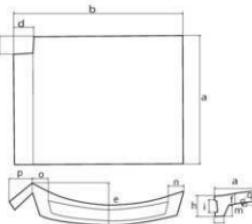
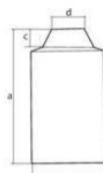
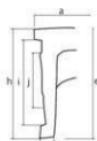
第103図 調査区断面図②(断面4・断面5・断面6・断面7)

凡例 遺物の計測方法



a : 全長、 b : 全幅、 c : 本体幅、 d : 頭長
e : 頭長 1、 f : 頭長 2、 g : 頭幅、 h : 頭厚、 i : 頭頭

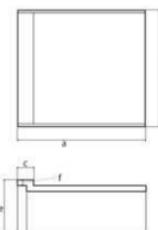
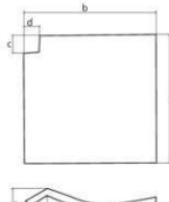
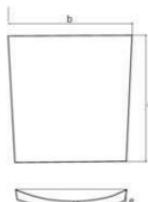
釘・鎚の計測方法



軒丸瓦

丸瓦

軒棟瓦



平瓦

棟瓦
瓦の計測方法

雁振瓦

第IV章 調査の結果

1 中ノ御門概略

第34次発掘調査範囲である中ノ御門周辺の状況を詳細に記述した資料として藩士岡島正義(1784～1859)著、文政12(1829)年成立とされる『鳥府誌』が挙げられる。城内の各施設や来歴等を細かに記しており、幕末期へと至る近世後期の状況を知ることが出来る。中ノ御門についての記述は下記の通りである。

「中の御門」

当城の大手の御門なり。是に架せる橋を、葱宝珠橋と云。御在府の間は閉切にて、御帰城に日より御開門あり。

・渡り橋

此御門の上に梁せる御橋なり。庚子の災に焼失し同九年御再建あり。

・單門

ギボシ橋にかかる處にある御門なり。回禄の後、其年に建てらる。

・枱形

享保の初年損壊を修せらる。因幡年代記に御城石垣普請と載たるは此等の事を云。

・幕番所

内の御門の見向に在り。三の道具を榜り、御譜代の輕卒出番して警守す。丸の内三御門共同様なり。

・御番人廬

幕番所と御門の間に在り。

2 復元検討資料

鳥取藩政資料として保存されている絵図の内、復元対象範囲の大手登城路を描いたもの多くは、修復願絵図であり、修理を目的とし石垣等の破損箇所を示すこれらの絵図は、復元資料とは性格が異なるため検討対象とはしなかった。残った絵図は5錦あり、さらに中ノ御門周辺について描かれたものには以下の3錦がある。

各絵図の解釈については鳥取県立博物館大鷦鷯一主任学芸員にご教示いただいた。

■第104図『鳥取御城内手配之圖』制作年代 天明3(1783)年～享和2(1802)年

城内の作事を担当する作事方が作成したと想定される絵図。5色に色分けした凡例は、うち4色で屋根の種類を区別し、残り1色で井戸を記しており、城内の小屋等の屋根の種類を把握し、新調や改修に備えるために描かれたと考えられる。城内の作事を担当する部局が、実際に使用するため作成した絵図の蓋然性が高く、その寸法についての記述内容は信憑性が高い。一方で、立体化して描かれた構建物記載は、建物の表記として記号化したものであり、その信憑性は低い。

■第105図『鳥取御城之圖』制作年代 寛延2(1749)年

幕府巡見使への説明用に、城内施設の守衛を担う城代が作成したとされる絵図。普請願図同様、藩絵師による作成とみられるが普請箇所等の表記はなく、寛延2年(1749)の幕府巡見使への受け答え内容を記した史料「御国目付衆寛延2巳年被來候節御両国之諸事尋并御答書抜也」(黒博藏)には、鳥取城の橋や門などの詳細な寸法が記されており、それらの内容と絵図の記述内容はほぼ一致する。これらのことから記述内容は信憑性が高い。一方で、建物記載等は、建物の表記として記号化したものであり、その信憑性は低い。

■第106図『島府久松山御城積間圖』制作年代 天保15(1844)年

鳥取藩の兵学者長沼長右衛門に師事した、藩士大坪市郎が天保15(1844)年に作成した絵図の写し。公用の絵図ではないが、建物の詳細な寸法が記載されているのが特徴的である。長沼が弘化2(1845)年に記した「当藩發院」という鳥取藩守衛の必要性を説く書物には、城内の櫓や門、蔵の内容量まで詳細に記されていることから、城内の様子を把握できる立場にあったことが分かり、この情報をもとに大坪が本絵図を作成したとみられる。記載の内容は、建造物については、平面図に特化して描かれ、建物規模等の寸法が記される。門類は基本的に扉の位置までを描くが、大戸と潜戸の表記については、城下に面した高麗門(北ノ御門、中ノ御門表門、南ノ御門表門)に限られる。

これらはそれぞれ、作事方、城代、兵学関係者が作成したものであり、いずれも建物や石垣について詳細な寸法が記されており、その信憑性は高いことから復元根拠として採用した。絵図毎の寸法比較は次の通りであり、事項では各施設の復元検討を行う。

表10 絵図記載寸法

	擬宝珠橋	中ノ御門表門	中ノ御門櫓門
104図	御橋渡拾八間 幅式間四尺袖七尺	御門幅四間高壹丈四寸	中御門御渡橋桁行五間武間 梁御門四間左右 石垣高壹丈武尺
105図	御橋渡拾九間半 同幅三間	御門幅四間高サ壹丈四尺	中渡り御橋五間ニ二間高サ二丈五尺 同御門四間左右石垣高サ壹丈
106図	キボシ御橋巾壹丈七尺一寸六歩		二間ニ五間

3 擬宝珠橋

(1)概要

『島府志』(1)惣宝珠橋

古名は欄干橋と云。中の御門より桜の馬場に架して当城の大手とす。されば、御領内諸方への道法も是より始ると云へり。又御国換の後、此橋修補せられけるに、宝珠の下に元和七年辛酉九月と銘す。此年号は備前侯御在城の間なり。余案に、是も初は北の御門の橋の名を移されたるものと見えたり。戦国の比には、城下の橋もみな他相なる造にして、往昔大手の橋斗に欄干の有ければ、欄干橋と称へる事にや。其後、元和中に及んで、初てぎぼしを粧はれ候しより、今の名に改りたるもの成へし。此御橋も享保庚子の災に焼落て、同八年再造せられたり。其前後にも毎々架替ありしかども、今斯に略す。(後略)

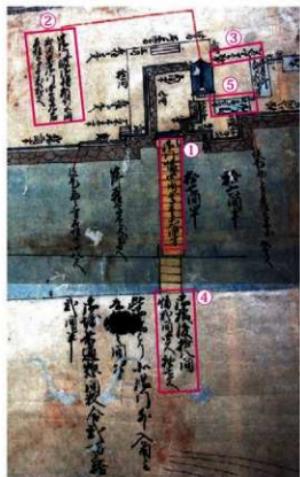
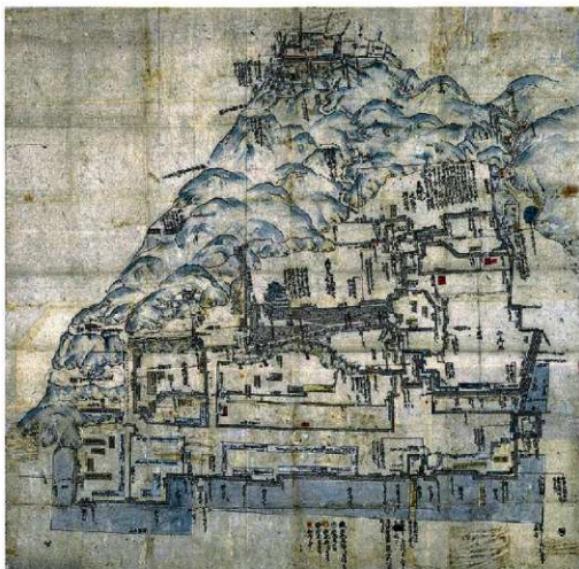
記述によると古くは欄干橋とよばれ、江戸時代以前から存在していたとし、擬宝珠には城主池田光政時代元和7(1621)年の銘があったとされたことから、この頃に擬宝珠橋と改名されたと考察している。また、享保5(1720)年の石黒大火で焼け落ち、3年後に再建されたことがわかる。「毎々架替あり」とあるのは修理を指しているとみられ、度々手が入った様子が伺える。現在確認できる架け替えや修繕の記録は表6の通りである。

元和7(1621)年に擬宝珠橋となり、寛永9(1632)年国替えで池田光仲が城主となったこの年の前後に補修された後、延宝6(1678)年までの57年間の記録こそ確認出来ないが、架け替えが行われた可能性

表11 摂宝珠橋及びその後の架橋等に関する記録

存続年	年月日	事項	出典等
摂宝珠橋	元和7年(1621)7月	摂宝珠橋が創建される。	鳥府志
	寛永9年(1632)	池田光仲が城主となる。これに前後し橋等が補修される	鳥取藩史
	延宝6年(1678)5月23日	架け替え	御用入日記 (藩主側近の業務日記)
	16		
	元禄7年(1694)6月6日	架け替え	部分古帳(御用入日記を項目別に纏めたもの)
	21		
	正徳5年(1715)9月2日	架け替え	部分古帳
	5		
	享保5年(1720)4月1日	享保大火により橋も焼失	控帳(家老日記)
	一		
26	享保8年(1723)	橋再建	鳥府志
25	寛延2年(1749)5月8日	架け替え	控帳
29	安永3年(1774)4月9日	架け替え	因府年表
近代木造橋	安永5年(1776)2月27日	修繕	目付日記
	寛政2年(1790)1月	修繕	鳥取藩史
	享和3年(1803)6月	架け替え	鳥取藩史
	明治元年(1868)4月14日	架け替え	目付日記
27~29	明治28~30年頃 (1895~1897)	摂宝珠橋から近代木造橋へ 架け替え	
39~41	昭和30年頃(1955)	近代木造橋が老朽化で通行禁止	
現代橋	昭和38年(1963)	現在のコンクリート橋へ架け替え	
52	平成27年(2015)現在		

*元和7年(1621)の創建当初から延宝6年(1678)までに間にも架け替えがあった可能性があるが、記録上では上記の架け替え、修繕記録が残っている。

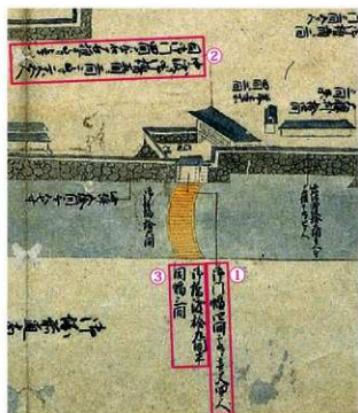


第104図 「鳥取御城内手配之圖」
(鳥取県立博物館所蔵)

制作年代

天明3年～享和2年(1783～1802)

- ①御門幅四間高壹丈四寸
- ②中御門渡御櫓桁行五間
式間梁御門四間左右
石垣高壹丈二尺
- ③石垣高壹丈二尺
- ④御橋渡拾八間
幅式間四尺袖七尺
- ⑤御門番
四間二二間半



第105図 「鳥取御城之圖」
(鳥取県立博物館所蔵)

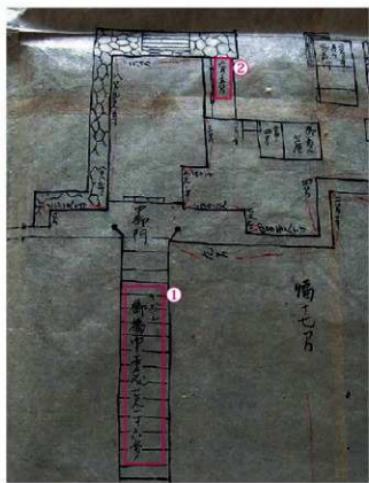
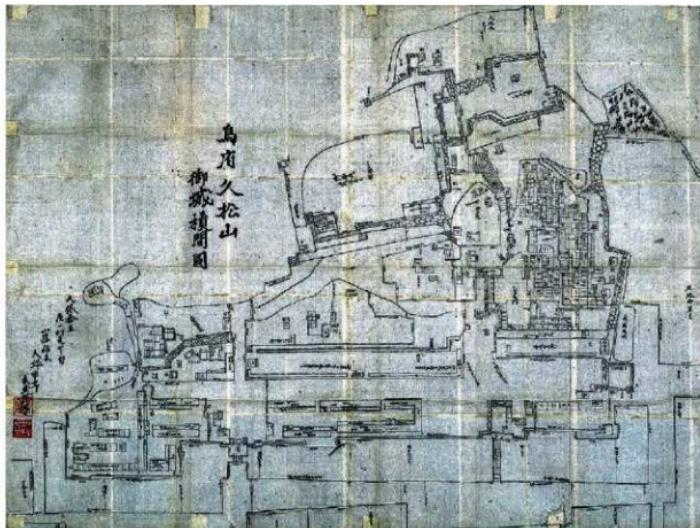
制作年代

寛延2年(1749)

①御門幅四間高サ壹丈四尺

②中渡リ御橋五間ニ二間高サ二丈五尺
同御門四間左右石垣高サ壹丈

③御橋渡拾九間半
同幅三間



第106図 『鳥府久松山御城積間圖』
(鳥取県立博物館所蔵)

制作年代
原図 天保15年(1844)の写し

- ①キボシ
御橋巾壱丈七尺一寸六步
②二間ニ五間

はある。その後は16年、21年の間隔で架け替えが行われた後、石黒大火にて焼失してしまうこととなる。再建後の架け替えについては、修繕を挟みつつ26年、25年、29年の間隔で行われており、大火前に比べ使用期間が若干長くなっているようである。19世紀に入ると享和3(1803)年の記録を最後に明治元(1868)年までの65年間分の記録は確認出来ていないが、期間から考えても1ないし2度の架け替えが想定される。

近代に入り、明治28～30年頃には近世來のアーチ状を呈す太鼓橋は破棄され、橋脚が均等に配され、上面が平坦な近代木造橋へと変更されることとなる。この最後の太鼓橋の存続期間もまた27～29年程度である。明治・大正・昭和と使用された近代木造橋も、使用期間が50年を超えた昭和30年代に入ると、老朽化が著しく、昭和38(1963)年の現コンクリート橋の架橋工事を待たずに渡橋困難となり、昭和30(1955)年通行禁止となっている。

このように、架け替え記録をみてみると、大火後についてはおおよそ30年以内の期間で改めていることがわかる。近代橋も同じような傾向であることから、35mにもなる摂宝珠橋に使用された材が耐用年数を超えて更新時期を迎える期間が30年程度であったとみられる。

記録上にみられる架け替えや修繕であるが、大火後の享保8(1723)年のみ再建という言葉が使用されている。再建後の架け替え期間が伸びていることからも、この再建された橋は、それまでのものとは大きく構造が変わった可能性がある。

(2)橋の変遷【第108・109図】

平成23年度に、堀内で実施した第28次発掘調査では昭和38(1963)年架橋の、コンクリート橋脚を除いた部分において、水面標高3.0mの下、約30cm付近以下から、木造橋期の橋脚群を69本検出した。この橋脚群は、横方向に3本1列を基本として、両端の橋脚が直立する幅3.8mの木造橋①(マツ材)と、両端がハの字形に内転びとなる幅5.5mの木造橋に大別でき、更に後者は材質によって木造橋②(クリ材)と木造橋③(マツ材)に分けることができた。木造橋①についてはコンクリート橋脚により2列を失うが、均等間隔に配置された5列立ちと想定され、脚が垂直に打ち込まれていることからも、明治28～30年頃に架橋された近代木造橋であることは明らかである。木造橋②・③については打ち込み断面観察により、③架橋後に堆積した層が②の打ち込みに沿って沈降していることが確認出来た。このことから木造橋③→木造橋②→木造橋①の順に構築されていることが判明した。

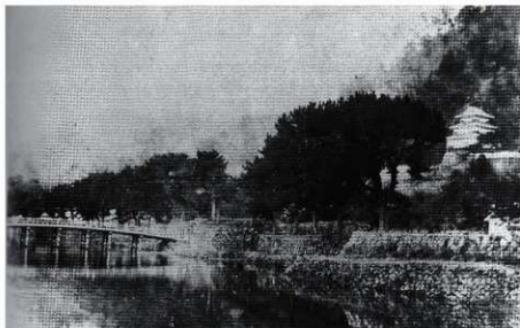
木造橋②・③の近世橋の違いは使用材と列構成にある。明治10年頃の解体途中の鳥取城を堀沿いに写した古写真をみると柱間隔の異なる橋があり、出土橋脚との比較にすると木造橋②と完全に一致したため、このクリ材橋が幕末期のものであることが特定でき、表6のとおり、写真中の橋は明治元(1868)年

表12 橋の詳細

橋	出土状況	材質	特徴
木造橋① (近代橋)	5列(現存3列) 柱上面高2.7m	マツ材 補助柱にスギ・ ヤナギ	両端の柱:直立 柱径:約35cm前後で均一 柱上面:切断された状況
木造橋② (摂宝珠橋)	7列(欠損列なし) 隣接地に補助柱多数 柱上面高2.3～2.35m	クリ材 ツガ材1本有	両端の柱:内転び 柱径:約30～40cm両端が太く、中央がやや細い 柱上面:ホゾもしくは痕跡有
木造橋③ (欄干橋か)	6列(現存4列) 柱上面高2.1～2.3m	全てマツ材	両端の柱:内転び 柱径:約30cm両端が太く、中央がやや細い 柱上面:切断された状況



①解体前の鳥取城
(明治時代初頭か)

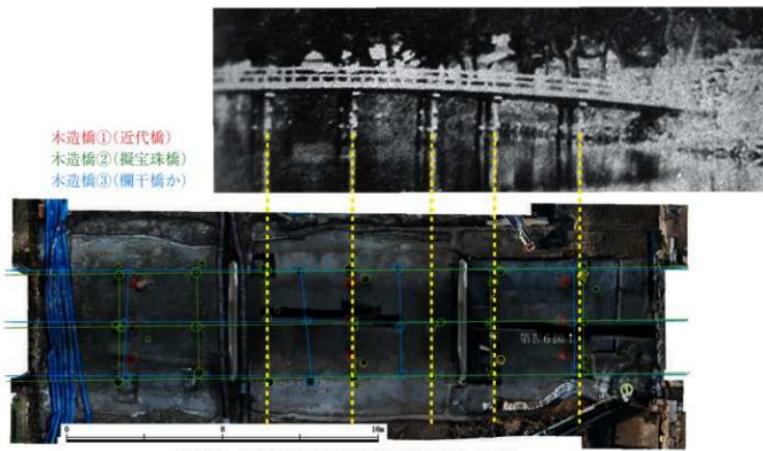


②解体中の鳥取城
(明治8～12年)
橋は明治初年架け替え
のもの



③通行禁止直前の近代木造橋
(昭和20年代後半)

第107図 橋周辺古写真



第108図 橋脚群と古写真との対比(オルソン図S=1/180)



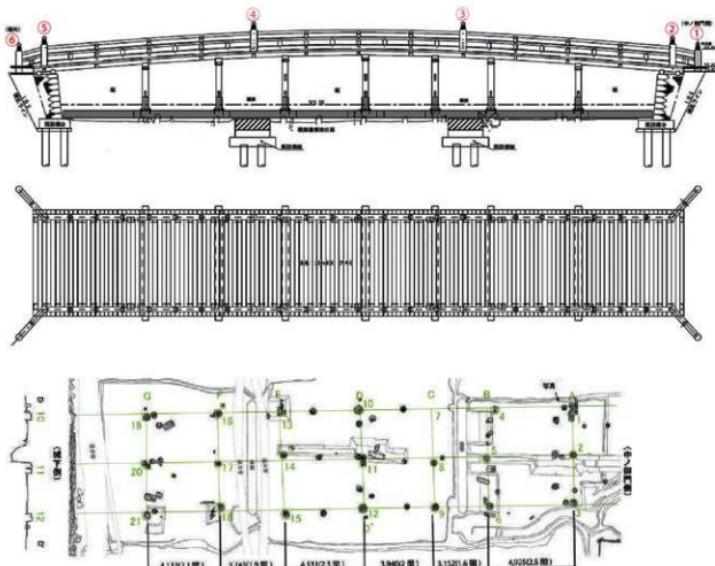
第109図 木造橋①～③の敷設状況

架橋であることも確認できることから、これを復元対象とした。後述するが、木造橋②は補助柱が多数あり、橋脚自体日々改修を受けていることが確認でき、かなりの期間使用されていたようである。この橋の築造時期は明らかではないが、唯一の築造記録である大火後の再建橋である可能性が考えられる。その場合木造橋③はそれ以前、近世前期に存在していた橋となる。

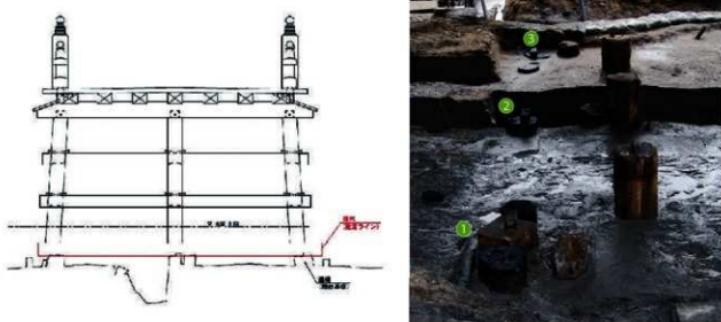
(3) 遺構による下部構造の検討

検出した木造橋②(摂宝珠橋) 橋脚にはホゾまたはその痕跡がある。ホゾの凸部は残りのよいもので高さ概ね5～9cmある。本来はこのホゾを利用して梁間方向連なる3本の橋脚を結合する横木が存在し、その上に古写真に写る橋脚が乗っていたと思われる。これは各柱が当初地中から橋梁まで一本であったものが、架け替え時に上部が除去され腐朽することのない水中の橋脚に横木を設けて、再利用した結果と想定した。このような事例は、松江城御廊下橋(現千鳥橋：島根県松江市)で確認されている。

これらを踏まえると、第110図の橋脚推定復元案に示すような形状をしていたものと想定される。近現代橋脚の施工等の影響を受けておらず、ホゾの残りの良い橋脚列(第110図 A, F, G)を検討すると、



第110図 木造橋②の検出位置と復元案



第111図 D-D' 断面の橋脚推定復元案とA-A' 列の柱検出状況

いずれも桁行方向にほぼ直交しており、橋脚は橋の桁行方向に直交して施行されたものと想定できる。列の両端の橋脚は約4度内向しハの字型に据えられたことを確認した。これは当初の柱が地中から橋梁まで一本の柱であったことと示すものと思われ、架け替えや修繕の際に上部を切断しホゾを作り、新たな橋脚を接いだと考えられる。脚の形状は角材のものもあるが、概ね断面円形のものが多数であり、寸法は、桁行方向の両端が中央よりやや太い傾向にあることが判明した。さらに、擬宝珠橋中央に近い橋脚ほど太い傾向にあることが判明した。

(4)絵図・古写真による上部構造の検討

古写真から判断すると、上部構造(高欄)の形式は、擬宝珠と親柱、架木、平桁、地覆、斗束、たたら束からなり、なかでも擬宝珠は、両岸の石垣上付近、端の付根と橋梁上の2ヶ所、さらには付根より「ハ」の字に開いた袖部の先端の計6ヶ所、左右合わせて12個が取り付けられていたことがわかる。これは、鳥取城の正式な登城路として築かれた、格式の高い橋であることを示している。

表6で行った記録の整理から、各絵図と橋の掛け替えを整理すると、絵図【1】(第104図)と絵図【2】(第105図)はいずれも、寛延2(1749)年5月8日に架け替わった擬宝珠橋について記し、絵図【3】(第106図)は享和3(1803)年6月に架け替わった擬宝珠橋について記していることがわかる。また、擬宝珠橋の絵図の記載や第107図①古写真の単写真解析の結果、以下のような数値が得られた。

(5)橋の規格

単写真解析の結果から、橋の全長は、「ハ」の字に開いた袖部を除いた第110図②-⑤間で35.460m(?)であることが判明した。また、第112図①のように高欄の延長ラインから親柱は外側に1.573mの位置に配置されていることが判明した。第105図に記載されている「袖七尺」と合わせると、袖部分の延長距離(⑤-⑥間)は1.423mとなり、その倍の2.846mと橋の全長35.460mを加えると、袖部を含めた①-⑥間の総延長は、38.306m(?)であることが判明した。

擬宝珠橋の全長を示した絵図としては、第104図と第105図がある。後者は「十八間(=35.460m)」とあり、後にわざわざ「袖七尺」と記載するため、袖部分を除いた橋の全長、すなわち、上述の(?)の実測値と考えた。検討の結果、35.46mで上述の(?)と矛盾しない結果であった。一方、第104図では「十九間半(=38.415m)」とのみの記載で、第105図と異なり袖に関する注記がない。よって、袖の端部までを計測したものと想定し、検討の結果、誤差10cm程度で、上述(?)と概ね矛盾のない結果が得られた。

橋の幅は、写真手前の袖部付根の擬宝珠頂部間で5.211m、堀中央よりの擬宝珠頂部間で5.163mであることが判明した。第105図は「二間四尺」(=5.151m)、第106図は「一丈七尺一寸六歩」(=5.199m)とほぼ近似する値を示す。これは上述の単写真解析の結果と矛盾しないものである。これに対して、第104図は「三間」(=5.909m)となり、第105と第106図の計測値と比較すると約0.75mの差が確認できる。これは第105・106図は高欄中央部からの計測値、第104図は床板端部で計測したことによる差であると想定した。

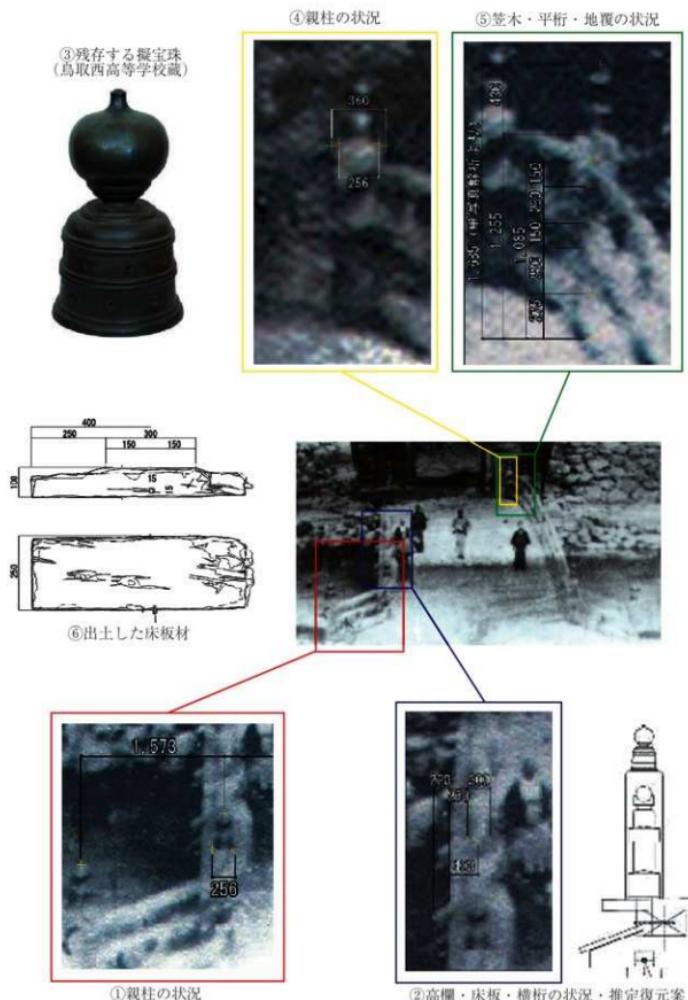
(6)部材寸法の検討【第112・113図】

①擬宝珠

古写真に写された12個の擬宝珠の内、1つは現存しており(第112図③)、実測寸法から高さが430mm、内法下径が256mmであることから、少なくとも親柱径は256mm以上であることが確実である。また、親柱の形状は、擬宝珠があることから丸柱である。

②床板材・地覆幅

発掘調査から、確實に床材と認定できる遺物を2点検出した。これらは、側面に合釘の痕跡が残っていることから床板材として認定できるもので、その内1点は、両端にかけて窪む、地覆の痕跡が明瞭に残っている(第112図⑥)。材質はいずれもクリ材で、厚さ概ね100mm(約三寸三分)で、幅は、250mm(約八寸三分)であることが判明した。また、地覆の痕跡から、地覆幅は300mm(約一尺)、地覆端から床板



端部までは、250mmである。

③親柱の径【第112図④】

親柱の径は、摂宝珠の径256mmを基準値として設定し、古写真①を用いて解析すると約360mm(約毫尺式寸)であることが判明した。

④笠木・平桁・地覆の厚み及び間隔【第112図⑤】

摂宝珠高さの実測値(430mm)と單写真解析から得られた親柱の復元高さを1,685mm(約五尺五寸)と設定し、笠木・平桁・地覆の厚み及び間隔の検討を行った。その結果、厚みにおいては、架木は約150mm(約五寸)、平桁は約150mm(約五寸)、地覆は約275mm(約九寸)となった。また、間隔としては、笠木と平桁の間で約230mm、平桁と地覆の間で約280mm、床板から架木上面までの高さは1,085mmとなった。

⑤束の幅および間隔の検討【第113図①】

中ノ御門側から3列目と5列目(第110図C・E列)の橋脚間隔を遺構調査から8,471mmとして古写真③にフィットし、束の幅および間隔を検討した結果、束の幅は、多少ばらつきがあるものの、概ね210mm(約七寸)、間隔については、多少ばらつきがあるものの、親柱間の束の本数および間隔の数(親柱間あたり4ヶ所(斗束))を確認することができた。中ノ御門側および堀外側の親柱間においても束の本数は同様であることが想定されることから、絵図より明らかとなつた橋の長さ拾八間を斗束の間隔数(4 × 3=12箇所)で除すと、斗束の間隔は1.5間(2,955mm)となる。

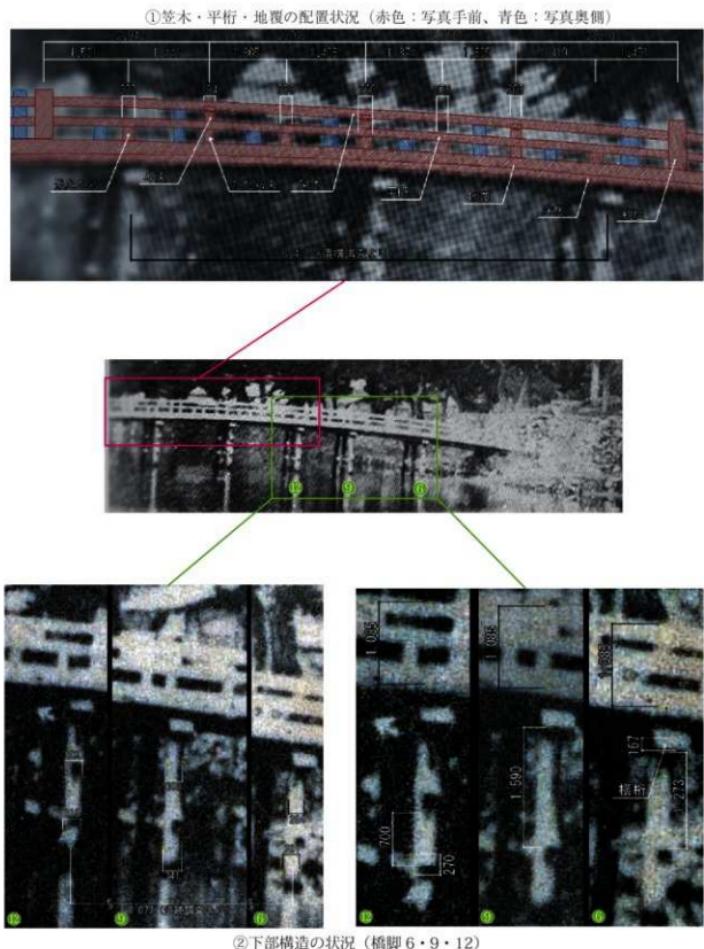
⑥貫、横桁の厚み【第113図②】

前項で求めた床板から笠木上面までの高さ1,085mmを用いて、貫、横桁の寸法を検討した結果、貫の巾は、約270mm(約九寸)、位置については、中ノ御門側から一列目(第110図A列)の橋脚で横桁下部から1,273mmの高さに、中ノ御門側から二本目の橋脚で横桁下部から1,590mmの高さに位置し、貫が2本ある橋脚では、上下の貫の間隔は700mmである。

横桁の木口の下部は鉛直に立ち上がり、その厚みは167mm(約五寸五分)であった。また、その上部は勾配がついていることが確認できるが、床板の影となっていることから部材寸法を確認することは困難であった。縱桁の厚みについても、横桁と同様に部材寸法を確認することは困難であった。

⑦橋脚、横桁の幅【第113図③】

中ノ御門側から1列目と3列目(第110図A・C列)の橋脚間隔を遺構調査から8,077mmとして古写真にフィットし、橋脚、横桁の巾を検討した結果、橋脚の巾は、下部が上部よりやや太く、各橋脚の中央部で概ね300mm(約毫尺)となることが判明した。横桁の幅は、木口境界面が不明瞭であることから、寸法を確認することは困難であった。



第113図 摺宝珠橋使用部材寸法2

4 中ノ御門表門

(1)概要

アスファルト面を除去し、掘り下げると約50cm下層で、概ね幕末期の遺構面が広がっている。調査では4石の柱礎石を確認しており、内訳は鏡柱礎石2石、袖柱礎石1石、寄掛け柱礎石1石、桁行鏡柱通りの礎石の内、正面右側の袖柱と寄掛け柱の礎石は、近代以降に開削された水路によって遺存していなかった。

また、鏡柱礎石の後方2.6m付近、幕末期登城路面から約20～30cm下層には、クリ材を用いた控柱本体が遺存していた。もとは掘立柱であったが、幕末期までには礎石立へと変更されていたようである。発掘調査においては、検出された一連の礎石は築造に伴う据え方(掘り方)が確認されておらず、創建時は礎石設置後に周辺地盤の造成が行われ、享保大火後も創建時の礎石をそのまま再利用したものと考えられる。

礎石2と礎石3の間のトレンチ内では水路遺構を確認していないことから、第119図の様にこの間に港戸が存在していたとみられ、近世の水路は、本来の礎石配置の想定位置や中ノ御門櫓門跡の状況から、礎石4とその南側に本来は存在した袖柱の間を通っていたと思われる。現位置から若干移動しているものの水路石列の一部とみられる石も遺存しており、礎石4脇を抜け、門に対し斜め方向に走り堀へ注いでいたとみられる。また、吐水部直下の堀内には、落ちてくる土砂を受けるための樹が設置されていることが確認されている。

(2)表門跡柱痕跡遺構【第114図】

①礎石

礎石は、桁行鏡柱通りで4石確認、鏡柱(礎石3・4)と脇柱(礎石2)の礎石天端には、柱底部に対応する角はぞ穴がみられ、礎石2と礎石3では、はぞ穴を開むように柱の痕跡らしき変色を、礎石3と礎石4では、柱の裾を巻いた根巻板に打ち付けた金属板と想定される錆の染みを確認した。詳細は以下の通りである。

■礎石1(寄掛け柱礎石)

礎石1は礎石2脇の石垣際の寄掛け柱の礎石で、石垣に接して据えられており、はぞ穴ではなく、表面には壁による加工痕がある。

■礎石2(袖柱礎石)

礎石2は向って左側の袖柱礎石である。礎石天端は壁で平滑に整えてあり、中央部には16×15cmのはぞ穴がある。

■礎石3(鏡柱礎石)

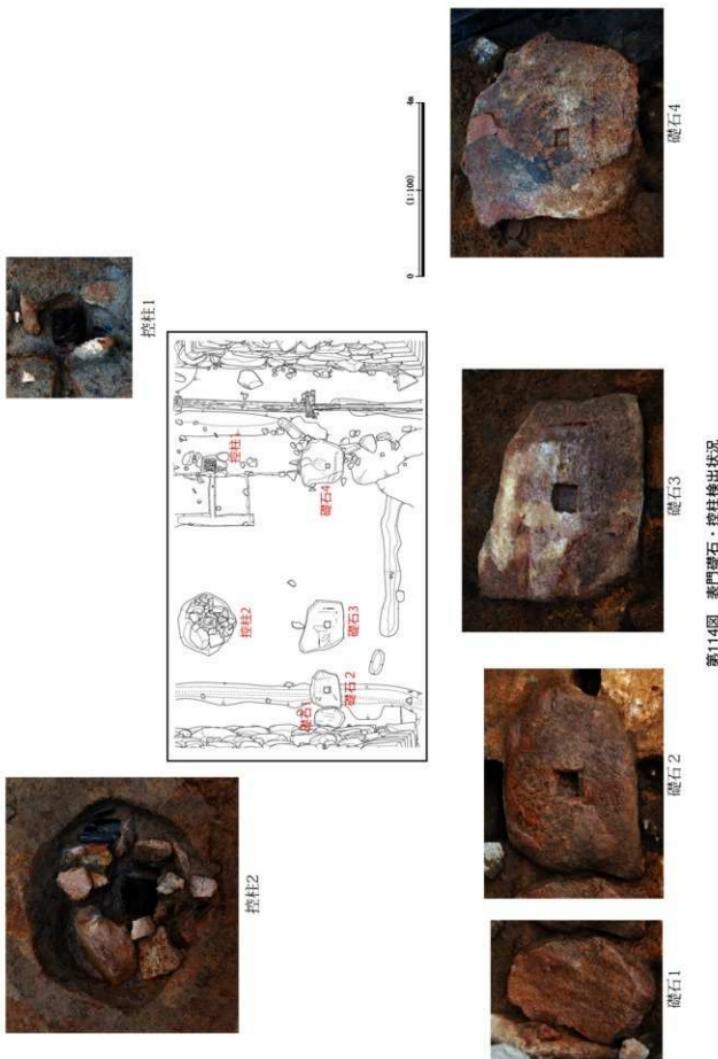
正面左側の鏡柱礎石である。大型の自然石を使用したものであるが、正面側は直線状に仕上げられ、上面には跡跡などを残さず、平滑に仕上げられている。上面には15cm四方のはぞ穴が加工されているほか、鏡柱と地覆の痕跡らしき幅47cm、長さ34cm以上の薄白い変色がみられ、その外側には、柱外面形状に沿った金属錆の染みが確認できる。柱側面から金属錆までは6.6cm程あり、根巻金物としては厚すぎるため、根巻板に打付けた金属板の錆であると推定される。

■礎石4(鏡柱礎石)

正面右側の鏡柱礎石であり、上面には礎石3よりやや小振りな9.5×11cmのはぞ穴と、金属錆による変色部分がみられる。柱の痕跡は見られないが、金属錆の状況から柱の配置は礎石3と同様であると考えられる。

②控柱跡

礎石3の後方、約2.6mで大型の円形土坑を確認した。土坑は、幕末期登城路面上層の近代の整地層



第114図 表門礎石・控柱検出状況

から掘り込まれており、近代における礎石の抜き取りと想定した。土坑内には多量の瓦片が廃棄されており、それらを除去すると方形状の石材が充填されており、その下に28cm四方の掘立柱が若干傾斜した状態で遺存していた。石材は、その状況から礎石の根固めとして入れられたもので、本来は上部に礎石が乗っていたとみられる。柱はその位置から、控柱本体とみられ、礎石立となる以前に使用された旧門柱である。さらに、この柱と対を成す位置、礎石4の後方約2.6m、幕末期登城路面の下層約30cmでもまた、控柱(クリ材)を確認した。近代水路により周辺を大きく搅乱されているため、根固め石材等は確認出来ないものの、柱上面が同じく低い位置にあることから、上部には礎石が据えられていた可能性は高いとみられる。このようにある時期、掘立柱式から礎石立式への構造変更があったようであるが、後述の中ノ御門構門では、柱の修理に際して各礎石がバラバラに追加されていることを勘案すると、左右同時の変更かどうかは定かではなく、或いは片側のみの施工であった可能性も考えられる。

(3)柱の配置・柱寸法の検討【第115図】

鏡柱の各礎石(礎石3・4)上面からは柱位置等を示す痕跡を確認し、鏡柱の寸法(1.5×1.13尺)、鏡柱の通りの軸線、控柱寸法(9寸角)、控柱の通りと鏡柱との柱間(8.7尺)が判明した。またこれらの事項や同形式の鳥取城内西坂下御門の部材寸法割付から、袖柱の寸法を、見付1.2尺、見込1.13尺と想定した。

①鏡柱の寸法

礎石3の上面には、47cm×34cm(1.5×1.13尺)の範囲にわたり薄白く変色しており、この範囲が鏡柱の痕跡であり、鏡柱の寸法を確認した。これは、西坂下御門の鏡柱寸法1.25×0.94尺と同じ比率となった。

②鏡柱の通り

礎石3の上面には、柱痕跡の外縁から66mmの箇所に平行して金属錆による褐色の染みがあり、厚めの根巻板に鉄釘を施工したであろう痕跡を確認した。同様の痕跡は礎石4でも確認しており、それぞれ南側の錆痕跡から鏡柱通りが判明した。

③控柱の寸法

出土した掘立の控柱位置と対面の控柱の位置はほぼ同じであり、享保大火焼失以前の形式が大火後の再建でも継承されていた可能性が高い。のことから控柱の寸法は大火後も同寸法であったと想定され、出土した掘立の控柱の寸法から9寸角の柱を想定した。

④控柱の通りと鏡柱との柱間

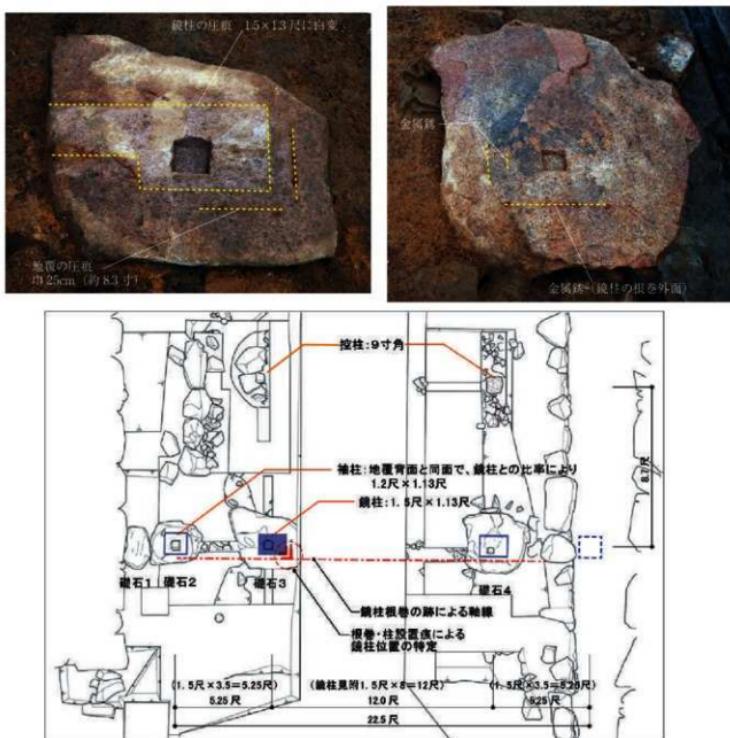
判明した鏡柱の寸法と検出された控柱痕跡から、控柱は、鏡柱通り真から短手の通りに位置することを確認し、鏡柱との柱間は、8.7尺であることが判明した。

⑤袖柱の寸法

礎石2と礎石3の間は、発掘調査などから、潜戸が想定され、礎石3上面に残る帯状の変色範囲は地覆の痕跡である。地覆背面と袖柱背面は一直線上にあるため同面であるとみられ、袖柱の前面(南面)は鏡柱の前面よりも突出しない。これらを含め鏡柱寸法の縦横の比率は西坂下御門と同じことから、西坂下御門の鏡柱・袖柱比率に倣い、見付1.2尺、見込1.13尺とした。

⑥柱の配置

西坂下御門の計画寸法は、鏡柱通りの桁行寸法を整数比で分割した位置に各柱を配置しているとみられ(1単位を鏡柱見附寸法とする)、同様の手法が適用されている可能性が考えられる。礎石上面の鏡柱痕跡から配置を検討すると、鏡柱真々寸法(礎石3～4)=12.0尺=1.5尺(鏡柱見附寸法)×8となり、鏡柱から袖柱の真々寸法(礎石2～3)についても同様に、1.5尺×7=10.5尺(礎石2～3真々寸法の2倍の値)、 $10.5\text{尺} \div 2 = 5.25\text{尺}$ (礎石2～3の柱間寸法)とした場合に遺構に対して矛盾なく柱配置が可能となることを確認した。



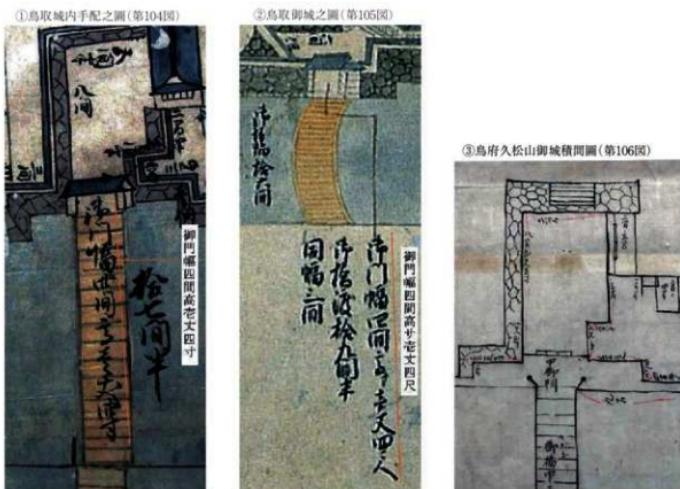
第115図 中ノ御門柱配置と寸法

(4)古写真・絵図による形式の検討【第116～118図】

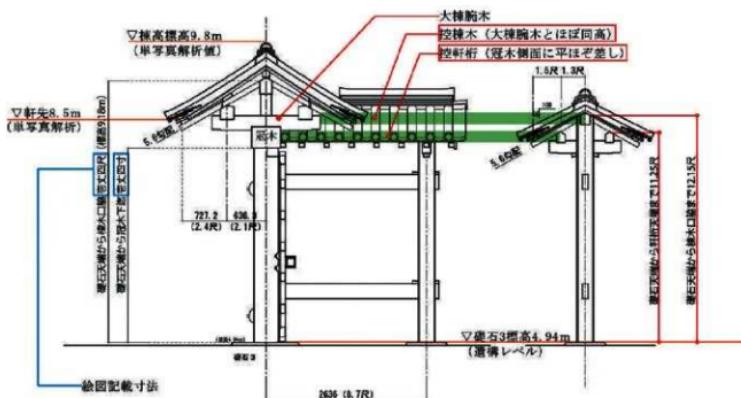
表門の古写真と絵図の記載から下記を確認・想定した。なお表門の形状寸法等を注記した絵図史料は、第116図の通りであり、先述の検討方針に従って根拠とした。検討結果から想定される表門断面形は第117図の通りである。

①門形式

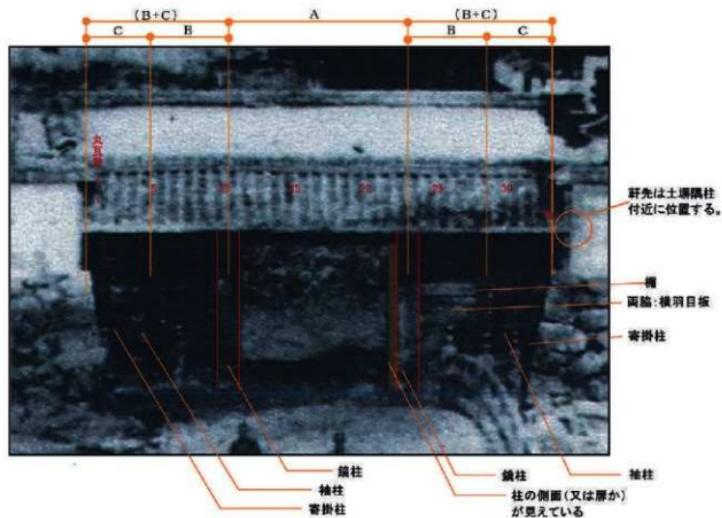
古写真から中ノ御門表門は鏡柱上に冠木をおさめる形式の高麗門である。これは、城内の復元門である西坂下御門と同形式である。大戸の詳細は確認できないが、写真右側の鏡柱と袖柱間に横羽目板と楣を確認した。第116図③から、表門は中央に2枚の大戸があり、正面に向かって左側に潜戸が描かれるが、これは、前述した発掘調査の検討と一致する。



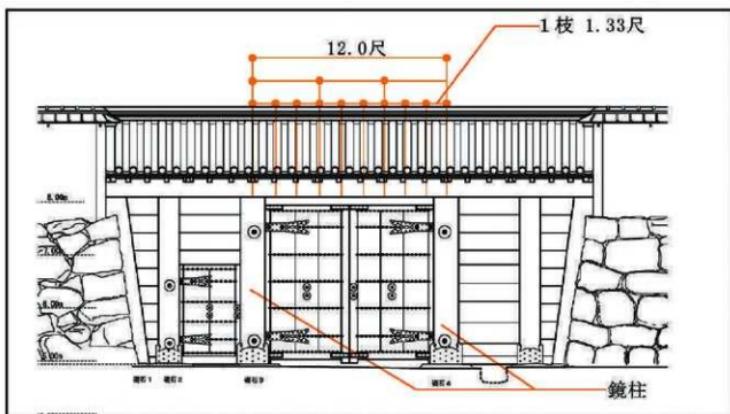
第116図 各絵図(部分)における表門の表記



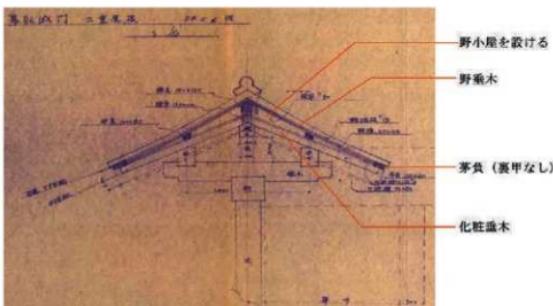
第117図 表門復元案(断面)



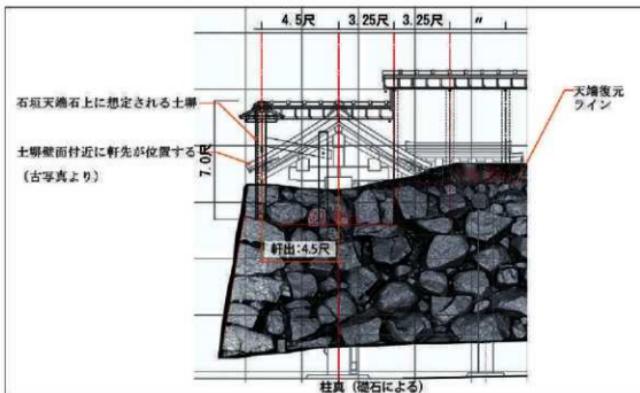
第118図 表門瓦配置状況



第119図 表門復元立面図



第120図 西坂下御門倒壊後の調査図



第121図 表門断面図

②柱配置

桁行鏡柱方向で確認した4つの礎石の柱配置は古写真の状況に一致する。また、向かって右側の袖柱、寄掛柱については失われているものの、古写真から、現存する袖柱と寄掛柱の礎石と同じ位置関係にあったことを確認した。よって、柱は左右対称に配置されたことが判明した。第104図①と②の記載から、門幅を共通して「四間」とするが、これは現存する両側石垣の内法寸法を示している。

③門高

古写真の単写真解析により、軒先高さ標高8.5m、棟高標高9.8mであることが判明した。第104図①では「表丈四寸」、②では「表丈四尺」と違いがあるが、これらは計測箇所の違いと考えられ、前者を礎石天端から棟木(口脇)まで、後者は、礎石天端から冠木下までの高さを計測したものと想定した。

④屋根瓦

古写真や出土瓦から、屋根は丸瓦数33と両側が平瓦からなる本瓦葺である。また、軒先は側面の土塀壁面とほぼ一致する。

(5)屋根形式の検討・軒割の検討【第119～第121図】

古写真による形式の検討から、門形式は昭和40年代まで城内に残存していた西坂下御門と同形式である。西坂下御門は桟瓦葺で、中ノ御門表門は本瓦葺であることを加味し、屋根の基本形式(軸部の構成、野小屋の有無)は西坂下御門に倣い、屋根荷重を考慮すべき部分(軒先、垂木・腕木の間隔)は現存する本瓦葺の類例を参考として検討した。

①屋根形式

西坂下御門倒壊後に実施した屋根調査図があり、これを参考に表門屋根の基本形式を決定した。西坂下御門の軒先は、茅負を垂木鼻先より前面に迫出して設け、裏甲は設げず、化粧垂木とは別に野垂木(野種)を設けて野小屋を形成している。西坂下御門は桟瓦葺であり、表門は古写真と出土瓦から本瓦葺であることが判明しており、軸部と野小屋の構成はこれに倣い、軒先や垂木間隔は本瓦葺の現存例に倣い復元する。

②軒出

古写真より、表門の軒先は両脇土塀壁面付近に位置しており、礎石と石垣の位置関係から軒出は4.5尺が想定された。桟瓦葺である西坂下御門より軒出が短いが、本瓦葺の現存高麗門事例との比較から、本瓦葺高麗門の軒出としては妥当であると判断した。

③枝割

西坂下御門は、柱間11.25尺を2分割して腕木を設け、垂木は1枝を1.125尺とするが、桟瓦葺であることから、本瓦の類例を参考として決定した。越路城に現存する高麗門(6棟)は、軒を素木とし、冠木の取方にも中ノ御門表門と同様の形式であり、中ノ御門表門と同形式である。これらは、鏡柱真と柱間を2分割(柱間8～10尺程度の場合)または3分割(柱間12尺程度の場合)する位置に腕木を配置し、鏡柱間で垂木間が1枝1.2～1.6尺程度の等間となるように割付けている。中ノ御門表門ではこの傾向を参考にして、腕木は鏡柱間12.0尺を3分割する位置に配置し、垂木枝割は1.33尺間隔を想定した。

5 中ノ御門渡櫓の復元検討

(1)中ノ御門渡櫓門跡の発掘調査

現地盤面から約100cm下層で、概ね幕末期と想定される登城路面と柱痕跡を示す礎石(次項で詳述)、水路等を確認した。礎石は、櫓門の渡櫓礎石であり、8石全てを確認、詳細は第122図の通りであり検出順に礎石1～8とした。礎石3と礎石4の間で水路遺構を確認した。水路遺構は、櫓門背面で2方向へ分岐し、一方は軒先の下に連絡しており、雨落溝を兼ねていたと思われる。他方は門に対し45度の角度を持ち城内側へと続き、登城路を区画する側溝であったと考えられる。礎石6、7、2の北東側では、明治12～22年までに解体された石垣遺構の下部石列を確認した。

(2)櫓門礎石【第122図】

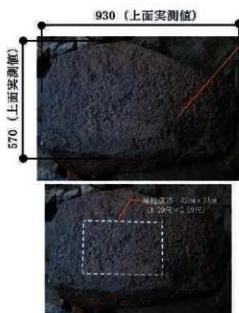
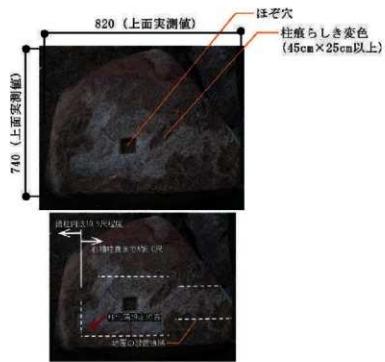
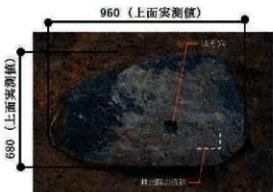
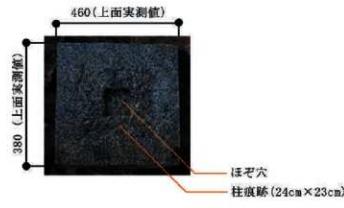
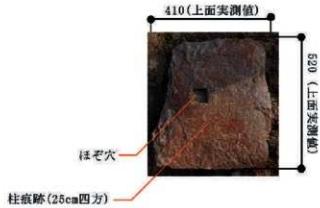
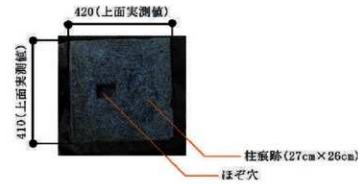
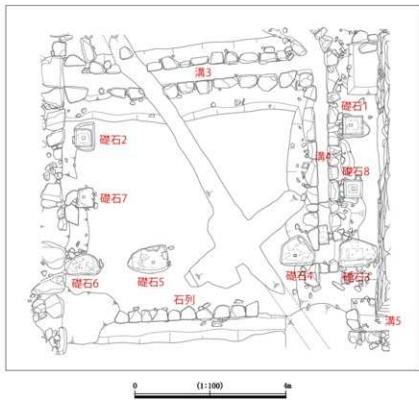
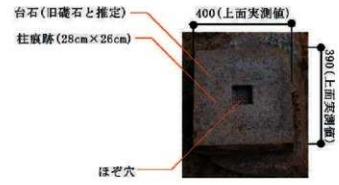
渡櫓の礎石全てを確認した。礎石4・5は鏡柱礎石、礎石3・6は脇柱・寄掛柱礎石、礎石1・2が背面の控柱礎石、礎石4・5が中間の控柱礎石として用いられた礎石であると想定でき、礎石1・2・3・4・7・8では柱痕跡を、さらに礎石5では、一ヶ所において柱出隅の痕跡を確認した。

■礎石1(控柱礎石)

門へ向って右奥の控柱礎石である。旧礎石とみられる平面不定形の上面におかれた台形の切石である。上面のはぞ穴は左側に寄った位置に穿かれており、その周りには27×26cmの柱痕跡が残る。

■礎石2(控柱礎石)

礎石1と対面に位置する控柱礎石である。礎石1同様に、旧礎石上面に台形の切石を置く。上面のはぞ穴の周りには28×26cmの柱痕跡が残る。



第122図 橋門礎石検出状況

■礎石3(脇柱・寄掛柱礎石)

正面右側の脇柱、寄掛柱に対応する礎石である。上面はほぼ全範囲で盤による精緻な加工が施されている。また、上面には柱痕とみられる $42 \times 27\text{cm}$ の変色部分を確認した。その位置から脇柱の痕跡であると考えられる。

■礎石4(鏡柱礎石)

正面右側で右側の鏡柱礎石である。上面は、平滑な自然面を利用しながら、盤による精緻な加工も施し平滑面を形成する。上面のはぞ穴の周りには鏡柱痕とみられる $45 \times 25\text{cm}$ 以上の横長の変色部分を確認した。また、柱痕より右方、礎石3へ向かい地覆とみられる、変色部分も残る。

■礎石5(鏡柱礎石)

正面左側の鏡柱に対応する礎石である。上面は、礎石4と同様に、平滑な自然面を利用しながら、盤による精緻な加工を施し、平滑面を形成する。はぞ穴のほか、一ヶ所において柱出隅の痕跡を確認した。

■礎石6(脇柱・寄掛柱礎石)

正面右側の脇柱、寄掛柱に対応する礎石である。上面にはほぼ全面で盤による精緻な加工がある。はぞ穴はなく、柱の痕跡は確認できない。

■礎石7(控柱礎石)

礎石2と礎石6との間に位置する控柱の礎石であり、左側の一部を欠損している。上面には、平滑な自然面を利用しながら、盤による加工によって平滑面を形成する。上面のはぞ穴の周囲には 25cm 四方の柱痕跡が残る。

■礎石8(控柱礎石)

礎石1と礎石3との間に位置する控柱の礎石である。旧礎石上面におかれた台形の切石である。上面のはぞ穴の周囲には $24 \times 23\text{cm}$ の柱痕跡を確認した。

(3)柱軸線・寸法の検討【第123～125図】

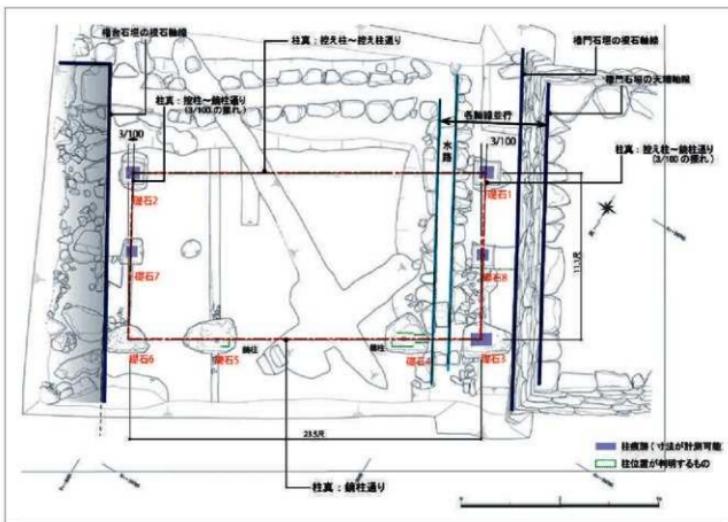
検出した8つの礎石の内、6つの礎石(礎石1・2・3・4・7・8)上面からは柱位置を示す痕跡を確認し、桁行方向の軸線、梁間方向の軸線を確認した。また、下表のように各柱の痕跡寸法から復元計画寸法を想定した。

①-1 桁行方向の軸線

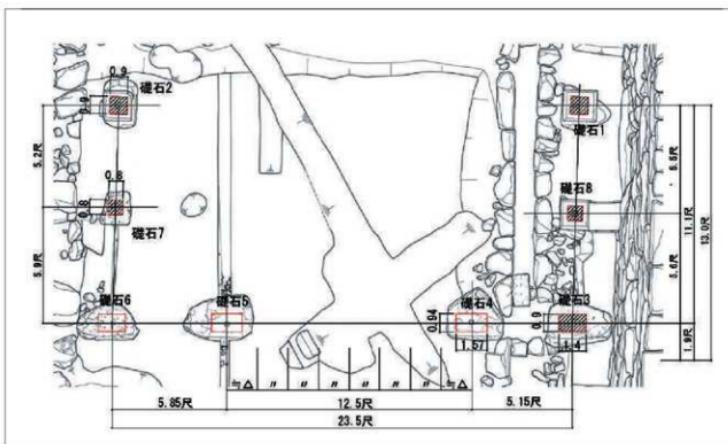
桁行鏡柱通りの内、礎石3、礎石4、礎石5の柱痕跡から、桁行鏡柱通りの軸線を確認した。また、

表13 柱寸法

	礎石名	実測値		復元計画値
		cm	尺換算	
鏡柱	礎石4	($45 \times 25\text{cm}$)以上	(1.5×0.5 尺)以上	1.57×0.94 尺
	礎石5	—	—	
袖柱	礎石3	$42 \times 27\text{cm}$	1.39×0.89 尺	1.4×0.9 尺
	礎石6	—	—	
背面控柱	礎石1	$27 \times 26\text{cm}$	0.89×0.86 尺	0.9×0.9 尺
	礎石2	$28 \times 26\text{cm}$	0.92×0.86 尺	
中間控柱	礎石7	$25 \times 25\text{cm}$	0.83×0.83 尺	0.8×0.8 尺
	礎石8	$24 \times 23\text{cm}$	0.79×0.76 尺	



第123図 橋門柱軸線



第124図 橋門柱寸法

背面控柱通りの両礎石は、いずれも梁間方向の柱痕跡真にはぞ穴があり、これを結ぶと桁行背面控柱通りの軸線が確認できた。なお、桁行鏡柱通りと桁行背面控柱通りの軸線は平行であり、一般的な事例とも矛盾しないことが確認できた。

①-2 梁間方向の軸線

柱痕跡の状況から、柱痕跡梁間方向の軸線は、桁行方向の軸線とは矩手にならず、やや振れていますことを確認した。そのうち、礎石3・礎石8・礎石1の通りは、最寄りの水路、櫓門石垣の根石軸線・天端線と平行であり、鏡柱通りに対して3/100の振れ角となった。また、礎石6・礎石7・礎石2の通りは、最寄りの石垣根石軸線と平行で、鏡柱通りに対して3/100の振れ角となった。

②-1 鏡柱(礎石4・礎石5)の寸法

礎石4は、柱痕跡から45×25cm以上、すなわち見込約1.5尺以上、見附約0.8尺以上であることを確認した。後述するように城内最大規模の太鼓御門鏡柱の想定寸法が、見附1.7尺、見込1.19尺であること、袖柱である礎石3の柱痕跡は、見附1.4尺、見込0.9尺である。これらのことから、袖柱寸法≤鏡柱寸法<太鼓御門鏡柱想定寸法、かつ各柱間は鏡柱見附寸法の等倍とする計画手法から、礎石4を見附1.57尺、見込0.94尺と想定し、礎石5も同様であると解釈した。

②-2 袖柱(礎石3・礎石6)の寸法

礎石3の柱痕跡は、見附1.4尺、見込0.9尺であることを確認し、礎石6も同様であると想定した。

②-3 背面の控柱(礎石1・礎石2)、中間の控柱(礎石7・礎石8)の寸法

背面および中間の控柱については、控柱特有の大面取りや痕跡辺縁の垂み等を考慮し、背面控柱を0.9尺角、中間控柱は0.8尺角と想定した。

(4)古写真・絵図による形式の検討【第126図】

櫓門の古写真と絵図の記載から下記を確認、想定した。なお櫓門の形状寸法等を注記した絵図史料は、第104～106図があり、IV-3で検討した根拠方針に従って根拠とした。

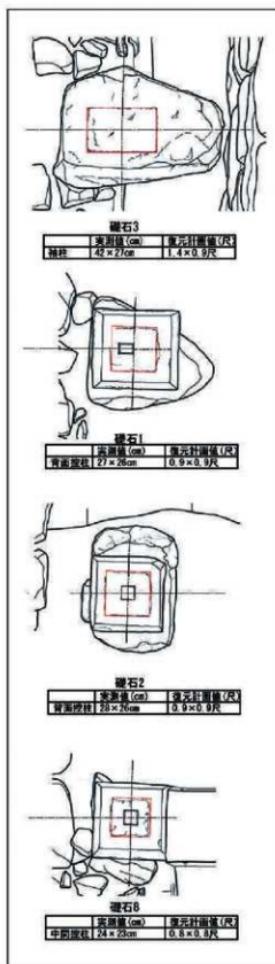
①門形式

古写真から中ノ御門櫓門は切妻である。妻面には、破風、蟻羽の掛瓦が確認でき、蟻羽には蓑甲がある様子が分かり、出土瓦からも本瓦葺であったことを確認した。

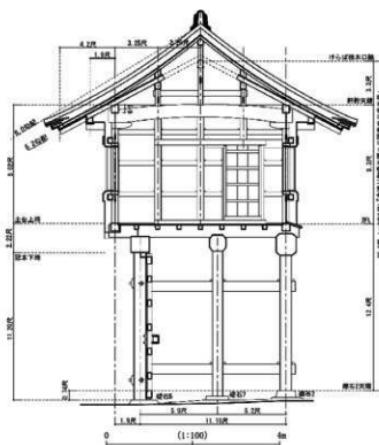
第106図から潜戸の表記はないが、門へ向かい右手の礎石3・4の間に水路があるため、前述の通り礎石5・6の間に潜戸があったと想定した。

②門高

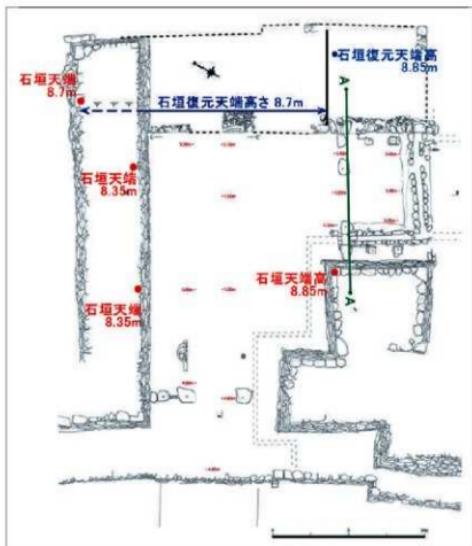
古写真の単写真解説により、棟高は標高14.6mであること



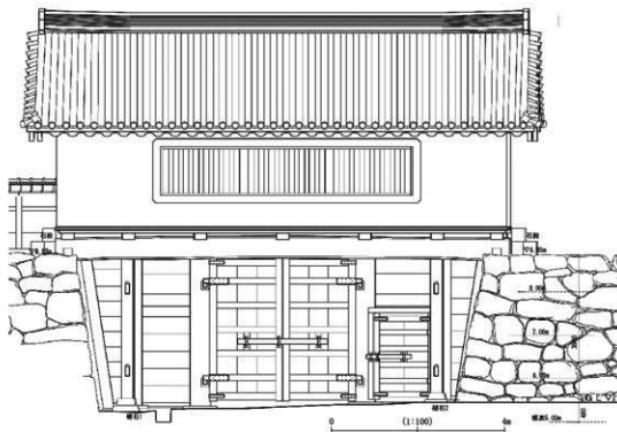
第125図 櫓門柱寸法



第126図 檜門復元案（断面）



第127図 石垣天端標高



第128図 橋門復元案(正面)

が判明した。第105図中の表記②では、渡槽の高さを2丈5尺(7.575m)と記載する。この高さは、礎石天端面から軒裏の見上げで最も高い部分となる棟木口脇までの高さを計測したものと考えられ、礎石2(標高5.68m)を実測位置とした場合、これに2丈5尺を足した標高値約13.26mを測定位置として想定した。

以上のことから、軒高と棟木口脇までの差は、1.3mである。これは、西坂下御門同様に屋根が野垂木を設ける形式であることを示すと想定した。

③ 橋部平面規模

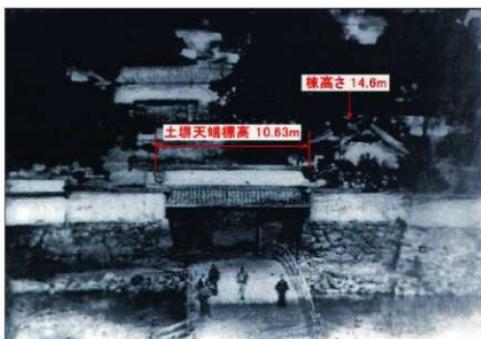
第104図表記②「中御門御渡槽桁行五間 武間梁御門四間左右 石垣高さ一丈尺」、第105図表記②「中渡り御橋五間ニ二間高サ二丈五尺 同御門四間左右石垣高サ一丈」、第106図表記②「二間ニ五間」といはずれも上階部の規模は一致しており、桁行5間、梁間2間であることを確認した。

(5)古写真・絵図による石垣等の検討

橋門を検討するにあたり、周辺の石垣等について古写真と絵図の記載から下記を確認、想定した。

① 構形石垣の高さ(第127図)

古写真に写る解体石垣に



第129図 古写真解析値

は、一部撤去中に撮影されたような痕跡があるが、渡槽台と考えられる石垣隅石を確認した。その天端高は、対面の石垣天端標高8.85mと同一と思定した。北側の枠型石垣のし字部は、遺存する石垣等から8.35m、8.70mの段を生じることを確認した。渡槽の石垣高さを記載した絵図には前掲の第104図表記②「中御門御渡槽桁行五間 式間梁御門四間左右 石垣高壹丈弐尺」と、第105図表記②「中渡り御槽五間ニ二間高サニ丈五尺 同御門四間左右石垣高サ壹丈」との2種類があるが、計測位置による相違に起因した寸法差と想定した(第128図参照)。

②枠形奥壁上の土塀高さ【第129図】

單写真解析を実施した結果、土塀は傾斜なく平坦であり、高さは標高10.63mであることを確認した。

※なお、1~4項の復元検討で用いた数値や解釈は、現時点のものであり、今後の検討により変更となる可能性がある。

6 第1調査区第1トレンチについて

トレンチ調査から古段階の鳥取城の姿の一部が明らかとなった。C・D区で確認した標高4.7~4.8mの城郭形成以前の層と考えられる粘質土層と標高5.8~5.9m前後に広がる幕末期路盤面との間は何層もの整地層で構成されており、近世期に順次嵩上げされていった様子が伺える。層位を大きく分けると以下の通りである。

表14 層位一覧

	層位	標高	特徴
①	1・30・52・81	5.7~5.9m	幕末期露盤面、18世紀後半以降のものが多く上部では幕末に近い時期の遺物が増える
②	31・(67)	5.7m	黄砂礫
③	33	5.6m前後	大規模焼土層、古手の瓦多數
④	3・(63・64)	5.5~5.6m	大規模整地層、17世紀前半の遺物
⑤	57・礎石・石列	5.5m	建物跡、④の整地までには破棄
⑥	41・50・51・93	5.2~5.3m	下層焼土層、周辺併せ17世紀前半の遺物 埋甕の破棄も同時か
⑦	45・46・99	5.2m	初期整地層、建物跡か 周辺併せ17世紀前半代の遺物
⑧	21・98	4.7~4.8m	上面は最初期の路盤面か、城郭形成以前の層

上記の他に、⑤~⑧の間は他にも細かい整地が複数も存在するが①~④のような明確なまとまりではなく、A区においては37・39層と38・40層とで1単位の整地が想定されるがC・D区との接続関係が不明である。整地の状況をみると①は幕末期登城路面を構成する層であり、20cm程の厚さを持つ。堀側から山側に向かって30→52→81層の順に前層を覆う形で整地されている状況が確認できるが、同一工程であるのか時期差であるのかは判然としない。しかし、第104図の絵図の記載通り18世紀末頃のC面石垣の高さは九尺であり、幕末期面とした調査区内床面からの高さと一致していることから、この時期まではC面石垣上半部とともに現状に近い状況となっていた可能性が高い。

②とした面は明確な整地跡である。黄色系の砂礫を薄く敷き固めており上面標高はほぼ水平であり、直下の大規模焼土層を覆い隠すような様相を呈している。遺物も少なく時期を特定することは困難であ

るが、焼土を覆う目的であれば、33層とそれほど時期差はないと推定される。

③は大規模な焼土層である。黒変した土と共に多量の炭化物や被熱による変形・橙変した瓦片が厚く堆積しており、これほどの廃棄物を出す原因としては大規模な火災が想定される。一方、直下の整地層である④面に明確な被熱痕は認められない。他地点で検出される大規模焼土層には同じく黒変したとみられる硬化した路盤面が伴うことから、堆積物は建物がこの場で焼け落ちたものではなく、周辺からの集積物である可能性がある。記録上当地に建物が確認できるのは元和3(1617)年の池田光政入国直後からの17世紀前半代の頃である。光政は、関ヶ原の合戦後6万石で入城した池田長吉・長幸父子に替わり姫路より32万石の石高で城主となっており、国替え直後は家臣団の屋敷地確保にも苦慮しており、一部を内堀内に居住させながら城下の大整備を実施し、整備の進展とともに徐々に城外へと転出して行く。さらに光政と替わり寛永9(1632)年に岡山より入った池田光仲も整備は進んだとみられる。17世紀前半代を描いた絵図(第8図)をみると周辺には建物が連続しており、当地付近は「御馬屋」が存在していたことがわかる。瓦片は多量に出土するが、陶磁器類は一片も出土していないため正確な時期を判断するのは難しいが、出土瓦は蝶文C類の軒丸瓦の他に17世紀代に多い器壁の厚い瓦が多くみられ全体的に古手の様相を呈すことから、焼土は享保5(1720)年に城をほぼ全焼させた石黒大火に由来する可能性が高いと言える。

④は焼土層の直下にあり写真図版の通りトレニチ全面に亘る整地層で、D区の石垣前で上下に若干蛇行する。②と同じく山上にみられる黄色系の砂礫を厚みを持ちしっかりと敷いており、大規模な整地であったことがわかる。⑤の礎石や石列を覆っていることから、これらの廃絶後に敷かれたものである。D区ではA面石垣の最下段付近へ統いていることから、石垣構築時の路盤であった可能性がある。出土遺物は一部下層との混在する可能性もあるが標高5.4~5.5m付近に掘えられた石垣は、石設置面の標高から城郭形成当初には存在しておらず、ある時点で追加して構築されており、裏込め内の出土遺物は~17世紀半ば頃を指している。

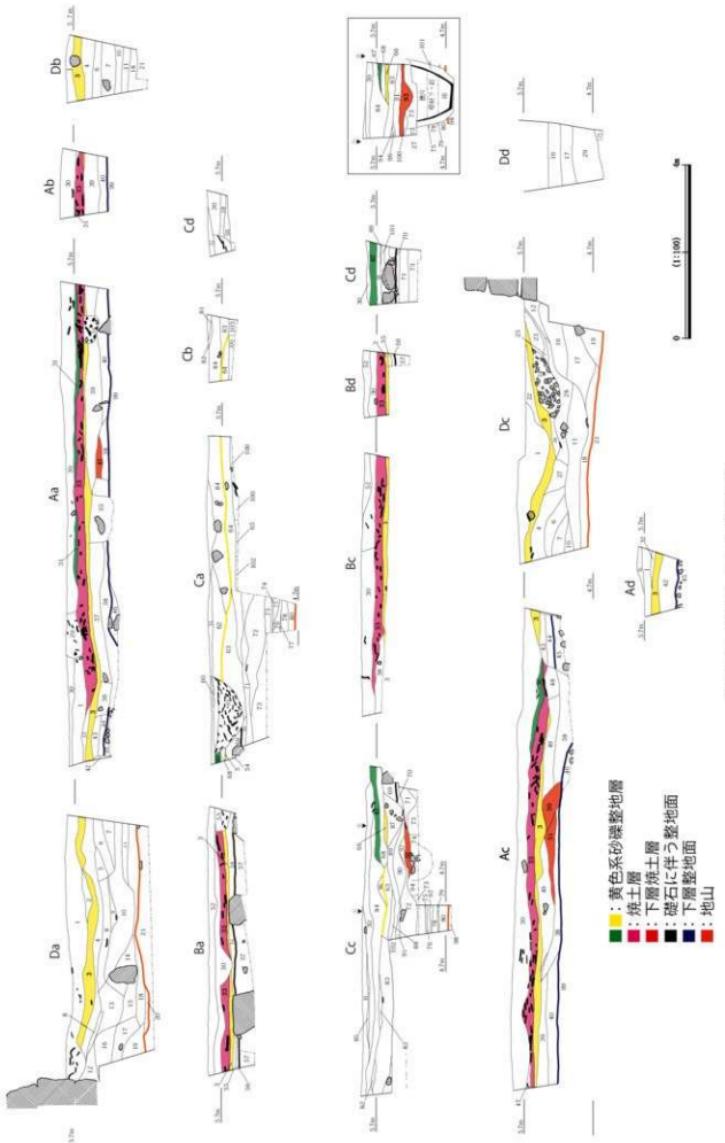
⑤はB区にみられる礎石・石列とそれに伴う基盤面となる57層である。礎石を伴うため明確な面が統一していたと思われるが、A区側との接続関係は不明であり、38・40層へ続く可能性がある。埋置した礎石立であることから、それなりの施設であったことが伺え、先述の17世紀前半代の建物の可能性がある。

⑥はもう一つの焼土層である。③程大規模ではなく面的な広がりもないが同じ標高で散見される。C区の埋甕付近では厚く堆積しており、甕内部は全て炭片・焼土であり、甕自体が火災により破壊され、破棄された様相を呈している。慶長期ころの備前甕の掘り方には中国製の磁器片が散在する。当層及び上下層からの出土遺物をみて17世紀前半でも早い時期のものがほとんどである。

⑦は礎群を伴う整地層である。標高5.2m付近とかなり低い位置にあり、初期の路盤面であったとみられる。礎群は2方に分かれており、性格は分らないが、天球丸検出のものと同様建物の基礎部分である可能性が考えられる。

⑧は層自体は城郭形成以前であるが、上面は硬化していることから最初期の路盤面であったとみられる。硬化面上からは磁器片も出るが、層は粘質土であり遺物の出土はない。

以上のように、各層をみると③の大規模焼土層を挟み状況が大きく変わる。上層の出土遺物は18世紀後半以降幕末期にかけてのものであるが、下層の3層以下は17世紀の前半代でも古いものが多くを占めており、⑧の最初期の頃より短期間で80cm程度を埋め立てたこととなる。間には⑤の礎石建物の構築・廃絶もあるため、短期間内での慌しい区画整理が実施されたようである。



第130図 第1トレーンチ土層堆積状況

写真図版



鳥取城跡と久松山（南から）



調査区遠景(南西より)



調査区全景(直上より)

図版 2



第1調査区遠景(北より)



第1調査区遠景(北西より)



Tr-1A 区 31(整地)層・33(焼土)層
検出状況[北西から]



Tr-1A 区 33(焼土)層検出状況[北西から]



Tr-1A 区 3(整地)層検出状況[北西から]



Tr-1A 区 3層下掘り下げ状況[北西から]

第 1 調査区

図版 4



Tr-1B 区 33(焼土)層検出状況〔北西から〕



Tr-1B 区 41・50・51(下層焼土)層検出状況〔北西から〕



Tr-1B 区 38・40 層付近検出状況〔北西から〕



Tr-1B 区 33(焼土)検出状況〔北西から〕



Tr-1B 区 磁器(第27図15)出土状況〔南東から〕



Tr-1B 区 a面 土層断面左〔南東から〕



Tr-1B 区 a面 土層断面右〔南東から〕



Tr-1B区33(焼土)層検出状況[北西から]



Tr-1B区3(整地)層検出状況[北西から]



Tr-1B区礎石検出状況[北西から]



Tr-1B区a面土層断面[南東から]

第1調査区

図版 6



Tr-1C 区 63・64層付近検出状況〔北西から〕



Tr-1C 区 72(木製品堆積)層検出状況〔北西から〕



Tr-1C 区埋甕検出状況〔北西から〕



Tr-1C 区完掘状況〔北西から〕



Tr-1C 区 a面土層断面左〔南東から〕



Tr-1C 区 a面土層断面右〔北西から〕

第 1 調査区



Tr-1D 区 5(焼土)層検出状況〔北西から〕



Tr-1D 区 d 面立面〔北東から〕



Tr-1D 区 d 面立面〔南東から〕



Tr-1D 区近代溝完掘状況〔北東から〕



Tr-1D 区溝1土層断面〔南東から〕



遺物(第18図3)出土状況〔北東から〕

図版 8



地中梁遺構検出状況〔南西から〕



地中梁遺構(柱)検出状況〔南西から〕

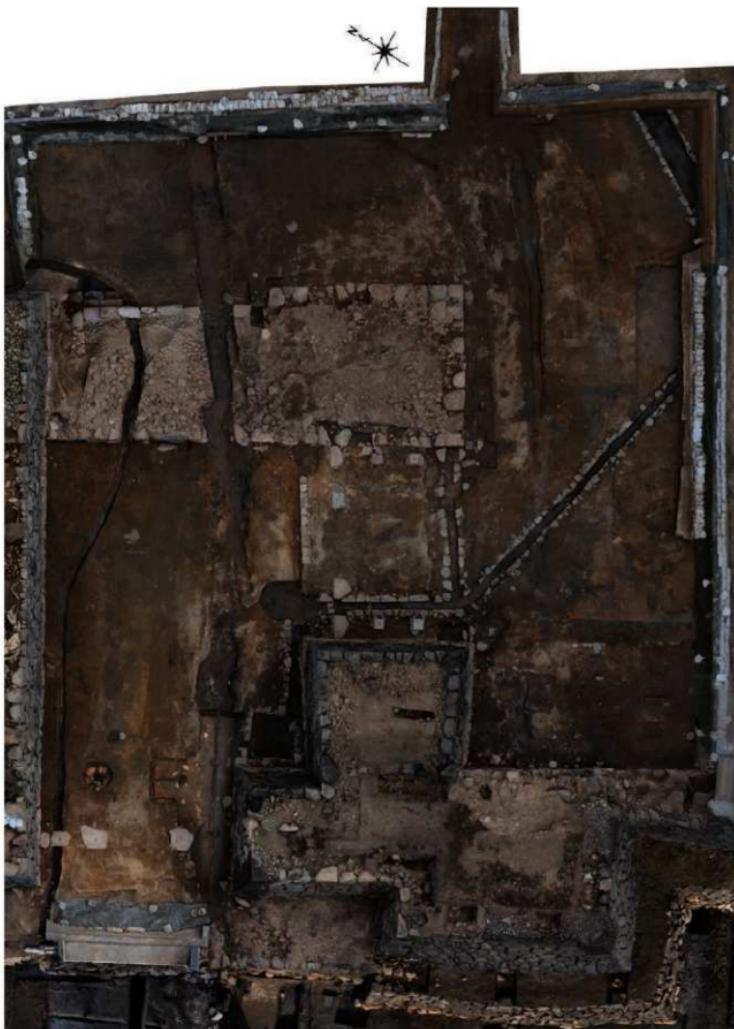


地中梁遺構土層断面〔南西から〕



第1調査区オルソ

第1 調査区



第2調査区オルン

図版 10



表門全景[南西から]



表門礎石3[南西から]



表門礎石4[南西から]



表門礎石1・2[南西から]



表門礎石4側面[南から]

第2 調査区

図版 11



表門控柱2〔南西から〕



表門控柱1〔南西から〕



表門礎石・控柱〔南東から〕



楕形石垣内部〔北から〕



楕形石垣内部〔南西から〕

第2調査区

図版 12



樹形内部〔南西から〕



権門正面礎石・石列〔南東から〕



石列前瓦廃棄状況〔南東から〕



石列前土層断面〔南東から〕

第 2 調査区



御番人小屋跡〔南西から〕



雨落溝検出状況〔南から〕



雨落溝・礎石検出状況〔北東から〕



礎石 4 検出状況〔北から〕

第 2 調査区

図版 14



溝1[北から]



溝2・3・4(一部)[南から]

第2調査区



溝4-5接続部〔南東から〕



溝5・樹①〔南東から〕



樹遠景〔北から〕



溝5・樹②〔南西から〕

第2調査区

図版 16



表門礎石4～溝6[西から]



雁木[北東から]

第2調査区



楕形石垣奥壁前瓦廃棄状況〔南から〕



甕(第43図20)検出状況〔東から〕



調査風景〔南東から〕



近代水路〔西から〕



近代水路土層断面〔南西から〕



溝検出状況〔北東から〕

図版 18



第16図 1



第16図 2



第16図 3



第16図 4



第18図 1



第18図 3



第18図 7



第20図 3

図版 19



第20図 7



第26図 5



第26図 6



第26図 9



第27図 14・18、第28図 33・34・35

図版 20



第27図15



第27図17、第28図24



第27図10・12・13・20、第28図26・28・29



第29図3



第30図8



第30図10・12・13、第31図14・15・17



第32図21



第32図22・23



第33図4・5、第85図5・6



第33～35図

図版 22



第38図 1



38-2

第38図 1・2



第38図 4



第39図 9



41-4

41-5

第41図 4・5



第41図 10



第41図 12



第41図 13

図版 23



第44図21



44-24

44-34



第44図28・31・32・38



第45図42・43・44・46・47



第46図1・2・6



第48図22



第48図24

図版 24



第49図 1・2・3、
第85図 1・3・4



第49図 9・10、第76図 1、
第85図 7・8



第52図 1



第53図 7・8・9

図版 25



第60図 1・2・3・4・5・6



第60図 2・3

第60図 5



第60図 6

第60図 8

図版 26



第61図7・9・12、第62図13・14



第62図1



第64図5



第65図12



67-19

66-17

第66図17、第67図19

図版 27



第63図3、第69図1・2、第70図16・17、第71図18・21、
第72図23・26、第73図27・28・29、第74図32

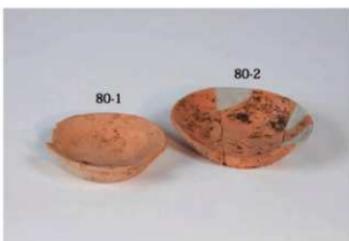


第75図35

図版 28



第70図11・12・13・14・15



第80図1・2



第80図9



第80図10



第80図11



第80図12



第80図13

図版 29



第81図16



第81図20・21・22



第81図24



第81図27



第82図30



第82図34



第82図35



第82図36

図版 30



第82図37



第82図39



第82図40



第82図41



第82図42



第82図43



第84図1



第84図12

報告書抄録

ふりがな	しせきとっとりじょうあとつけたりたいこうがなるはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅲ						
副書名	第34次発掘調査						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	坂田邦彦						
編集機関	鳥取市教育委員会						
所在地	〒680-8571 鳥取県鳥取市上魚町39番地 TEL (0857)20-3367						
発行年月日	西暦2016年(平成28年)3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド	北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
鳥取城跡 附太閤ヶ平	鳥取市鳥取町 2丁目地内	31201 市町村	35° 30' 22"	134° 14' 14"	20140722 ～ 20150327	1,860m ² (1区 760m ²) (2区1,100m ²)	史跡鳥取城跡 復元整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
史跡鳥取城跡 附太閤ヶ平	城郭	江戸	石垣 門跡 水路 階段	陶器 磁器 瓦			

史跡鳥取城跡附太閣ヶ平発掘調査報告書Ⅲ
—第34次発掘調査—

発 行 2016(平成28)年3月31日

編 集 鳥取市教育委員会文化財課
鳥取県鳥取市上魚町39番
〒 680-8571 電話(0857)20-3367

印 刷 有限会社タクミコーポレーション
鳥取県鳥取市千代水1丁目85番地
〒 680-0911 電話(0857)24-6288
